

---

# MY LIFE OF SIMPLE

夜島 凛矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MY LIFE OF SIMPLE

### 【Nコード】

N8906D

### 【作者名】

夜島 凜矢

### 【あらすじ】

その辺にいるような高校2年生、凜矢<sup>りんや</sup>。彼を中心にして少しずつ変わる日常。そんな変わらないように変わっていくSIMPLE LIFE（普通の生活）をどうぞお楽しみください……………。

## 第0話：プロローグ 夢の中…（前書き）

初めての連載です。

一応15禁って感じで書くつもりです。（変わるかもしれないけど

…。）

下手な点もありますのでいろいろと意見などをお願いします。

m (・・) m

## 第0話：プロローグ 夢の中…

少女がいた……。

向かい側には少年がいて砂の城を作ってる。その少女は微笑みながら砂の城作りに奮闘する少年を眺めていた。とても微笑みが似合う可愛い少女だ。

そんな事を思っていたら不意に少女が口を開いた。

『凜くん、いつか私をお嫁さんにして?』

『いいよ なっちゃん』

少年は屈託の無い笑顔でそう言った。

『約束だよ? はい、指切り』

『うん』

少年と少女は互いの小指を絡め合い、約束を交わした。

憶えてる…。懐かしい公園、懐かしい空、懐かしいあの日、たしかこの約束から1週間後ぐらいに少女は引越した……。忘れるはずが無い。僕の初めての恋だったんだから……。

少女達を見ながらそんな事を思っていた。

急に世界が少しづつ白くなっていく。夢の終わりを、新たな今日を告げるために…。

覚醒していく意識の中で、僕は少年と少女が付けている銀色の腕輪ブラチナをじっと見つめていた……。

これが日常……でも、その日常が少しずつ変わってきていることを僕はまだ知らなかった…。

【~~~~~】

携帯のアラームで俺は目を醒ました。

また、朝が来た。

変わらない朝。でも今日はいつもより気分がいい。懐かしい思い出を夢に見れたから。

でも、今までそんな夢は見なかったのに……なんかあるのか？  
まあ、考えたところで分かるはずはないけど…。

「今日も学校か、めんどくせえ……」

そして、今日が始まった……。

第0話：プロローグ 夢の中…（後書き）

今後ともよろしくです♡（♡・♡）♡  
♡

第1話：目覚めと朝　幼馴染み…（前書き）

さて、第1話が完成しました。

まだ、どれぐらい書いたらいいかが定まらないのでたしょう少なかつたり多かつたりするかもしれません。  
それでは第1話どうぞ。

## 第1話：目覚めと朝 幼馴染み…

「ふああゝゝあ」

かなり眠い、いやマジで。

気分は確実にいい。なのに眠い。いや、むしろ気分がいいからこそ眠いのもかもしれない。いや、きっと敷布団閣下と毛布王妃が俺を暖かい愛情で包み込んでくれるからだろ。いやいや、もしかしたら昨日の夜更かしが原因zy…………ぐう…。

「起ツきろー……………ッ!」

「グシャ、ドカバキボコバシバシバシバシバシバシバシバシバシバシ」

「おはよー 凜兄いー」

「ああ、おはよう、未来」

こいつは妹の夜島<sup>やじま</sup> 未来<sup>みく</sup>。俺の一個下で今年から高校1年生になるピッチピチの新生だ! しかもなんの因果か俺と同じ学校だ。

まあ、今さらだが俺も自己紹介だ。俺は夜島<sup>やじま</sup> 凜矢<sup>りんや</sup>。まあ、ただの高校生だ、よろしく!

それより、なんか忘れてる気がする……………ピコーン!

「思い出したッ! 未来ッ、テメエ殴って起こしやがったな!!? マジで痛エんだぞ!？」

「だって呼んだけど起きないんだもん! 凜兄が悪い!」



「ああ！？だからって実の兄を殴るとはいい度胸じゃねえk……ごめんなさい……」

「分ければよろしい」

いや、だってマジで怖いし。口は笑ってんのに目笑ってないし。なんか挽き肉にするぞって感じの眼力（アイビーム 俺、命名）をひしひしと感じるし。たぶん目を合わせたら俺は死ぬるかもしれない。「今日は始業式なんだから早く朝食食べよ？せつかく私が作ってたんだし……。」

そう、俺の家は今、俺と妹の二人暮らしだ。父親は仕事で地方を転々とし、母親はその付き添い兼仕事仲間だ。まあ、近くの際は3ヶ月ぐらいでヒヨロツと帰ってきたりするし、不定期だがメールもきたりするし、仕送りもしてくる、なんだかんだ言っている両親って事だな。

変わり者ではあるが……。

「凜兄いーッ、早くいーッ！」

「今から行く！」

さてと考え事しながらでも着替えちゃったしそろそろ行くか。時間もヤバイし。

「おっと、忘れるところだった」

ドアノブをひねりかけて大事な物が無いことに気付いた。

「これだけは忘れないようにしないとな」

左腕にその銀色の腕輪ブラチナリングをはめて一階に向かった。

「さて、そろそろ行くか」

未来が毎日作ってくれる朝食を感謝しながら食べ終わった俺はそろそろ学校に行こうと未来に言った。

「うん、そうだね 時間もキツくなってきたし」

さて、未来の了承も聞いたし、マジで行くか。

家を出た時、ちょうど前の家から女の子が出て来た。

「おはよ、凜矢」

「ああ、おはよー麻美」

この活発そうなショートヘアの女の子は穂村ほむら 麻美あさみだ。小さい頃から俺の家の前に住んでいてまあいわゆる幼馴染みだ。けっこう可愛い顔をしてはいるからかなりモテはするんだが、いかんせん……ジ……。

「何、胸見てんのよッ!」

「いや、胸が無いなって……ボコッ」

「大きなお世話よッ！」

殴られた。そんなに気にしてんのかな？まあ、小さいよりは大きい方がいいが、小さいには小さいなりに長所と言うものが……

「なにニヤニヤしてんのよ……」

「いや、小さい胸も可愛いげがあっていいなって思っで。」

「な、なななに言っでんのよッ！変態ッ！」

【ボスボスボスボス】

「痛ッ！わ、悪かった、俺が全面的に悪かったからッ！」

「分かればいいのよ……分かれば……」

まったく、褒めたのに普通は殴るか？まったくもって意味が分からん。

「はあ、さっさと行こうぜ？未来、麻美」

「了解ッ」

「わかったわよ……もう……」

そして俺達はいつもの通学路を妹も含めた三人で歩くのだった。

三人で学校に向かっていると、曲がり角につっ立っているよく見知った人物を発見した。

「よッ、直樹。何やってんだ？」

こいつの名前は姫宮<sup>ひめみや</sup> 直樹<sup>なおき</sup>、高校に入ったすぐに一番最初に話かけてきやがった奴だ。しかも、こいつは顔がイケメンの割に『俺は絶対エロゲの主人公的男になる!!』とかほざいてる変態だ。そのせいでまったく女子にモテない。もったいない奴だ…。

「あ?… ああ、なんだ凜矢か。何してるかって? 見て分かんない?」

「曲がり角でキョロキョロしてるとしか分からんが?」

実際、こいつはキョロキョロしてた。もし俺じゃなくて別の誰かだったら捕まってるな確実に。

「で? 何してんだ? 遅刻するぞ?」

ここから学校まではそんなに離れてはいないが時間が時間だけにそこまでゆっくりはしてられない。

「はあ、コレだから凡人は困る… 待つて、謝るから殴ろつとしないで」

こいつに凡人とか言われるとかなりムカつく。と言うよりこいつにバカにされるとかなりムカつく。

「で? 何やってたんだ?」

「はあ、今日は何の日だ?」

今日? 今日…

「今日は始業式だよ」

未来が先に答えてしまった。まあいいけど……。

「そう！その通りだよ未来ちゃん！今日は新学年の始業式、新学年の始業式と言えば、出会いだよ！！」

「『出会』い？」

「そう、新学年の始業式と言えばエロゲの王道！遅刻しそうな美少女と曲がり角でぶつかるハプニング！なぜか怒られて、知らぬまにいなくなってる謎の美少女！そして朝のホームルームで再会する二人！そして始まる二人の恋！そして築きあげるハーレムアイ……」

「遅刻しちゃうしそろそろこんなバカ置いてとっとと学校行こう、未来、麻美」

いささかこいつのバカさ加減に疲れを憶えた。

「了解ッ、聞いてて疲れるしね」

「うん、こんな変態にかまう必要はないって、ホントに呆れるほど救いようの無いバカさだよ……」

二人と同じことを思ってたらしい。当たり前だが……。

【ボコッ】

麻美がバカを殴ってから俺の隣に来た。

「しかし、ホントに遅刻しそうだな？なあ未来、時間大丈夫そう？」

「うーんと、まあ大丈夫かな。……このまま平和に行けば……。」

なんだ、その間は…。

【タッタッタッタッタ】

「わーッ、どいてーッ！」

なんだ？誰かの声が聞こえた気が…

【ドシンッ】

「「痛ッ！！」」

「「あゝあ、やっぱり」」

女の子がぶつかってきやがった。まあ、俺はそんなに痛く無かったんだが……。

なんで痛ッって叫んだかって？……ノ・リ・さ

うん、けっこう可愛い女の子だな、背も小さいし小動物みたいだ。リボンからすると1年か。俺の通う高校は、学年によって女子はリボン、男子はネクタイの色が違う。

「いっつつ」

「大丈夫か？怪我は？」

「えっ？あ、はい、ありません……いっ……」

「やっぱり痛いんだろ？見せてみ？」

「えッ！？い、いや、いいです、けっこうです、大丈夫ですから、それじゃッ！！」

女の子はシュタッて疑問符が着きそうなぐらいの速さで駆けて行っ

た。

「あっ！ヤバっ！遅刻しそудだよ！？凜矢」

「マジか！？何時！？」

「今はねー8時20分だよ？凜兄い」

ここから高校まで10分ぐらい、ホームルームが始まるのが8時30分、でも、門が閉まるのは25分だから…残りは5分！？

「マジでヤバイじゃねえか！ダツシュだダツシュ！！」

「初日からダツシュなんてな」

「うわっ、最悪だよもう…」

俺達はダツシュで走り始めた。

一人の変態バカを残して……。

- N a o k i   H i m e m i y a -

「チクショーツ！なんでアイツがちゅっかりぶつかってんだよーッ！！」

直樹が遅刻したのは言うまでもない……。

第1話：目覚めと朝

幼馴染み…（後書き）

感想等は作者の励みになるのでみなさんでできるかぎり送ってください。



第2話：転校生！！

まさかな…（前書き）

なぜか3日かかってはまだ朝なのだろう？

まあ、それはさておき

第2話どうぞ～

## 第2話：転校生！！

まさかな…

なんとか学校を遅刻せずに済んだ。俺が通うこの学校の名前は松浜<sup>まつはま</sup>学園<sup>がくえん</sup>。俺達が住んでいる松浜島<sup>まつはまじま</sup>の中心地近くにある島唯一の高校だ。島外の高校に行く人以外、ほとんどの人が通っている。と言ってもそんなに都会みたいにごったがえすほど人は居ないからそこまでたくさんいるわけではない…。

生徒玄関に着いた俺達は未来とはなれて2年生の階へと向かった。

「今年は違うクラスかな？」

「んゝ、さあな。でも、知らん奴が多いよりは知ってる奴が多い方が俺は嬉しいけどね」

「ふゝん、ま、まあ私は今年ぐらい違うクラスもいいと思うけど」

「はいはい、わかったわかった。とっとと見に行こうぜ、走って疲れてんだよ…」

そして俺達は人がひしめく掲示板前へと足を進めた。

「マジでこったがえしって感じだな。」

「そうね、なんとか見えない事もないけど…」

俺は軽く溜め息を吐いてから自分の名前を探した。

…… ああ、あったあった。2 - Aか…… 知り合いはいるかな？

「あつ！私、また凜矢と同じクラスね」

「ん？そうなのか？」

麻美の名前を探してみると確かに2 - Aに名前があった。しかもだ  
いぶ、去年同じだったクラスの奴もいるみたいだ。

うわッ、あのバカもか……

俺は今日の朝置いてきたバカの名前を見つけてしまった。つか、ア  
イツはまだ来てないのか？

「そろそろ教室入ろうぜ？」

「あれ？もつと見なくていいの？」

「まあ、お前がいるし充分だろ」

実際俺はそう思った。けっこう小さい時から一緒に居たからか最悪、  
同じクラスに知り合いが麻美だけでも寂しいとは思わない。

俺は麻美と一緒に2 - Aの教室へと向かった。

教室の中はまあまあ人が居たが席はけっこう空いていた。この松浜  
学園はクラス替え後の席は自由なのだ。しかも奇跡的に窓側の一番  
後ろの席が空いていた。俺は一直線にそこに向かい、鞆を下ろして  
座る。ちなみに麻美は窓側から2列目の一番後ろの席、つまり俺の  
隣に座った。俺はぼろろと窓の外を見ながら、今日の夢の事、朝  
ぶつかった女の子の事を考えていた。

「おはよー、麻美ッ！ねっ、ビッグニュース聞きたい？」

声が聞こえて隣を見てみたら麻美の親友で同じ剣道部の今井 美香  
がなぜか嬉しそうに麻美に話かけていた。そういや美香はそうゆう  
噂系の事が好きな女の子だったな。

「おはよー、美香。で？ビッグニュースって？」

「それがねっ、このクラスにっ！」

「このクラスに？」

「…転校生が来るらしい……」

「えッ？」

「ちよつとーッ！私が教えようとしたのにーッ！」

「…早いもの勝ちだ……」

このなんとも言えないクールなメガネは橋本 和磨。知的でクール、  
しかも美形でなかなかモテる、俺からしたら憎むべき敵だ…。

「…おはよう、凜矢……」

「ああ、おはよう、和磨。ところで、その転校生って？」

「なんでも、女の子らしいのよッ！」

「らしいってやっぱ噂なのか？」

「…いや、本当らしい…詳しくは知らないがどこぞの奴が職員室で  
聞いたそうだ……」

「へへ、可愛い子なの？」

「うんッ、美少女って噂ッ！」

「ふうん、そうなんだ」

「あれっ？凜矢くんは興味ないのッ!？」

「いや、興味はあるけどね……ちよつと……」

「……まあ、凜矢がそう言うならいいが……気になる事でもあるのか……」

「いや、まあ」

実際直感的にもしかしたら今日、夢に見たなっちゃんが転校するんじゃないかと思っただが、まさかなと結論づけてその仮説は考えない事にした。

しばらく話しているとチャイムがなりそれと同時に先生が教室に入ってきた。今まで騒いでいたみんなも先生の姿を確認するとバラバラと席に着いた。

「はい、んじゃホームルーム始めるよ。まずは私の自己紹介、私は桜井さくらい 桃華ももか、よろしく。それじゃ、皆も自己紹介しといて。」

廊下側からの自己紹介が始まった。

この先生まったりしてて、けっこうアバウトな人だな。まあ、何は

ともあれ美人だ。明るい感じでナイスバディだし……つと、危ねえ見惚れそうだったぜ。

そういや、直樹の奴いないな。アイツ初日から遅刻かよ。と、運動場の方を見る。なんか先生に囲まれてる生徒がいるなあ。きつと門でも乗り越えたんだろうな。バカな奴、直樹でもやんねえよそんなバカな事。しかも、竹刀持ってるんの生徒指導じゃん、その生徒土下座してるし、竹刀で叩かれてるし。ホントのバカだろうな、あの生徒。

あ、逃げ出した……。しかも速いな足、砂煙まってるし……。

面白いもんも無くなったところで自己紹介に集中する。そろそろ俺の番か……。

俺は椅子から立って言った。

「私の名はムスク…… じゃなかった、俺の名前は夜島 凜矢です。よろしく」

危ねえ、変なノリで危ない名前喋るところだったぜツ！

「それじゃ、一通り自己紹介は終わったね、んじゃ次に転校生……」「おっはよーッ！凜！矢！くーん！！」……

「だーッ！朝っぱらから人の名前を大声で呼ぶんじゃないやねえッ！！」

「いやさ、聞いてくれよ！遅刻しそうになって門を乗り越えたらさ、生徒指導がいたんだよ！？マジで着いてないよね！土下座してるのに竹刀で叩いてさ！あれは確実に体罰だよッ！！」

アイツだったのかあのバカな生徒は……そうだな、アイツ以上のバカなんていないよな……少しでもアイツじゃないと思った俺がバカバカしい……。

「……え〜と、それじゃ〜姫宮君自己紹介どうぞ〜」

なっ、この状況で自己紹介を優先させるとは以外に健気けなげなんだな。

「はい、俺は姫宮 直樹だ。好きな物はりんご、嫌いな物は辛い食べ物だ。そして、俺の夢は…「はい、時間無いからそこまでね〜」…グスン…」

今度は先生が話を途中で遮った。なぜか誇らしい顔をしているのはきつと、目には目をやり返す主義なんだろっ…。遮られたバカも軽く泣いてやがる。

「それじゃ〜、時間が無いんで先に進みますね〜。今日から皆と一緒に授業を受ける転校生さんです。どうぞ〜。」

そして、ガラガラと教室のドアが開きなんても美少女な女の子が姿を表した。

「うおおおおおッ！！！！」

男子共があまりの可愛いさに雄叫びをあげた……マジでうつせえ…。

「初めまして、私の名前は転てん校生こうせいです」

「待ていッ！完ッ壁に嘘だろッ！！その名前はあッ！！」

「え〜ッ！嘘なの〜ッ！？」

男共のさじがとんだ。

マジでそうだと思ってたのか…。こいつらはそんなにバカだったのか…。

「ゴメンなさい。嘘です」

女の子はまるで悪戯を見つけた悪戯っ子みたいにえへへと笑った。俺はその女の子の仕草を知っていた。小さい時に見た、あの悪戯っ子のような笑い方…。

「初めまして、私の本当の名前は柊<sup>ひいらぎ</sup>夏芽<sup>なつめ</sup>です。これからよろしくお願いします」

その女の子は今朝に見た夢の、なっちゃんその人だった。

「よろしくね、凜くん」

そしてまた少し俺の日常が変わるのだった……



第2話：転校生！！

まさかな…（後書き）

意見や感想をできるだけ書いてくれると助かります。  
いろいろと参考にしたいんで…

第3話：屋上とサボ 美人発見！…（前書き）

毎日更新を頑張り中です  
やっと放課後になりました  
直「まだ昼だけどん…」「これからの出番…。」「…ごめんなさい。」  
それでは第3話どうぞ

第3話：屋上とサボ 美人発見！…

俺は今走っている…。

そりやもう全速力で……。

なんでかって？

それはだな…

「デメエー…ッ！！…いつの間に夏芽ちゃんと仲良くなりやがったんだー…ッ！！！」

とまあこんな感じで男共の醜い嫉妬心により、またもや走る羽目になってしまった。

「デメエー…ッ！！…朝は女の子とぶつかってやがったくせに、今度は転校生と知り合いだッ！！？貴様は全男の敵だー…ッ！！！」

「そうだ、そうだー…ッ！！！」

俺は振り返り様に朝の事を暴露しやがったバカに正拳突きを喰らわせてやった。

「デメエなんて…へぶしッ……！」

「……………」

俺は他の野郎共が固まってる間にとつとと逃げる事にした。

そっぴや俺の拳が直樹の顔にかなりめり込んだが大丈夫だったかな？

凜矢は逃げる事で精一杯で知らなかった。直樹の顔が凜矢の拳により凹んでいた事を、そしてそれを見た他の全員が絶句し追いかけるのを止めた事を…。

「よしッ！追っ手も来てないし屋上にでも行くか…」

ん？始業式？そんなのはサボだサボ。

俺は屋上へと向かった。

【キィィッ】

多少錆びれたドアを開くとそこには待ち伏せていた野郎共がッ！…  
って事もなく、かなり広い寂しい空間にいくつかのベンチがあるだけの全然面白くもなんともない空間があった。

でも、俺はこの空間がけっこう好きだ。昔、誰かが飛び降りた…  
てわけではないがほとんど人が来ない。俺もこの場所に来る時、今までに一度も人にあつた事はない。

そんな場所に入るとビュウッと一陣の風が吹いてきた。

「え……？」

人が居た。腰まである黒髪、凜としたたずまい、そしてぱつと見で綺麗だと分かる顔に特徴的な泣きぼくろ…かなりの美人だ…。

「誰……ですか…？」

「あ……ワリィ。誰かいるとは思わなかったんだ、委員長。」

この娘は神楽 百合

去年も今年も同じクラスで去年は委員長をしていた。しかも成績優秀で人柄もいい、なかなかに凄い人だ。  
しかしいつの間に此処に来てたんだ？

「なあ、いいのか？こんなとこに居て？」

「？…なんですか？」

「なんでって、お前はけっこう真面目だから……。」

「たまには休憩も必要ですから……。」

「ん〜……まあ、いいか。」

「一緒にサボしませんか？」

俺がサボるをサボって言うのは百合が原因なんだ。まあ、余談だが……。

「ああ、そうさせて貰うよ。」

俺はベンチに座っている百合の隣に腰掛けた。

「しかし、此処に人が来るとは思わなかった。」

「そうですか？他の人はともかく私はよく来ますよ？」

「そうなのか？初めて知った。なんで今まで会わなかったんだろ？」

「私がいつも、此処とは反対側の方に居たからですよ。」

「マジで？」

此処は扉を開いてずっと真っ直ぐ来た場所、此処の裏側だから扉のある場所の後ろか……そりや会わないわけだ……。しかも俺は大半寝てるかボくっとしてるし……。

「…クスッ」

「ん？何笑ってんだ？」

「いえ、またボくっとしてると思って」

「……もしかして、今までも何回か見てた？」

「ええ いつも寝てるかボくっとしてたから、邪魔しちゃ駄目かなって……」

「マジデスカ……」

「マジです」

最悪だ……。人に寝顔とかは見られなくなかったのに……

「可愛い寝顔でしたよ？」

「死んでもいいですか……」

恥ずい、マジで恥ずい……。しかも的確に、その事を考えた瞬間に言

いやがったから余計に恥ずいじゃねえか…。

「ふふふつ そんなに気にしないで、ね？」

「気にするってば、そりゃ…」

「私は…好きですよ？」

「えッ！？」

ええっ！？好きっ！？

「あッ！ちがッ！ね、寝顔がつて事です！！」

「あ、ああ。…わかつてる…。」

びっくりした。マジで告白かと思ったぞ。まあ、寝顔でも百合みたいな美人に好きって言われたらそりゃ嬉しいけど…。

百合は耳まで真っ赤になりながら俯いてしまった。  
俺は話を逸らそうと百合に話しかけた。

「そろそろ戻るか？始業式もそろそろ終わるだろうし…。」

「あつ、うん、そうだね それじゃあ一緒に行こう？夜島くん」

「ああ、そうだな、委員長…。それより…今、タメ語で喋って…た？」

「え？あつ、ご、ごめんなさいっ！や、やっぱり先に行ってますね

…それじゃあ、また教室でっ！」

「え、あ、委員長ッ！？おゝいッ！」

行っちまった…。そんなに俺へのタメ語は抵抗あるのかな？ちよつとシヨツクだ…。もし照れ隠しだったとしたら…。いや、無いか…。俺なんかを好きな可能性なんて…

「俺もそろそろ戻るか…。」

俺は教室へと足を進めた。

俺が教室に戻ってきた時にはほとんどの人が戻ってきていた。百合もちゃんといるな。

「よう、サボリくん」

「よう、和磨、どうだった？校長の長話は」

「…ああ、凜矢か……。…相変わらずの無駄話だったよ…まったく…。…それより凜矢はサボってたみたいだね……。…」

「おゝい、凜矢…？」

「まあ、さすがにあの長話は聞くだけ時間の無駄だしな。」

「…同感ではあるね……。…もっと皆の事を考えて欲しいものだよ……。…でも、凜矢も無駄に過ごしたんじゃない？……。…」



「おーい！凜・矢・くん！？」

「いや、それほど無駄でもなかったよ。いろいろと楽しかった」

「しかとすんなあーッ！！」

「…そうかい？……。…神楽さんとなんかあったのか？……。」

「なあにいーッ！？今度は神楽さんだあーッ！？こんの女たらさ…  
ガスッ…。」

「ああ、まあな…でも、なんで？」

うざいからバカは殴っておいた。

「…いや、彼女も始業式に出なかったからね……。…それに、いつもなら感想を聞いてもまあただで済みますからね……。」

「くそうッ！なんでなんだッ！？なぜ、サボ凜矢のくせにこんないいおもいをおおッ！？」

【ドスッバスッガスッベキッピーーーーッ（残酷な表現によりかぶせます）バスン】

「……………」

バカは確実に沈黙させた。

「で？何があつたのかを聞きたいのか？」

「…いや、そんな無粋なことはいないさ……。…それに、神楽さん

もなんだか嬉しそうだしね……。」

「そうか？まあ、それならそれで俺も嬉しいがな。」

百合の方を見てみると他の女の子と楽しそうに話していた。  
ふと、百合と目が合った…。

彼女は目が合うと少しだけ顔を赤くしてすぐに逸らせてしまった。  
うーん、やっぱりさっきの影響してるのかな？

「はい、皆席着いて〜」

そんな事を考えてると先生が教室に入ってきた。

「きゃっ…姫宮君〜？こんなところで横になってないくださいね〜」

バ力はまだ寝ているらしい。

「ふああ〜あ、良く寝たあ〜。」

ホントに寝ていやがった。つか、殴ったのに…こいつは不死身か？

「ねえ凜矢、始業式どこ行ってたのよ？」

隣の麻美が話しかけてきた。

「ん？いつもみたいに屋上でサボしてた。」

「百合は？確か百合も始業式いなかったけど…」

「ああ、委員長は屋上で俺と一緒に居たよ。軽く話してた…。」

「ふ、ふん、そうなんだ。よかったわね、百合と一緒にいれてッ……」

「何怒ってんだ？まあ、美人と二人つきりなんだから嫌なわきゃないけどな……」

「なによ、デレデレしてッ。変態ッ！バカッ！もう知らないッ！」  
「なんなんだ？いったい……」

今日は授業が午前だけしかない。  
と言うことは部活に入っていない俺は速攻で帰れるわけだ。

「麻美はこれからどうすんの？」

「ん？今日から普通に部活だから一緒に帰れないわよ？」

「そっか……」

「麻美ーッ！さっさと行こーッ！」

「わかったーッ、今行くーッ！、とゆうわけじゃあね」

「ああ、しつかりな。」

「了ー解ッ」

麻美は美香と一緒に部活に向かってしまった。

和磨でも誘うか？いないと思うけど…。

案の定、和磨の席には鞆は無く軽く見回しても姿は見えなかった。  
まあ、アイツは放課後になったらすぐいなくなるからな、用がある  
時以外…。

未来でも誘って帰るか…。

「ねえ凜くん、一緒に帰らない？」

「ふえ？」

唐突な事に間抜けな声を出してしまった。

「いや、せっかくまた会ったんだから一緒に帰りたいなって」

「あ、ああ、いいよ。それじゃ、行こっか。」

「うんッ」

俺はなっちゃんと一緒に家に帰る事にしたのだった。

第3話：屋上とサボ 美人発見！…（後書き）

ふゝなんとか頑張ってます

そろそろ1日ぐらい終わらせないと話が進みません（＜|＞）  
感想等よろしくお願いします

**第4話：再会の喜び      会えた事に感謝…（前書き）**

さて、なんとか1日が終了しました。

これからどうしたものか…。

これからも頑張って書くのでよろしくです

それじゃ第4話どうぞ

#### 第4話：再会の喜び      会えた事に感謝：

俺となっちゃんは家に向かって歩いてた。

「そっぴゃ、なんで戻ってきたの？」

「なに？戻ってきてほしくなかったみたいない方ね？（ニヤニヤ）」

「いや、えっと、そういうわけじゃ…。」

「えへへッ、わかってる…私が戻ってきたのはまたお父さんがこつちで働く事になったからなんだ…。」

「へえ、そうなんだ？」

「うんッ！またよろしくね 凜くん！」

「ああ、こつちこそよろしく」

俺達は互いに握手をした…。

「あッ！まだそれ着けててくれたんだね！！」

「ああ。まあ、俺にとっては凄く大切な物だからね そっぴゃなっちゃんも着けてるみたいじゃん」

「そりゃ、私の一番大事な物だもん」

「ははははっ」

「えへへへっ」

俺達は懐かしさと嬉しさから互いに笑い合った。

「あつ、そういえば……。」

「ん？どうしたの？ なっちゃん」

「えっと、さ……そのなっちゃんは止めない、かな？」

「なんで？……」

「いや、嬉しいんだけど……久しぶりに聞くと凄く恥ずかしいんだよね……。」

「ああ、わかった。それじゃあ、名前で呼べばいい？」

「うん 出来ればそうして？」

「わかったよ……、夏芽……。」

「う、うん ありがとう凛くん」

- Natume Hிரagi -

久しぶりにあった凛くん。彼は凄くカッコよくなっていてびっくりした。



「わかったよ…、夏芽…。」

【ドキンッ】

胸が凄く高鳴る…。凜くんに名前を呼ばただけで…こんなときめくなんて…。

「う、うん　ありがとう凜くん」

「どういたしまして」

【ドキンッ】

…また…。そんな笑顔で微笑むから…また、胸が高鳴って…苦しくなる…。

不思議な感じ…。今まで感じた事なかった…。凜くんだから感じるの？この苦しいはずなのに全然苦じやない不思議な感覚…。これってもしかして…。

- R i n y a   Y a z i m a -

夏芽は、急に様子がおかしくなった…。

「どうした？大丈夫か？」

俺は急にそわそわしだした夏芽に聞いてみた。

「えッ！？あ、うん、だ、大丈夫だよ！？全然ッ！」

「ホントかよ…。」

「ほ、ホントだよ　大丈夫ッ！」

「ならいいんだけど…キツかった言えよ？」

「心配してくれてありがと　でも、ホント大丈夫だから…」

「わかったよ……と、そろそろ俺ん家だ…」

目の前に俺のマイホームがどんどん近づいてきていた…。

これで、夏芽と一緒に帰るのも終わりか……いや、これから同じクラスなんだしまたこれが最後ではないか…。

でも、寂しい感じがするな…。

「へえ、まだあの頃と家は変わってないんだね？」

「そりゃ、そう簡単に家が変わっても困るだろ…。夏芽の家も前と同じなのか？」

「うん　だからここからも近いしけっこう遊びに来るかもよ？」

柊家は俺の家から3分ぐらいのけっこうな近所だ…。そのため、小さい頃のほとんどを俺は夏芽と未来と過ごしていた…。

麻美と遊び始めたのも夏芽が引越してしまってからだった…。

「夏芽なら大歓迎だって…。それとも今から寄ってくか？昼飯ぐらいなら作ってやれるぞ？」

「うわぁ、凛くんが軟派な性格になった」。

「ちよっ、待てや…。別にそんなつもりじゃ…」

「なかったの？ホントに？」

「…いや、ちょっとあったのかも…」

「ほらあっ！やっぱりあるんじゃない！」

「いや、もう少し一緒に居たいなって思ったただけだからッ！下心はないからッ！」

「えッ？ホントッ？」

「ああ、ホントだって。下心は全然無いよ。」

「ううん、そっちじゃなくて、もっと一緒に居たいって…。」

「あ、ああ、うん、それはホントだよ…。せっかく10年ぶりに会ったんだしね。」

「それだけ？」

「？やけに食いつくな？」

「ああ、そうだけど？」

「そうなんだ……………今日は止めとくよ、引越しの片付けも終わってないし…。」

「それじゃあ、手伝おうか？」

「いいよ、もうほとんどないし」

「そう？ならいいけど…」

「うん、ありがと それじゃ、また明日ね バイバイッ！」

「ああ、バイバイ。」

俺は彼女が見えなくなるまで彼女の背中を見つめていた…。

しかし、どうしたんだ夏芽は？下心あたりからなんだかちよつと暗かったけど…。

でも、もつと一緒に居たかったのはホントかな。凄く可愛くなってたしなんか、普通の仕草が可愛いって思うんだよね。まあ、これからもチャンスはあるか…。

そんな事を思いながら、俺は家の中に入る事にした…。

「ただいま」

夕方近く、未来が買い物袋を持って帰って来た。

「おかえり」……なんだ、買い物してきたなら言ってくれれば手伝ったのに…。」

「大丈夫だよ、凜兄い。友達と遊んだ帰りについでに寄っただけだから」

「その友達は男なのかッ!？」

「ん？違うよ、凜兄い。中学からの女友達」

「そうか…ならいいんだ…。」

「まったく…シスコンなんだから…。凜兄みたいな人じゃなきゃ私は彼氏にしないよ」

「ふふっ、お前も充分ブラコンみたいだな」

「凜兄いのせいだよ？」

「あ？…なんでだよ？」

「え…もしかして自分で気付いてないの？」

「は？だから何が？」

「はあ、なんでもないです…。」

なんなんだ？いったい…。わけが分かんねえよまったく。

「そろそろ夕飯準備するから、お風呂でも入って来たら？」

「ん、わかった。風呂出たら手伝うわ。」

「うん、ありがと」

俺は風呂場へと向かった…。

「まったく…自分のカッコよさに気付かないって…変に鈍感なんだから…。彼氏を作ろうとしても凜兄いと比べちゃって…そのせいで彼氏が出来ないのも、きつとわかってないよね……。しかも私なんて、麻美さんよりも長い時間凜兄いと時間を共有してるんだから…かなり辛いよ……。」

未来のその眩きは誰も居ないキッチンに吸い込まれていった。

第4話：再会の喜び 会えた事に感謝…（後書き）

これからも毎日頑張ります!!

## 第5話：春 眠

眠い…（前書き）

次は球技大会編です。  
それじゃ第5話をどうぞ



【~~~~~】

眠い…。昨日は夏芽が引越して来たし…下級生と朝からぶつかったし…バカはバカなままだったし…委員長と麻美の様子もいつもと少し違ったし………ダリい……。

「凜兄いーッ！起つきろーッ！」

【ドスッガスッバスッベシベシベシベシベシベシベシ】

「イテエーッ！その起こし方は止めるつつてんだろーがッ！！」

「凜兄いが起きないから悪いんだよッ！？なんで起きれないのかな？まつたく…。」

「いや、敷布団閣下と掛布団王妃が俺を放すまいと…」

「何バカな事言ってるの？早く降りて来てね？」

「ふいー、了ー解ー。」

「もう、私が居ないと駄目なんだから…。」

「いつもありがとうございます未来様。」

「ふう、早く降りて来るんだよ？」

「はいはい。」

俺はズバババツと着替えプラチナリングもしっかり装着し、とつとと下に降りた…。

「さて、朝飯朝飯。」

「そういえば、凜兄い。そろそろ球技大会だよね？」

「ん？そうだったな…未来はどの競技に出るつもりにしてるんだ？」

松浜学園の球技大会は5日をかけてやるのだ。競技はソフトとサッカー、そしてバレーがある。

「うーん、まだ決めてないかな？今日決めるらしいからその時にって感じかな。」

「そうか…まあ、応援には行くから…。無理はしないようにな。」  
「ありがと、凜兄い。」

「そろそろ行くか…。麻美も出てくる事だし、それに夏芽も来るって言ってたしな…。」

昨日、夏芽と別れてから家に電話があり、今日から一緒に行く事になっっているのだ。

「そうだね 久しぶりに夏姉に会えるよ。」

俺達は家の外に出た…。

「おはよー凜矢、未来ちゃん」

「おはよう凜くん。お久しぶり、未来ちゃん」

「おう、おはよう麻美、夏芽。」

「おはようございます 麻美さん、夏姉」

俺達が家を出ると、すでに麻美と夏芽がいた。

「二人とも早いな。」

「まあね。そしたら夏芽がいたから話してて、それで仲良くなったんだよ。」

「へえー、そうだったんだ…そんじゃ、行つか。」

「そうだね、凜兄い。」

「うん。」

「うん 凜くん。」

俺達は新たに夏芽を加えた四人で学校へ向かうのだった…。

今日はけっこう早めに学校に着く事ができた。

「…おはよう、凜矢……。」

「ああ、おはよう。あのバカはまた遅刻か？」

「…あいつがこの時間帯に学校に来たら今日は雨だな……。」

「聞いた俺がバカだった…。」

俺はそのまま窓の外をぼくと眺めた。

「はい、そうゆう事で今から球技大会のメンバーを決めます。」

1時間目はメンバーを決めるらしい…。そうゆう事ってどうゆう事なんだ？

まあいいか…どうせやりたいのもないし…寝よ…。

「…凜矢、起きろ…。」

んあ？もう終わっていたみたいだ…。

「で？俺はどの競技になったんだ？」

「…何を言ってるんだ…？…もう昼だぞ…。」

「……………」

俺はどうやら1時間目からずっと眠り続けていたらしい。

「…ちなみにお前はソフトとサッカーで両方ともaチームだ…。  
…俺とバカも同じ種目で同じチームだ…。」

「ほ、けっこう固まってるな…。俺はそのほうがやりやすいからいいが…。」

「…ああ、そのほうがチームとしてまとまりやすいかららしい……。」

「へー、今年はなかなか考えてるみたいだな…。委員長達は？」

「…神楽さんと柊さんがソフトとバレーで両方ともaチーム、麻美と美香はバレーとサッカーで両方ともaチームだ……。」

「…って事は…ソフトでは百合と夏芽、サッカーでは麻美と美香と一緒にのチームって事が…。」

なんか…仕組みまれた感がひしひしと感じるんだが…。

「…言っておくがお前が寝ていたから悪いんだぞ……？」

「ですよね……。」

去年はたしかサボするか、ベンチに居たからな。はあ、めんどくせえ…。

「そついや、あのバカはどこだ？」

「ここに居ただろーがッ！！」

そつ、俺が起きた時からすでに横に居たのだが…

「だって喋らねーんだもん。読者だって今知ったぜ？きつと」

「あ？何分かんねえ事言つてやがる？とつとと飯食おうぜッ！腹が減つて死にそうだッ！」

「…死ねばいいのに……。」

「…………ヒドイ…………グスン……。」

そんないつも通りのやり取りをしながら俺達は昼食を楽しんでいた…。

午後の授業も難なく終わりすでに下校時間が来た…。

「それでは来週の球技大会に向けて明日からの放課後は部活がありますからみなさんよろしく。」

何がよろしくだよッ先生ッ！

「ああ、それと球技大会は絶対に3位以内に入ってくださいね、ボーナスが出るので。」

おい、それでいいのか教師…。

「それではさよなら。」

桃華先生の挨拶とともに皆も部活や帰宅へと席を立った。

そっぴや、今日はバイトの日か…。

俺は高校に入ってから週3でバイトをしている…。こじんまりした喫茶店だがとても良い人ばかりで俺もよく立ち寄りたりする。

「凜くん、今日も一緒に帰らない？」

「ワリイ、夏芽…。今日はバイトの日なんだ…。」

「あ、そうなんだ…。わかった、バイト頑張ってね…。」

「ああ、ありがと。それじゃ、また明日。」

「うん。また明日ね」

ちよつとだけ夏芽が寂しそうにしていた。

ゴメン、夏芽…。

俺はそう心の中で謝罪をしながらバイトへと向かった。

## 第5話：春 眠

眠い…（後書き）

まあ、けっこう長くなりますがご了承くださいm（――）m



第6話：リムレット 兄妹：（前書き）

今日は墓参りに行って来ました。

時間がづれてしまっただけでかなり人が多かったです。

帰りにはたい焼きを買いましたよ

かなり美味しいのなんのって。

それじゃ第6話どうぞ

第6話：リムレット 兄妹：

【カランカランカラン】

「いらっしやい…って凜矢くんか…。」

「こんにちわ、榊さん。」

「ああ、こんにちわ」

この人は、この喫茶店「リムレット」のオーナーで榊<sup>さかき</sup>茂<sup>しげる</sup>さんだ。  
とても優しくてかなりいい人だ…。

「こんにちわ、凜矢くん」

「こんにちあ、りんくん」

「こんにちわ、奈穂さん、奈々ちゃん」

この綺麗な女性は榊<sup>さかき</sup>奈穂<sup>なほ</sup>さんだ。もちろん、オーナーの奥さんで  
喫茶リムレットの副オーナーだ…。  
そしてこの小さくて可愛い少女は榊 奈々（さかき なな）ちゃん。  
茂さんと奈穂さんの愛の結晶だ…。  
今年で4歳になるんだがまだちょっと舌つたらずな喋り方をする。  
いや…普通なのか？…良く分かんないな…。

「りんくん だあこお」

「え？」

「こら、奈々…。凜矢くんも困ってるでしょ？」

「ふふ、いいですよ…何時もの事ですし」

「やあたあ はやくはやく」

「わかったよ、おいで」

俺はシフトの時間までの少しの間、奈々ちゃんを抱き抱えながら楽しく話していた。

「凜矢くん、そろそろお願いっ。」

「はいっ。それじゃ、そろそろ行くね、奈々ちゃん」

「うんっ、いいてらあしゃい」

そして、俺は奈々ちゃんと別れ、仕事に向かうのだった…。

「奈穂さん、シフト入りますから、休憩いいですよ。」

「そう？ありがとうございます。それじゃ、奏ちゃんと一緒をお願いね」

「よしっ、今日も頑張ろうね、凜くん」

「はいっ、よろしくお願いします、奏さん。」

この女性は美波<sup>みなみ</sup> 奏<sup>かなで</sup>さんだ。年は僕の二つ上で大学1年生だ。

「さてと、そろそろ忙しくなるかも知れないから厨房はよろしく」

「了解」

それから、俺は多少忙しくなった喫茶店の厨房でいそいそと料理などを作るのがあった。

「茂さん、戸締まり終わりました。」

「そうかい、いつもありがとう、凜矢くん」

「いえ、そんな…」

「ふふ、また明後日ね」

「はい。それじゃ、さようなら、茂さん、奈穂さん。バイバイ、奈々ちゃん」

「うん、じゃあね、凜矢くん。」

「ええ、またね」

「りんくん、ばいばい」

俺はリムレットを出て、帰宅の路についた。

「ただいま。」

「おかえり〜凜兄い〜 ご飯もつすぐ出来るから待っててね」

「了解、先に風呂行ってるわ。未来はもう入ったか？」

「うん、先に入っておいたから出たら洗っておいて？」

「わかった。」

もうけっこう遅い時間…。まあ、8時半に終わって今は9時だ…。でも、未来は待っていてくれて、料理も帰ってくる時間に合わせて作ってくれる。前に一度先に食べてると言ったけど、寂しいだろうか」と待っていてくれた。

ゴメン、そしてありがとう…。

と、俺は声にならない声で謝罪と感謝をした…。

ゴメン、一人だけにして…この家に一人だけにして…。俺はバイトから帰るといつも謝罪をする…。この時間まで、未来を一人にしていた事、未来を待たせてしまった事、そして、俺と言う存在がとても弱く、未来に甘えてしまっていることに深く謝罪をするのだった…。

- M i k u Y a z i m a -

きつと、凜兄いはまた謝罪をしているんだろう…。

「凜兄いのバカ……私はあの時の事をもう許してるのに……。」

凜兄いはきつと…いや、間違いなくまだ気にしている…。

私がこの時間まで待ってたのは凜兄いを心配させないため…。

凜兄いは優しい…。だからこそ心配になってしまう…。

凜兄いはもし、私が待っていなかったら、そのまま居なくなってしまうんじゃないかと思ってしまう…。

私は凜兄いが心配だ…。それはきつと、兄妹だからであり、家族だからであり、好きな人だからだ…。  
居なくなつて欲しくない…。だから私は待つているんだ…。私が待てば、彼はちゃんと帰つてきてくれるから…。  
私がこの家に居るかぎり彼は帰つてこれるんだから…。

- R i n y a   Y a z i m a -

俺が風呂から上がると未来はちょうど、料理を作り終えたところだった…。

「いただきます」

「召し上がれ」

「なあ、未来は球技大会、何の種目に出るんだ？」

「サッカーだけにして貰つた　凜兄いは？」

「俺はソフトとサッカーに勝手に決まつてたみたい…。」

「みたいつて、どうゆう事？」

「いや、めんどくて寝ちゃつてさ…起きたら昼だった…。」

「は？もう、しっかりしてよ？凜兄い。」

「ああ、まあ決まつちまつたもんはしょうがないし…適当に頑張るよ」

「うん、応援に行くから頑張つてね？私は1 - Aのbチームだから…。」

「そうか…俺は両方とも2 - Aのaチームだからな。無理だけは…するなよ？」

「……うん……わかってるよ凜兄い」

未来は少しだけ暗い顔をしたがすぐに明るく振る舞った。

ふふ…わかりやすい奴だな…未来は…。

まあ、俺も未来に気付かれていないと言う自信はないんだがな…。

「さて、俺はもう部屋に戻るな？」

「うん、私も洗い物が終わったら部屋に戻るよ 明日から練習だからね」

「そうだな。」

俺はそのまま部屋に戻り、知らぬ間に夢の世界へと向かったのだ…。

第6話：リムレット

兄妹…（後書き）

まあ、頑張ります



第7話：委員長

そんな…（前書き）

ふふ、明日は部活です…。頑張ろう。

和「…サボ魔のくせに…。」

痛いところを突かないでください…。

それじゃ第7話どうぞ

第7話：委員長

そんな…

俺は夢の中にいる…。

それがわかったのは声が出ないから…。叫んでも喚いても声が出てこない…。

見渡すとそこは空き教室のようだ…。

一人の女の子がいた。

踞すくまっている子…リボンからすると1年生か…。

その子が急に顔を上げた…。

泣いている？…。

女の子の瞳には、涙が溜まってしまっている…。

どうしようかと思ったが全然動けない…。嫌な気分だ…。

彼女が何か言った…

「……………ッ！……………は……………」

ほとんど聞こえない声、でもこの子はあの日の子…………俺が泣かせたのか？

わかんねえ…………。

どんどん世界が白くなって行く…。

変な終わり方だと思ったが気にしないようにした…。

朝が来たんだな…………。

「ふあゝあ」

今日はアラームがなる前に起きる事ができた。しかし、なんだったんだあの夢は…。

「凜兄いーッ！起つき…てたあぁーッ!？」

「うるさいぞ、朝っぱらから…」

俺が起きてるのがそんなに驚いたのか、かなりびっくりしている。

「え？なんで!？なんで起きてんの!？」

うるさいと言っているのに…。

「不思議な夢を見たせいで目が覚めちまったんだ。」

「不思議な夢？」

「ああ、妙にリアルだった。」

「へー、妙にリアルな夢を見れば凜兄いは起きるんだー、どうやって見せるかな…ブツブツ…。」

なんか凄い怖いんだが…背筋がゾクゾクしてる…どうにか空気を变えるか…。

ぬぎぬぎ……

「きゃあッ！何脱ぎ始めてるの!？凜兄い!…もう…!」

未来はパンツと扉を閉めて出て行ってしまった。

ふふ、まだ上半身裸なだけに…純情な奴め…。

俺はささつと着替えて下に降りる事にした…。

だって怖いんだもん。

今日も四人で仲良く学校に登校し、午前中は睡眠による授業を受けた…。

ん？はしよりすぎ？

だって作者がめんどくさいって…。

「…何をブツブツ言っている……？」

「うおっ！？」

寝言を喋っていたようだ…。

「…早く飯を食おう、バカが死にそうだ……。」

隣を見てみるとバカが涎を垂らしなが白目を向けていた。

「おい、机に涎落とすなよ？」

「……ツーン……」

もう知らん…。

俺はバカをしかとしっかりと未来の愛情込もった弁当を食う事にした…。

「くっそうーッ！…フガツモガモグフグッ！」

バカはガツガツガツと弁当をかきこんでいった。  
汚いから一発殴っておくか…。

【ベシッ！】

「モガモガモグッ！？……………ドンドン……………ゴクン……………」

バカは喉に詰まらせやがった。ざまあwww

「テメエ！殺す気かぁッ！？」

「殺されなくなかったらもつと静かに食おうな？」

「はい、すみませんでした！」

未来の技を使ったらあっさりと謝りやがった。…さすが未来だな…  
…家で褒めてやろう。

そんなこんなで楽しい昼を過ごしていた…。

そして、帰りのホームルーム…。

「今日から球技大会の練習のため、基本的にこの一週間は部活が禁止です」。後、放課後に球技大会の実行委員会があるのでクラス委員長と副委員長は行ってくださいね。」

俺はほとんど寝ながら聞いていた…。

「はい、それじゃー私のため…じゃなくて皆自身のために練習頑

張ってくださいね。」

今さら言い直してもバレてるぞ桃華先生…。

「それでは、クラス委員長の神楽さん…」

へへ、百合は今年もクラス委員長なんだな…

「…そして、副委員長の凜矢くんよろしくお願いしますね。」

………は？…今なんて？………俺が副委員長？…まさかな…きつと聞き違いだろう……。

「凜矢くん？お願いしますね？」

「………はい……。」

やはり俺だったようです…。泣きたい……。

ホームルームの後、百合が俺を呼んだ…。

「それじゃあ、夜島くん、行きましょう？」

「そうだな。なあ、なんで俺になったんだ？」

「？…それはですね、私が推薦したからです。」

「はい？…なんでまたそんな事を？」

「1年生の時、いろいろと夜島くんにはクラス委員の仕事を手伝っ

て貰ったので…副委員長にふさわしいかな?と思っちゃったからです」

「ちゃったからですか…。」

はあ…。俺は心の中で溜め息を吐いた…。  
まあ、決まったもんはしょうがないか…。

「まあ、ほとんど役に立たないけどこれからよろしくな、委員長」

「うん、こちらこそよろしくお願いします 夜島くん。」

「なあ、タメ語でいいぞ?」

「え?」

「いや、これから隣で支え合っただから、なんつか、まあ、タメ語でお願い。前の屋上で言った時みたいに…な…。」

「……………」

百合は何かを考えているようだ…。

「…駄目…かな?」

「……ううん。わかつた…。うん、わかつたよ 夜島くん」

「ああ、ありがとな 委員長」

それから、俺達は少し近づいた互いの距離を感じながら、一緒に会

議室まで歩いて行った。



第7話：委員長

そんな…（後書き）

感想とかあったら送ってください。寂しいんで…。

さて、部活頑張ろう…。

第8話： 正 夢      出会い…（前書き）

読者のみなさんは正夢を見たことありますか？  
ちなみに俺はありません（爆）  
それじゃ、第8話どうぞ

第8話： 正夢 出会い…

俺は今、空き教室にいる…。  
何故かって？それはだな…。

俺は百合と一緒に会議室まで歩いていた…。

「なあ、実行委員って何やるんだ？」

「ん〜とね、まあ、簡単に効率よく運営するために行動するんだよ」  
「

「…そのまんまな気がしなくてもないんだが…。」

「まあまあ、細かい事は気にしない」

「……………さいですか…………。」

曲がり角に来た時、それはおきた…。

【タッタッタッタッタッタ】

「きゃっ！」

「うおっ！」

【ドシン】

「「痛ッ！」」

「大丈夫！？夜島くん！？」

「ん？ああ、俺は大丈夫なんだが君……は……？」

「はい……大丈夫……です……。」

そこに居たのは始業式の日、ぶつかってしまった女の子だった…。

「あッ！あ、あなたはあの時のッ！」「う、ううごめんなさいごめんなさいッ！」

なんか、スッゲー必死に謝ってるんだがこの謎子。

「い、いや、怒ってないから……な？」

「ごめんなさい！あの時もそうでしたけど……ホント……ごめんなさい……。」

なんか、ヤバイよ？目尻に涙が溜まってるし……なんか今にも泣きそう？みたいな？

「あの後……あなたを探した……けど……なかなか……見つから……なくて……。」

ヤバいな……マジで………どいするか……。

「ワリイ、百合。先に行ってくれ……。俺はこの子を宥めないといけないから……。」

「うっん、わかった 先に行ってるからちゃんと宿めてあげてね？」

「ああ。マジでワリイな……。」

「いいよ それじゃそろそろ始まっちゃうし、早く行くね」

百合は急いで会議室へと向かってしまった……。しかし、百合のタメ語ってなんか自然に出てるな？もしかして……と、その前にこっちの泣き虫ちゃんをどうにかしないと……。

まずはどっかに移動するか……さすがに此処だと人の目につきやすい。

そして、俺は女の子の手を出来る限り優しく持ってあげ、俺がとっさに思いついた場所……

「此処なら人は来ないだろ。」

空き教室へと来ていた……。

「はふ……ひくっ……。」

あちゃー、もう泣いちゃってるし……。

つか、夢様様だな……まったく……いや、これ夢の通りじゃん、あれ……正夢か？

マジかよ……。おっと、また現実逃避をしてしまった……。

「なあ、泣き止んでくれないか？頼むから……。」

「ひくっ……」「めんなさい……うくっ……。」

うん、どうするか。

強く出ると余計に泣くだろうし……かと言って弱く出ると謝り続けるだろうし……。  
……しかたない……。

ファサッ

ギュッ

「ふえ？」

俺は女の子を抱きしめた……。出来るだけ優しく……。でも、下手すると犯罪、普通にビンタもんだな……。いや、大丈夫だろうか？

「え……何を？」

「やっと、泣き止んだな……。」

「え……あ、ホントです……。ごめんなさい……。」

「もうそれはいいよ……。」

しかし、柔らかい女の子って……。強くすると折れそうだ……。

「ねえ、君の名前……教えてくれないか？俺は夜島 凜矢だ。」

「あ、はい。私は美波<sup>みなみ</sup> 叶<sup>かなえ</sup>です……。」

へー、美波か……。あのと同じ苗字だな。まあ、そこらへんにたくさんいるだろうけど……。

「えっと…あの…はう…あの、そろそろ放して…貰えませんか？」

「ん？うおっ！そうだったな。ワリイ…。」

ちよつとだけ、名残惜しくも思ったがこれ以上したらまた泣かれると直感で感じた…。

「えっと…あの…ありがとうございます。凄く暖かくて、凄く安心できて、涙が止まりました…。」

「いや、俺こそ悪かったな…。急に抱きしめたりして…。」

抱きしめてを言った瞬間、思い出したのか叶の顔は真っ赤になっていた。

「えっと…その…先輩…ごめんなさい、今日もこの前も…。」

「いや、気にするな…。だが、前は遅刻しそうでって事だと思っんだが今日はなんで走ってたんだ？」

初めの時から思っていた疑問を口にする。

「あっ！忘れてた！お姉ちゃんに言われてたんだ！…それじゃ、先輩さようなら！」

「ああ、じゃあな。」

「あっと…いつか、お詫びをするのでお暇な時にでも図書室に来て

くださいね 昼にはほとんど居ると思うので…。」

「ああ、分かったよ それじゃ、また今度」

「はい、それでは。」

そう言って小さい女の子こと、叶はまた走って空き教室から出て行った。

まったく…また面白い事になったもんだ…。

改めて見た叶はとても可愛く、そして小さくて、まるで小動物を思わせた。

さて、今さら会議室に行っててもしかた無いし…。先に練習に向かうか…。

たしか、今日はサッカーとソフトを中心にやるって言ってたな。

そして、俺はめんどくさい練習のため、無駄に広い運動場へと向かうのに何故か笑顔になっていると感じながら歩くのだった…。

美波 叶……か



第8話： 正 夢      出会い…（後書き）

さて、これからどうなるのか…。

## 第9話：練習

新キャラ?…（前書き）

すみません、ロジックにはまっていたら小説の執筆が遅れてしまいました…。m(――)m  
これからは気をつけます。  
それじゃ第9話どうぞ

第9話：練習 新キャラ？…

俺が運動場に着くと、皆が不思議そうな顔をして俺を見た…。

「凜くんどうしたの？なんか来るの早いけど…。」

心配したのか、はたまた皆の代表でか夏芽が聞いてきた。

「ああ、ちとトラブってな。遅れちまいそうだったから委員長だけ行つて貰つたんだ…。」

「嘘つ、どうせ凜矢の事だからめんどくさいって言つてサボつたんじゃないの？」

なんかとてつもなく酷い事をおっしゃいますね、麻美さん…。

「違えよ…。人とぶつかつてその子が泣きそうだったから宥めてたんだよ…。」

一応事実だからちゃんと試みてみた。

「どうせ女の子に《わざと》ぶつかつた振りして変なところで、触つたんじゃないの？」

わざとの部分を強調しておっしゃってくださいましたね…。麻美さん…。

つか、俺はそんな人間に思われていたのか……。  
いや、抱きしめたけどさ……。今言つたら変態のレッテルを貼られ

るな、きつと…。

反撃でもしてみるか…。

「変なところって例えば何処だよ？」

「ふえ？え、えつとそれは…胸、とかよ…。」

聞き返すとは思ってなかったのか多少なり焦っていた…。ちよつと苛めたくなってきた…。

「とかつて事は他に何処が有るんだ？」

「えッ！？そ、それは…えつと…他の…ところ…。」

「だから、それが何処が聞いているんだが？」

「…だから…それは…うう…もう、知らないッ！どっかよ、どっか！」

逆ギレしやがった、コイツ…。ま、いいか…からかいすぎたな…ちよつと…。

ほんのちよつとただけだけど…。

「わかったわかった、悪かったな…。ちよつとからかい過ぎたよ」

「ふんっ！早く練習に行くわよっ！」

「了〴〵解」

「後、リムレットのケーキで許してあげるから…！」

リムレットではケーキもけっこう有名なんだ、実際かなり美味い。  
コーヒーや紅茶に良く合うんだよ、さすがオーナー。

「はいはい、イエス・ユア・ハインス…ボスツ…。」

「下手なネタを使うなッ!!」

「……………」

軽く意識が飛びました……助けてください……グスン……。

「なあ、夏芽はサッカーとバレーだったよな？まずはソフトからなの、なんで運動場にいるんだ？」

「うんとね、一応補欠みたいな感じだから練習はしとこうと思って……。」

…ジーン……なんて偉い子なんだ夏芽は……。

なでなで

褒美に頭を撫でてあげた…。

「えへへ、んん〜」

撫でてあげると、凄く喜んでくれていた…。

うむ、撫でたかいがあるってもんだ。

しかし、女の子の髪って撫で心地がいいんだな〜。しかも、なんか

いい匂いもするし…。

「グルルルルッ」

そろそろ野獣が怖いからなでなではまた今度にするか…。

「よし、練習に行きますか、お二人さん」

「うん、そうだね凛くん」

「ふんっ！」

あら、なんて正反対な反応なんだか…。しっかり明日のバイトではケーキを貰って来なくちゃな

そして俺は凄いニヤけまくってる夏芽とかなりふて腐れてる麻美を引き連れ練習に向かった…。

「ソフトの練習」

「ノックいくよーっ」

仕切ってるのはソフト部の女の子…名前は知らん…。

「ひ、ひどい…。」

「気にするな。」

「うう、改めて、ノックいくよーっ」

【カキーンッ】

【バシッ】

【カキーンッ】

【バシッ】

「よっしゃーッ！バッチこいやーッ！」

「わるい…変わるよソフト部の女の子。」

「できれば名前で呼んで欲しいんだけど………って聞いてないし……。」

「大丈夫だ…いつかは出番がくるかもしれない……。」

「そうかな？まあ、まずはソフトに集中しないとね」

「そう、その意気だ……。」

「…あれ？私誰と喋ってるんだろ……？」

「いくぞーッ！バカ直樹ーッ！」

「えッ！？待って！なんか怖……」

【ビュオオッ】

ギャーッ！頬をかすったーッ……！」

「わーわー騒ぐなッ！どんどん行くぞ、バカ直樹！」





「ほら、キーパー避けるんじゃないッ！止めないとッ！」

「顔面狙ってるくせに何を言ってくれますやらッ！！」

「行くぞーッ！」

「聞けーッ！！！」

【ビュオオッ】

「へブシッ」

そんな感じで、練習が終わり、夕飯を食べ、俺は敷布団閣下と毛布王妃に包まれていた…。

「しかし、今日もいろいろあったな…。」

今日のこと昨日のこと、なんか…一週間も経ってないのに一週間分以上疲れてるのはなんでなんだ…？

そんな事を考えている内に俺は夢の中に旅立っていた…。

第9話：練習

新キャラ?... (後書き)

ロジックって面白いですね。  
かなりハマりました

## 第10話：図書室約束…（前書き）

更新完了！

今日は宿題の答えを物置に離任式に行くハメになりましたorz  
教師も考えたと思います。  
それじゃ第10話どうぞ

## 第10話：図書室約束…

練習初日から次の日、今日も実行委員会＋練習がある。  
それに、今日はちょっと図書室に用があるしな。

そんな事を考えていたら、いつの間にか午前の授業が終わっていた。  
さて、とつとと飯を食うとしますか…。

「よっしゃー、凜矢！昼飯にしようぜー!？」

「ああ、そうだな。今日はちと、用があるから早く食べよう」

「…用ってなんだ…?」

「ああ、昨日軽くあったんだ…。それで、用ができたって感じ」

和磨に軽くこれ以上は聞かないでくれと、アイコンタクトを送って  
みた…。とくにバカがうるさいだろうから…。

「…そうか……。まあ、詳しくは聞かないよ……。」

「?ほはへはんはひはほはほ?（お前なんかしたのかよ?）」

「してねえよ、呼び出しくらったわけじゃないし」

「…なぜ、話が通じている?」

「神、Sakusyaの力だ…。」

「…何を言っているんだ……？」

「いや、なんでもない……。」

「ムグムグゴクン。お前早く食うんじゃなかったのか？」

「おっと、そうだった。つか、お前今日はまともだな、多少」

「ムグムグムグゴクツ、たまにはだ……。」

コイツ、まともだとけっこうカッコよかったんだ……。いつもがまともじゃないからか、たまに見るとカッコいいと思ってしまう……。まあ、そんな事よりさっさと食うか……。

そんな感じで今日は少しいつもと違う昼食を楽しんだ……。

「ごちそうさま。そんじゃ行ってくるから……。」

「…まあ、けっこう時間もあるしな……。…海苔が付いてないか見てから行けよ……？」

「ああ、そうだな。そんじゃ行つて来ます。」

「…ああ、行つて来い……。」

「行つてらっしゃい。気をつけてな……。」

「なあ、直樹がまとも過ぎるからちょい怖い……どうしょ？」

「…大丈夫だ……。…たまになるまともバージョンだからすぐに元に戻るさ……。」

「そうだな…」

そして、俺は叶との約束？のために図書室へと向かった…。

【ガラガラガラ】

図書室の扉を開くと其処は別世界のように人がいなく、静かだった…。

つか、人が見当たらないんだが……。…この学校の奴らは図書室を使ったりしないのか？……。まあ、俺も1年の最初を入れて二度目なんだが……。

「あつ、先輩！こんにちわです！」

「ああ、こんにちわ、叶……。それより、図書室っていつもこんな感じなのか？」

叶は俺を見つけて走りよって来たので、挨拶ついでに聞いてみた…。

「はい、いつもは3年生の先輩が一人いるんですが……。今日は私だけみたいです…」

「そうなのか…。それで、昨日はお姉ちゃんとやらの怒られなかったか？」

「いえ、怒られはしなかったんですけど理由を問い詰められました。

「

「そうだったのか…。ゴメンな…遅れさせちゃって…。」

「あつ、いえつ、先輩が気にする事じゃないですっ！お姉ちゃんはシスコンだから、少し手伝いに遅れただけでも心配しちゃって…。」

「ふふ、そうか でも、手伝って何のだ？」

「えつとですね、お姉ちゃんがバイトしてるとこで人手が足りないって事で、実質バイトみたいにして手伝ってるんです…私、どんくさいけど料理を作るのは得意だから」

「へえ、料理って事は飲食店か？」

「はい、けっこう小さいけど、なかなか人気があるんですよ？」

叶はどこか自信満々に話しをしていた。

「そっか…。なら、昨日言ってたお詫びの件は其処に一緒に行く、でどうだ？」

「はいっ、そうですね お店の方も落ち着いていて、過ごしやすいですから」

「ああ、それじゃ、いつにしようか？」

「うーん、そうですね。来週の金曜日、球技大会が終わった後なんてどうですか？」

「ああ、いいよ。それじゃ、何処で待ち合わせる？」

「そうですね、私が先輩を迎えに行きます。だから、先輩のクラス教えて貰っていいですか？」

「ああ、俺は2 - Aだ…。なら、俺はその時、教室で待つてればいいのか？」

「はい、絶対に迎えに行きますから」

「そっか、ありがとな…。」

「いえつ、元々私が悪いんです。だから、気にしないでください。」

「ふふ、ああわかったよ」

俺は何故か叶と話している時間がとても楽しく感じた…。  
今まで喋った事ないタイプだから、それとも……

「先輩？」

「ん？ああ、ワリイ…。ちと考え事してた…。」

「私と話していると退屈ですか？」

「いや、そんな事はないから大丈夫だよ」

「そうですね？ならいいんですけど……つまらなかつたら言うてく  
ださいね？」



「つまらなくなる事がもしあつたらね…。」

きつと、叶は自分の事を悪く見すぎてるな…。なんか、そこも可愛らしいが…。

「なあ、叶は昼はいつも此処にいるのか？」

「はい、お昼御飯も此処で食べてますから…。」

「え？いいのか？普通は飲食禁止だと思うんだが？」

「えっと、鍵をですね…開けたり、もし人が来てもいいように、オーダーを貰ってるんです」

「そうなのか？なら、いつも一人で昼飯を？」

「あつ、いえ、いつもはさっきも言った通り3年生の先輩が一人居ますから二人で食べてます。」

ああ、そついやそんな事言ってたな…。

そんな楽しい会話をしていた時だった…。

【キンコーンカーンコーン、キンコーンカーンコーン】

楽しい時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「あつ、予鈴みたいですね…。それじゃ、先輩。戻りましょうか…。」

「

「ああ、そうだな。…なあ、叶？」

「はい？」

俺はこの楽しい時間を今日だけで終わらせたくなかった…。

「また、此処に来てもいいか？」

「……はいっ！先輩なら大歓迎ですっ！」

少し間があってから嬉しそうに叶は返事をしてくれた。

そして、俺達は自分達のクラスへと戻って行った…。

俺の顔は教室に着くまで何故か笑顔だった…。

第10話：図書室約束…（後書き）

いやはや、未だに先の展開を考えていない作者です…。  
まあ、楽しみにしてください。

## 第11話：特別編 リムレットの1日（前書き）

今回はちょっと、つなぎみたいな感じで短めです…。  
それじゃ第11話どうぞ

## 第11話：特別編 リムレットの1日

叶と約束をした次の日の放課後、俺はリムレットに来ていた…。もちろん、バイトとして…。

「こんにちわ、茂さん、奏さん」

「ああ、こんにちわ。凜矢くん」

「……こんにちわ、凜矢くん……。」

なんか、奏さんの元気が無いみたいだ…。後で聞いてみるか…。

俺は着替えるためにロッカールームに来た…。

【ガチャ】

扉を開けると、そこには着替え中の女の子の姿があった！

「こおにちわあ、りいくん」

まあ、着替えてるのは奈々ちゃんなのだが…。

「こんにちわ、凜矢くん 後、女の子がいるかもしれないんだからノックはしてね？」

「りいくんのエエチい」

エッチと言いたいらしい…。つか、なんつーことを言いますか、この少女はっ！

…まあ、ノックしなかった俺が悪いんだが…。

「すみません、これから気をつけます」

「気をつけてくださるならけっこうです」

「りいくんのエエチい、エエチい」

なにが楽しいのか、奈々ちゃんはエエチいと連呼しだした…。

「こら、奈々？凜矢くんに失礼でしょ？」

「いいですよ、奈穂さん 撥り（くすぐり）の刑ですから」

そう宣言した俺は着替え終わった奈々ちゃんをバツと捕まえ、撥りまくった！

「はう、キャハッ、はふっ、ひはっ、ひいくんっ、ゴっ、メえなっ、さいい」

言葉をカミカミになりながらもちゃんと奈々ちゃんが謝ったので許してあげる事にした…。…本音はもっと苛めてやろうと思ったが奈穂さんもいるからやはり止める事にした……。

「はふ、ひふ、あうゝ、りいくんの苛めえ子お」

なんかスツゴい奈々ちゃんが可愛いと思った…。

……………ロリコンじゃないぞ、俺は……。  
まあ、もっと苛めてやるかな…。

「なんだ、もっと擦って欲しいんだな？それじゃ、存分に擦ってやるからな？」

「いやあゝ、ママゝ」

「ハハハハッ」

「ふふふふッ」

「おや、楽しそうなところをすまないね？凜矢くん、そろそろシフト入ってくれると助かるよ…。」

「あ、はい、すみません。」

俺はどうやら、バイトに来ている事を忘れかけていたようだ…。

……………うん、きつと奈々ちゃんの笑顔のせいだ……。

俺は少し急ぎ気味で奏さんのところまで行った…。

「奏さん、どうしたんですか？」

「あうゝ。……………ふえ？何が？」

「いえ、ボくっとしてると言うか、ショックっ！みたいな顔してるから……………」

「聞いてくれる？」

「え？あ、はい、まあ……。」

いつもと違う奏さんのどんより気味に少し心配になってきた……。

「それがね、私の妹が……」

「あれ？奏さんって妹いたんですね？」

「ん？そうだよ？良く来てるんだけど……。そっか、凜矢くんいない時がほとんどだもんね……。」

「へえ、そうなんですか、今度あってみたいですね？」

「いつかは会えるわよ、きつと……。それでね、妹がね、昨日嬉しそうな顔して帰って来たから聞いてみたらさ……。今度、男の子と寄り道するっていいだすんだよ？もう、私、ショックで飛び降りるところだったの……」

「そ、それはまた一大事ですな……。」

「そうなのよ！今度、私がシフトの時に此処に連れてくるんだって、もう、スッゴク嬉しそうに！その男、会った時は只じゃおかないわッ……！」

目が凄いい勢いで燃えていて、さすがにそろそろ関わりたくないと思っただ……。だから、仕事に逃げる事にし、その場に奏さんを残して厨房の方に逃げ込みました……。

しかし、奏さんの妹ってどんな子なんだろ……。今度、会ってみたい  
な



そして、また、一日が過ぎていった……。

**第11話：特別編 リムレットの1日（後書き）**

次回からは球技大会です。それでわ。

第12話：球技大会1日目…〔前編〕（前書き）

どうも、作者です…。

また、なんか長くなりそうですがどうか、めげずに付き合ってください

それじゃ第12話どうぞ

## 第12話：球技大会1日目…〔前編〕

最初の練習から数日、今日は球技大会1日目だ…。

松浜学園の球技大会は五日にわけてやる事になっている…。

まず、1日目の今日はサッカーをベスト4まで決める。ちなみに、1クラス2チームずつで、1学年5クラスあるから、全部で30チームにもなる。そして、運動場で5試合を一気に始めるのだ。

そして、俺は今、テント張りを頑張っている…。

実行委員会の話合いにより、係が準備に決まってしまった…。まあ、片付けはしなくていいらしいので、敢えて仕方なく、テントを張っている…。

ちなみに百合も準備なんだが…。

「ほら、頑張つて 後、一つなんだから」

「しかし、やけに多くないか？終わった頃には疲れてるぞ…。」

「まあまあ、そうなるかもって事でけっこうな人数の係なんだから…。」

「そうだけどさゝ、まったく…めんどくせー…。」

「こらこら、そんなマイナスな事言つてると幸運が逃げるよ?。」

「そうなのかもしれないけど……こればかりはな……。」

「よっと……さ、終わった事だし、次は球技大会を頑張ろう?」

「……さいですね……。」

俺はもう、球技大会をする前から、身心ともに大分疲れていた…。  
はあ……まあ、出来る限りは頑張りますかな

そして、第1試合が始まった…。

## 第1試合

2 - A a チーム

V S

3 - D b チーム

最初の試合が3年とは、けっこう嫌だな…。

相手のチームはけっこう運動神経がよさそうな人が多そうだ…。

まあ、見た感じなんだが…。

『試合は前後半30分ハーフです! それでは始めてください!』

実行委員のアナウンスがあり、相手のキックオフで始まった。

配置は俺がミッド、直樹はフォワード、そして和磨がキーパーになっている。

和磨はかなりの運動神経により、キーパー。俺はまあ、人並らしいからミッド。直樹は自分から『フォワードじゃなきゃ、嫌だ!』

と言いだしたので仕方なくフォワードになった。

まあ、直樹は体育だけはかなり真面目だし、運動神経もいいので問題は無いんだが…。

俺が直樹のフォローとしてミッドにいる感があるのはなんか気に入らない。

開始直後、かなりゴツい奴が突っ込んで来た…。

「うおおおおおッ!!」

しかも、うるさい…。なんなんだ？このゴツ男は…。  
かまいたく無いな…。

ゴツ男はディフェンスを弾き飛ばしながらペナルティエリアに突っ込んで行きシュートを打った。

【バシィィッ】

それを左にジャンプしながらセービングする和磨…。はっきり言うてかなりカッコいい。

「くそおおおおッ!」

ホントにうるさいな…。

…おっと、和磨が俺にボールを飛ばしてきた…。

そのボールをワンバンさせてからキープし、ドリブルに入る。

近くには3人…。

まず、前方に二人がいる。

まず、一人目、右に体重を一瞬かけて、すぐに左に抜く。  
二人目はスピードで抜きさり、三人目と対峙する。  
フェイントをかけてみるが必死に俺の前を塞ごうとしてくる。

「凜矢ッ！」

隣から直樹が俺を呼び、とっさに出したパスを直樹は受け取り直ぐ様シュート体勢に入った。

ペナルティエリア外からのミドルシュート。

【バシュウウツ】

ボールは見事にネットに突き刺さった

『おつとおお！？第5コートの2 - A a チームが先制ゴールを取りました！！』

俺達はどんどん点を積み重ね、前半の終了には4 - 0と圧勝していた。

「ふう、この調子なら勝てそうだな…。」

「…ああ……。…だが、気をつけた方がいいだろう……。…後半は相手もマークが強くなる……。…」

「そうだな。後半はフォワードに麻美、美香にディフェンスをやって貰うか…。…」

「よし、やっとな番な訳ね」

「このチームはキーパーが強いけど、全体的に守りが弱いから、私  
がしっかりとガードしてあげるッ」

麻美も美香もやる気満々と言った感じで張り切っている。

「おし、その意気で後半を頼むな。」

「了解」

「ラジャッ」

「凜兄いーッ！頑張ってねーッ！」

「夜島くんッ！頑張ってッ！」

「凜くんッ！頑張ってーッ！」

「先輩っ！頑張ってくださいっ！」

応援に来てくれた4人もそれぞれに応援してくれた。

「相変わらずモテモテですね、凜矢様々はッ！」

「何怒ってんだよ？麻美？」

なんか、かなり不機嫌オーラ出しまくりでこっちを睨んでくる麻美  
……………正直言っとても怖いです……………。

「ふんッ！なんでもないですよーだッ！」

まったく、理由があるから怒ってんだろぅが、麻美さんは。  
とは、さすがに言えないチキンな俺……………。

そんな事をしている内に、ハーフタイムが終わった。



皆もいい感じに疲れを取れたようだから、後半もじゃんじゃん得点を取りますか…。

「よし、絶対圧勝するぞー！」

「「「「おーッ！」「」「」」」」

そして、後半が始まった。

後半では、麻美がフォワードに入った事により、得点原が増え、美香は守りつつも攻撃に参加してくれた。

その結果、8 - 0と言う、圧勝を見せた。

『第5コート、8 - 0で2 - A aチームが勝利しました！』

そして、大事な初戦を勝ち進み、次はシードで休めると言う、ラッキーな展開になったのだった…。

第12話：球技大会1日目…〔前編〕（後書き）

まだ、初戦しか書けませんでした。

そして、ゴツ男は一回しか出て来ませんでした。がまた登場します。  
実際は別の人ですが…。

それでは…。

### 第13話：球 技 大 会1日目…〔中編〕（前書き）

ふう、明日で1日目は終わりです。

後、報告があります…。

来週から作者は学校が始まるため、毎日更新は流石に出来ません…。一週間以内には絶対更新するつもりです…。  
なので、来週から一週間以内更新になります。ホント、毎日楽しみにしてください。皆に謝ります。

すみません！m ( ) m

それでは、気を取り直して…第13話どうぞ

### 第13話：球技大会1日目…〔中編〕

第2試合はシードの結果、第3試合までは休憩が出来る…。俺達は未来を応援するために第1コートまで来ていた…。

「しかし、未来ちゃんのクラスの相手が1年でよかったなあ。」

直樹も未来の事は知っているから、多少なり心配してくれている。

「ああ、アイツは心配かけないように無理をするから…。どうせなら出ない内に負けて欲しいんだが……。未来が頑張る姿も見たい…。悩むところだ…。」

「まったく…。シスコンなんだから…。」

麻美が呆れたように言った。  
俺も自覚はしてるんだよ…。

「…。でも、可愛いんだもん。いや、マジで……。だから心配になるんだよね、あの事を抜きにしても…。」

「…。でも、心配になるのは分かる……。…彼女はしっかりしているが、危うさがあるからな……。…後、可愛いからだろうな…。」

「たとえば、一番信頼出来るお前でも、未来は絶対渡さねえからな！」

「ふふふ 夜島くんの妹さんが羨ましいです ね？ 柊さん」

「うん、ホントだよ……。昔からだったもんね、シスコン…。」

「へえ、凜矢のシスコンってそんなに前からだったんだ……。」

「うん、ほとんど一緒に行動してたよ……。でも、その時はどちらかと言つと、凜くんに未来ちゃんがつついてた感じだったんだけどね……。」

「でも、私が仲良くなった時にはもう、ほとんど逆状態だったわよ？」

「ふふ その間に何があったのかな？夜島くん」

なんか、女の子達の話が不穏な雰囲気になってきた……。

「……………ン？……………ナンノハナシカナ？……………ボクチャンワカンナイナ？……。」

「凜矢……。アンタ、片言になってるから……。」

「うるせえ……すみません、でも、その話は勘弁してください……。」

なんか、うるせえって言おうとしたら、かなり怖い目で睨まれました……。

……………理不尽すぎる……………。

「……っと、夫婦漫才をしているところ悪いんだが、そろそろ始まるぞ……？」

「だ、誰が夫婦よ、誰が！」

「そうだぞ、コイツの夫なんて怖くてなれるかっての…。」

「……そ、そこまで言わなくてもいいじゃない……………」

なんか、急に暗い顔をして、ボソボソと喋っている麻美…。  
なんなんだ？この頃よく暗くなったりしてるみたいだぞ？

「俺が悪かったよ…。だから、元気出してくれ…。」

「気にしてなんていないわよ…。」

いや、雰囲気からして気にしてるだろ…。

まったく、ちよっとしたジョークだったのに…。性格の暴力的なところだけの事だつてのに…。ホント、気にしやすいんだから……。

「ホントに悪かったよ…。ほら、未来の応援してやろう？」

「うん、わかったわよ…。」

麻美はほんの少しだけ、元気を取り戻したようで、未来の試合に集中した。

『それでは、第1試合のセカンドを始めてください！』

その言葉と同時に、試合が始まった

1 - A b チーム

V S

1 - E b チーム

どうやら、未来はスタメンのようだ…。

かなり心配だが無理はするなって言っだし、ディフェンスだから大丈夫だよ…。

「…大丈夫だよ、凜くん。未来ちゃんは凜くんの言う事は絶対守るから…。」

俺の心情を読んだのか、隣から夏芽が語りかけてくれた。

俺の心はその言葉でかなり救われた…。心の中で、夏芽に感謝の言葉を告げた…。

ありがとう、夏芽…

俺の……初めての……

未来にボールが渡った…。

未来は相手が近づいて来ると、すぐに他のチームメイトにパスを出してあまり動かないようにしているようだ…。

…よかった、ちゃんと俺の言っただ事を気にしてくれている…。

隣を夏芽と麻美、美香、それに和磨と直樹、そして、事情は知らないであろう百合も俺に微笑みかけ、目で『大丈夫だから安心して』と語りかけてくれた……。

俺はその行為のせいか、自分の犯した罪を思い出したせいか、未来が見せてくれた優しい微笑みに似ていたせいか、涙が一筋だけ流れ落ちた…。

それから未来はボールを貰うとそれほど前に進まず、相手と接触する前に味方にパスを渡して俺の言った無理をするなをしっかりと守ってくれていた…。

未来は、もっと走っても大丈夫な筈なのに、俺の事を思ってたんと走らないでプレーしている…。

未来を心配している筈なのに、未来は俺を心配している…。

互いが互いを強く心配する…。

それは、どちらも危うさを持っている事を意味している…。

…心配しなくてはならないほどの危うさを…。

前半が終了し、未来が戻ってきた…。

「未来、前半お疲れさま。」

「凜兄い ……うん、そんなに走ったりはしなかったけどね」

「…そっか、ゴメンな…。」

「ん？何言ってるの、凜兄いのせいじゃないよ？…私は運動が苦手だから、皆に迷惑にならないようにしてただけ！……ホントだからね！？」



未来はちよつと咎めるように、俺のせいなのを自分のせいと言ってくれた…。

ホント、優しいよな 未来は…………。

「うん、そつか…。ありがとう、未来…。」

「なんで凜兄いが感謝するかな？」

「はははっ、そうだな、未来…後半はどうするんだ？」

「一応、さっきみたいに試合にでるよ？かなちゃんも後半から出るみたいだから」

「そつか、無理しない程度に頑張つてな？……で、かなちゃんって誰だ？友達か？」

「うん 中学校からの友達だよ？知らなかった？」

「あ、ああ、知らなかった。…だつてお前、今まで家に友達連れて来た事無いし…。」

「そつえば、そうだったね？…かなちゃん、来てッ！」

未来がそう呼ぶと小さい、小動物のような女の子が走って来た…。  
あれ？アイツって……。

「紹介するね 私の親友のかなちゃんだよ」

「叶ッ!？」

「先輩ッ！？」

走って来た未来の友達……美波 叶……その人だった……。

**第13話：球 技 大 会1日目…〔中編〕（後書き）**

今週一週間は毎日更新します。

それに、学校が始まってからも、1日で更新できる時はするので…。

これから、凜矢はどうなるのか…。

第14話：球技大会1日目…〔後編〕（前書き）

やっと、1日目が終了しました。  
それじゃ第14話どうぞ

## 第14話：球技大会1日目…〔後編〕

未来が連れて来た中学校からの親友……。

その女の子は、俺が2年生になってからいろいろとあった美波叶  
その人だった……。

「ふえッ！？二人とも知り合いだったのッ！？」

「未来ちゃんのお兄さんって先輩だったんですかつ！？」

二人の疑問が重なった…。

結果、俺には二人の疑問を聞き取る事ができなかった……。

「は？同時に言っただって対応できねえよ！……それで？まず、未来  
はなんだって？」

「う、うん…。凜兄いとかなちゃんって知り合いだったんだ？」

「ああ、始業式の日にぶつかってからいろいろあつてな…。」

つか、そっぴや俺が初めて叶とぶつかった時、アイツ友達なんて言  
わなかったじゃん…。

「ああ、そういえば、あの時ぶつかってたね。かなちゃんと凜兄  
い…。かなちゃんドジでいつも転んだりしてたから、呆れてたんだ  
よね、私……。」

なるほど、叶はやっぱりドジっ子属性って事か…。

…うん、ストライクゾーンだ……。



やっぱり通じてるみたいだな…。  
これが幼なじみパワーって奴か？

麻美……可愛いよ……。

「な、ななな何言ってるのよッ！バカッ！！／＼／＼」

「俺は何も言っていないぜ？」

口ではそう言っておいて、心の中では…

キス……していいか？……

「……………！！！！／＼／＼」

ボツと音がしそうなぐらいに勢い良く顔を真っ赤にして、麻美はうつ向いてしまった…。

ちと、からかい過ぎたか……。

「…凜矢……。…この前はこの子の事が……？」

この前つてのは初めて図書室に行った時の事が…。

「ああ、そうだよ…。」

あまり詳しく話すのは叶も嫌だろうと思い、詳しくは黙っていた…。

「アンタはとうとう、年下にまで手を出したって事ね…。」

「そんな人聞きの悪い言い方をするなッ!!」

「なんでいっつもお前ばっかしい思いをしてんだよ!」

【バコンッ】

「お前はうるさい、Are you O.K.?」

「イエス アイ アム……。」

俺は睨み付けるを覚えたようだ…。

「そんな事はいいとして、叶が未来の友達って事もわかったし…。  
今度、家に遊びに連れて来な?」

「そうだね、凜兄いならかなちゃんも気負いしなくてすみそうだなね」

「はい!今度機会があつたら絶対行きますっ!」

「かなちゃんのこんな喜んでる姿、初めて見たよ。」

「はう!?!いや、これは、その、あんまり友達の家に行った事が無いからって事で……」

「はいはい そうゆう事にしといてあげる」

「そんなあ、未来ちゃん……」

そんな楽しいハーフ時間のおかげで、暗くならずに済む事が出来



た…。

後半も未来はあまり走らず、それでも楽しそうにプレーしていた。叶は後半から試合に出たが運動音痴らしくどつらかというボールから逃れるようにしていた。

そして、試合が終了…。

結果は

3 - 1 で 1 - A が勝った…。

俺としては多少なり複雑な気分だ…。

時はかなり進み、俺達は今日のラスト試合に出ていた…。

未来達は、第2試合で2年生とあたってしまい接戦ながらも負けてしまった…。

俺達の次の相手は 3 - B a チームだ…。

俺達のもうひとつのチームである b チームもまだ残っていて、当たるとしたら決勝で当たるようになってる…。

そして、第3試合

2 - A a チーム

V S

3 - B a チーム

『それでは、第3試合を始めてください!』

その言葉と同時に俺達は猛攻を仕掛けた…。

「ふう〜、疲れた〜。」

「うん、お疲れさま、凜兄いと麻美さん」「お疲れ 凜くんと麻美ちゃん」

「うん、ありがと…。未来ちゃん、夏芽…。」

「ああ、応援サンキューな、未来も夏芽も…。」

「ふふ、凄い疲れてるね？二人とも」

「笑い事じゃねえって、夏芽…。」

そう、この疲れは第3試合の猛攻によるものだ…。

麻美、直樹、それにサッカー部が一人フォワード…。

俺と和磨、美香がミッド兼フォワードでかなりの攻撃を仕掛けた…。

結果が9 1という、ヤバい得点を叩き出した。

失点の1点もコーナーキックから上手く決められたものだった…。

今日は、ホントに疲れた1日だった…。

まあ、明日はソフトがあるが、今日よりは疲れないだろう…。

今日はホント、いろいろありすぎだ…。

でも、久しぶりにかなり楽しいと思える1日だったのも確かだ…。

去年ではありえなかった事…。

それは、俺が変わり始めているという証拠……。

……何かが俺の中で変わり始めていた………。

第14話：球 技 大 会1日目…〔後編〕（後書き）

さて、次の競技はソフトにするつもりです…。  
それでは。

第15話：球技大会2日目…（前書き）

更新完了！

作者、宿題が残ってます〇（Ｔ　Ｔ）〇

そんな事より

第15話どうぞ

## 第15話：球技大会2日目…

今日は、球技大会2日目だ…。2日目はソフトの試合がある。  
今日もベスト4まで決めるらしい…。

俺はセカンド、直樹はキャッチャー、和磨はファースト、夏芽はあまりソフトが苦手らしく外野、百合は何故かピッチャーという、なんか微妙な感じだった…。

しかも、俺が1番、夏芽が9番、和磨が3番、百合が2番、そしてバ力は『4番じゃなきゃ嫌だーッ!!』と駄々をこね始めたので4番に決定した…。

『さて、今日で2日目になります球技大会。今日の競技はソフトで5つのコートで試合します。五回まで戦い、延長は無いです。引き分けの場合はじゃんけんで決めてもらいます。』

五回まで頑張つてまでじゃんけんで負けたんじゃ洒落になんねえな…。

『それでは、始めてください!』

試合が始まった…。

俺達は第2試合に入っているので今は暇になる…。

「ちょっと凜矢、しっかり応援しなさいよ…。私達のクラスのbチームが試合してるんだから…」

そつ、今は2 - A bチームが試合を行なっているため、俺達は応援

に来ていた……。が……

「だって、知らない奴ばっかだもん……。」

「アンタってホント周りに興味ないのね……。」

麻美は呆れたと言いながら、俺に言ってきた……。

「うっせえ、だってまだ一週間しか経ってないじゃん。長く感じたけど……。」

「そうだけど……去年一緒のクラスの人がけっこういるのよ？あそこ……。」

そう言っただけで麻美はbチームが試合を行なっている場所を指して言った……。

「わかったよ、まあ、見といて損はないか……。」

「損得の問題でもないでしょ……。……まったく、私にも興味ってないのかな……。……。」

俺は試合に集中してしまったため、麻美のその呟きに気づく事はなかった……。……。

試合はまあ……。……ボロボロだった……。……。

相手のピッチャーは野球部らしく、ほとんど打つ事が出来ていなか

った…。

その割に敵にはじゃんじゃん打たれてしまい……結果、23 - 1で負けてしまった…。

さて、次は俺達の番だ…。

ちゃんと前の試合を見といたお陰で多少は参考になった…。

練習はしたけど、イメージも欲しかったしな……。

そして、俺達の試合が始まった…。

相手は3 - A aチームと言う、なんか似ているチームだ……名前だけだが……。

俺達は先攻になり俺が一番最初にバッターボックスに立つ。

…うわぁ、かなり緊張する……。

相手ピッチャーはゴツ男…。もちろん、前とは別の人だ。

ゴツ男は俺をかなりの勢いで睨む（若干引いた）と、ボールを投げた…。

【ズバァンッ】

……早い…。さすがはゴツ男……そのゴツさは伊達じゃないか……。だが…打てなくてはいいはずだ…。

ゴツ男が2球目を投げる…。俺はグリップを握り思いきり振った…。

【カキーン】



俺の打球は内野の頭を飛び越え、外野までスムーズに飛んでいった…。

俺はダッシュで走り、なんとかセカンドまでこれた…。

2番目は百合…。

百合は一球目を見送り、二球目はファールと追い込まれてしまった…。  
そして、3球目……

【カキーン】

百合の打球は外野当たりまで飛んでいった…。

俺も走り1、3塁…。

相手のゴツ男はかなり悔しそうにしながらも、またボールを投げた…。  
……愚かな奴だ……。和磨にそんな投球が通じる訳があるまい…。

【カキーン】

初球から思いきり振った和磨の打球はかなり2ベースヒット、結果、2点追加で2塁になった。

そして、ゴツ男は膝を着いていた…。

次はバカだ……。だがアイツはけっこう運動神経がいいし、体育だけは真面目だから大丈夫だろう…。

【カキーン】

バカの打球はかなり遠くまで飛んで行き、審判がホームランだと告げる…。

一回表が終わった時点で5 - 0の状態だ…。

そして、敵の攻撃になった…。

百合は早さもゴツ男まではいかないがけっこう早く、そして変化球も投げられるらしく、三者三振に抑えてチェンジ…。敵はもう絶望という感じの表情をしていた…。

試合は順調に進み、25 - 0でコールドに持ち込むという凄い状態になってしまった…。

観客席の生徒達もスゲーなどと感嘆の声をもらしていた…。

そして、第2試合も圧勝した…。

相手は1年で可哀想なほどの惨敗ぶりだった…。

…ちょっと泣いていた子もいた…。

そして、昼休みになり、皆で食うために集まるのだった…。

「しかし、こつも簡単に勝ち進むとは、策略的な物を感じるな…。」

「はあ、皆、凄い運動神経いいからね…。」

夏芽は溜め息を吐きながら羨ましそうに言った…。

「元気出せよ、夏芽 足引つ張ってる訳じゃないんだから…。」

「そうだけど…。百合はいいなあ、変化球も投げられるんだもん…。」

「ふふ 只、器用なだけですよ」

いや、器用なだけで変化球投げるとか、貴方は化け物ですか…。

「先輩っ！凄くカッコ良かったです！」

叶が大きな声でそう言ってきた…。

…なんだろ…叶に褒められると凄い嬉しい…。  
俺は叶に優しく微笑みながらありがとうと伝える。

「ああ、かなちゃんっ！何凜兄いとイチヤイチヤしてるのかな？」

未来がそんな事を言ったせいで全員の視線が俺と叶に集まってしまった…。

……ちえっ…叶との会話を邪魔しやがって我が妹君よ…。

「え、そ、そそそそんな訳じゃっ！／＼／＼／」

叶は顔を真っ赤にしながら否定した…。

…なんか寂しいな…。

寂しいから、苛めてやるか…。

「そんな訳じゃなかったのか？俺はそれの方が嬉しいのに…そんな  
に否定するんだ？」

「あ、いえっ、そんな、私は先輩の事が嫌いって訳じゃなくて…

…その、どちらかと言えば…

「早く食おうぜいッ！！」…。

くそっ、あのバカのせいで肝心なところを聞けなかったじゃねえか  
っ…！

…あれ？…俺、周りに興味とか無い筈なのに…なんで…叶  
の言葉を聞きたいと思ってんだ？…。

…俺は…変わり始めているのか……今までの自分から…。

そんなこんなで昼休みは終わり、午後の試合も終わりを迎えた…。

俺達はベスト4に入り、球技大会2日目が終了した…。

第15話：球技大会2日目…（後書き）

球技大会2日目が終了…。  
次は3日目に入ります。

**第16話：球技大会3日目…〔前編〕（前書き）**

さて、更新完了！

総ユニーク数が5000人を越えました

これもすべて読者様のお陰です

ありがとうございます

それでは第16話どうぞ

第16話：球技大会3日目…〔前編〕

夕暮れの帰り道を俺は女の子と歩いている…。

女の子の顔は分らない…。

夕焼けのせいかな、これが夢だからなのか、でも分かる事は、俺は女の子がとても好きだという事だった…。

女の子が誰かも分らない…。この世界に存在する子なのか、それともしないのか…。

でも、俺は彼女に微笑みかけている…。

『大好きだよ… …。』

肝心な部分は何も聞こえなかった…。

女の子は顔を赤らめながらも、俺に微笑んだ。

でも、顔は見えない…。何故、彼女が照れているのが分かるのか…  
きつとこれが夢だからだろう…。

また、世界が白くなっていく…。

これは、正夢なのか、只の夢なのか…。

でも、これだけは言える…。

……………彼女は俺にとって、愛しい存在なんだと……………。

目が覚めた…。

時計を見るとまだ、6時になったばかりというところだ……………。

「……もう一度寝るかな……。」

俺はそう呟いてみたものの、全然眠気がなくなったらしい…。

「……あの夢のせいかな？……俺の貴重な睡眠時間が……。」

俺はそう言いながら、布団から出て一階に降りていく…。

「まだ、未来は起きてないのか…。」

一階はまだ暗く、未来が起きていない事を告げる…。

俺はお湯を沸かし珈琲を作った…。

コーヒーは嫌いではないが、苦いのと口に匂いが付くのがあまり好まない…。

珈琲を飲みながら、今朝の夢について考えていた…。

「あの夢はなんだったんだ？…それにあの女の子は……。」

考えても考えても何も答えが出ないまま時が過ぎ、階段を降りる音が聞こえてきた…。

「え！？凜兄い！？なんでこんな時間に起きてるの！？」

未来は叫びとも聞こえる声を発しながら、俺に訊いてきた…。

「目が覚めたんだ…。また、夢のせいかな？」

未来はそれを聞くと少し不安気に訊いてきた…。



「……大丈夫？……うなされたりしたの？」

「いや、悪夢というよりかなり幸せな夢だった…。」

「……幸せな…夢…？」

「ああ、よく分かんないけど、かなり幸せな夢だった…。……暖かくて…心地よくて…そして、凄く安心する夢だった…。」

「へえ、でも、よかったね 悪い夢じゃなくて それに幸せな夢なら、きつと良いことあるんじゃないの？凜兄い」

「ふふ そうかもな」

俺と未来はいつものように仲良く朝食を楽しんだ…。

今日は球技大会3日目、バレーがベスト4まで決まる…。今のところ、サッカーではa・bチーム両方、ソフトではaチームがベスト4までいつている…。

そして、今日はバレーの日…。

俺は試合に出ないが夏芽と百合、麻美に美香と俺の周りのメンバーが出るため、応援せざるを得ない…。

応援をしないつもりではないが……絶対勝つって、アイツらは…。

ひいき目に見ても、美香と麻美のコンビは強いし夏芽はまあ、なんとかなるだろ…。

百合はけっこう器用…というより運動神経がよかったし……普通に勝てると思う…。

俺は和磨、バカ、未来、叶とともに、2 - A aチームの応援に来ていた…。

ちなみに、左から叶、未来、俺、和磨、バカの順で座っている…。

『それじゃ、球技大会3日目！！試合開始いーッ！！』

なんか、今日はかなりテンションが高いな、放送係…。

### 第1試合

2 - A aチーム

V S

2 - C aチーム

まず、百合のサーブから試合が始まった…。

相手はそれほど強そうには見えないがどうなのだろう…。

百合のサーブは相手に防がれ、相手のアタックがきた…。

相手のアタッカーと並ぶように飛んだ夏芽と美香…。

ボールは美香の手に弾かれ相手コートのラインギリギリに落ちた。

続いて、麻美がサーブを打つ…。

かなり鋭く飛んでいったボールは回転がかかっていたらしく、相手が防いだと同時に変な場所（バカの顔面）に飛んできた…。

【バシイーンッ】

「へぶしッ！！」

ボールはバカの顔面に突き刺さり、下にはねかえっていった…。

「……」

俺達はさすがに悲慘に思い、言葉を失った…。

試合は2 - Aが勝った…。

麻美が殺人アタックを打てば、相手は避けるという勝負にすらならない感じた…。

ミスも、チームメイトがおこした凡ミスによる失点だ…。

「麻美さんって凄いね…。」

未来がちよっと、恐怖を感じながらも俺に話し掛けてきた…。

「俺と直樹はあれ以上の力で叩かれてるがな…。」

うむ、悲しい事に自業自得な部分が多くて、あまり恨む事ができない…。

「あ、あれより強い力で叩かれたら死んじゃいますよ、先輩…。」

「いや、何故か死ねないから余計に地獄を味わってるぞ…。」

うん、俺はきつと天国に行けるだろう…。

「凜兄い、命は大切にね…。」

「先輩、怪我だけはしないでくださいね…。」

1年コンビは俺が叩かれる事を前提に話していやがる…。  
…悲しいよ…涙が…なんかしょっぱい汁が流れてくるよ…グス  
ン…。

そんなやり取りをしながら、俺達は麻美達が来るのを待った…。

第16話：球技大会3日目…〔前編〕（後書き）

今後もよろしくお願いします！

第17話：球技大会3日目…〔後編〕（前書き）

さて、今回の話から登場人物紹介を多少入れます。  
まあ、読んでくれたら嬉しいです  
それでは第17話どうぞ

## 第17話：球技大会3日目…〔後編〕

第1試合が終わり、俺達は麻美が戻って来るのを待っていた…。

「しかし、勝つとわかってはいたがああも圧勝だとは…。」

麻美達はストレートで勝利した…。

この球技大会では、全第3セットで先に2セットを取ったほうの勝ちだ…。

第1セット

25 - 5

第2セット

25 - 2

失点が7つでどんだけ強いんだよ…。

予想はしていたが、ここまでとはな…。

周りからも「マジかよ…。」や「2 - A aチームとあたったら終わりだな…。」などの声が聞こえてきた…。

「あ、凜矢ッ。しっかり応援してくれただしょうね?」

麻美達が俺達のところにきて話し掛けてきた…。

「ああ、しっかり相手の方を同情で応援してあげてたよ…。」

俺は呆れながら、麻美に言うと、麻美は不機嫌そうになりだした…。

「なんで、相手を応援してんのよ…。私達を応援しなさいよ……。まったく…。」

「いや、だってお前ら強すぎなんだもん。なんか、応援する必要が無いと思って…。」

「バカッ、応援するのは当たり前でしょ！？もうッ！」

「そうだよ、凜くん。酷いな、私の事も応援してくれなかったの？」

「いや、そういう訳じゃ……………」

夏芽の言葉に俺はいろいろと困ってしまった…。

「ふふふ 人気者ですね、夜島くんは」

「ホントだね。しかも、こんな美少女を、しかも上級生や下級生まで捕まえてね？」

「…女たらし……………」

「羨まし過ぎるぞーッ！」

なんか、全員の波状攻撃を受けてHPがかなり減りました…。でも、バカだけは殴っておいた…。

…だってなんかムカつくし…………。

「あの、あまり先輩を苛めないであげてください…。」



ああ、叶がまるで天使のように感じる…。

なでなで…

「はう！？　せ、先輩！？　何をっ？」

「ん？　いや、庇ってくれたお礼だよ。　ありがとう、叶」

「あう、い、いえ、どういたしましてです。」

うわあ、叶がかなり可愛く感じるよ…。

「かなちゃん、凜兄いとイチヤイチヤし過ぎだよー。」

「ちょっとー、何叶ちゃんを口説いてんのよ…。」

…しまった、皆の視線が痛い…。

「いや、皆が苛めるから悪いんだ！　叶だけだ、俺の味方は！」

俺は叶に泣きつきながら、自業自得な事を言っていた…。

「…まあ、冗談は無しにして……。…お疲れ様、四人とも……。」

「うん、ありがとう、和磨。」

「サンキュー、和磨」

「ありがとう、和磨くん。」

「はい、ありがとうございます　橋本くん。」

四人とも、それぞれに感謝の意をのべた…。

「どうする？他の場所にも行って話すか？此处じゃ、皆から視線が集まるからな」

「えッ！？x多数」

直樹が急に普通モードで喋ってため、皆かなりびっくりしていた…。

……もしかして、コイツって二重人格なんじゃ……？  
と思ったがそれは無いなと思い、その説は却下した…。

「…そうだな……。…中庭にでも行くか……？」

「だな。中庭ならこつからも近いし、放送も聞こえるから、戻るのに楽だしな…。」

そつだなど皆が賛同し、俺達は中庭に向かった…。

「しかし、人がほとんどいないな…。」

「そりやそうだよ 皆、バレーの試合を見に体育館に行ってるんだから」

俺の疑問に夏芽が当然だよと言いながら、答えてくれた…。

…そっぴや、夏芽って転校生なのになぁり馴染んでるな？どうしてだ？作者…。

「すみません、俺に聞かないでください……お願いします……。」

「誰と喋ってるのよ…アンタは…」

麻美が俺の思考を読んだらしい…。

「…そうよ。」

もうつつこむのは止めよう…。

「…なんでよ…」

「なんでよじゃねえよ！人の思考を読むな！」

「何よ、そんなに読まれたくない事でも考えてるの？」

「ちげえよ！俺の人権についてだよ！」

「いいじゃない、幼なじみなんだし。」

「なんだよそりゃ、しかもなんでそんなに、俺の思考を読もうとするんだ？」

「……………なんでも、いいじゃない。」

「何だよ、その間は…」

俺は呆れながらそう言い、これからは何か考える時は、気をつけようと誓うのだった…。

「そろそろ、第2試合が始まる時間だな。戻ろっぜ？」

「うん、そうだね　実行委員が付いていながら遅れたら申し訳ないしね」

百合はそう言いながら立ち上がり、皆もそうだねと体育館に向かった…。

後、2日…。

去年出なかったこの球技大会…。

俺はこんなにも楽しく思っている…。

仲間がいてよかったと思っている俺…。

あの時とは違うんだと思うと、俺は嬉しく思う…。

そして、体育館に向かう仲間達を見ながら、俺の顔も自然と笑っている事に俺はとても、驚いていた…。

## 登場人物紹介

主人公

夜島　凜矢

（やじま　りんや）

16歳、魚座、O型

誕生日

2月23日

趣味

睡眠、ケータイ小説、人を苛める事

好きな物

甘いもの、神などの幻想的なもの、人を苛める事、騒がしくなくが静か過ぎない空間

嫌いな物

良識を持たない人、苦いもの、変な味のするもの、静かすぎる空間

本作の主人公。

寝る事を一番の至福とし、寝具に名前（敷布団閣下、掛布団王妃、枕メイドなど多数）をつけるがネーミングセンスが感じられない。  
リムレット  
喫茶店 Rimlet で週三回バイトをしている。

自分の容姿がカッコいい事に気付かず、むしろ悪い方と考えている。だが、鈍感とかでは無いようにたまに鋭い一面を見せる。

妹を心から愛するシスコンだが、前に何かあったらしく互いに過剰なまでの心配をしていて、まだ仲の良いだけの兄妹ではないようだ。神などの幻想的なものが好きで、きっと居ると思っている。

変わり始めた日常を考えるなど、毎日を大切にしている。

度々、変わった夢を見るため、不思議に思っているがあまり気にはしていない。

「まあ、こんなもんですかね」

「もう少し書いてもよかったんじゃないか？」

「いや、あんまり書くとかどいかなって…。」

「そうか、少し残念だな…。」

「まあ、また機会があったら追加だな」

「機会があればな…。」

「……………まあ、なんとかなるさ。これからの展開に期待だな」

「何を呑気な事をッ」

次回は麻美の紹介します それではノシ

第17話：球技大会3日目…〔後編〕（後書き）

次回は4日目に突入します

約束まで後少しです

作者の学校の始業式までも後少しです…。

第18話：球技大会4日目…〔前編〕（前書き）

今回はラストに穂村 麻美を紹介します  
それでは第18話どうぞ



## 第18話：球技大会4日目…〔前編〕

球技大会4日目…。

今日はソフトの準決勝、決勝を行い、しかも、サッカーの準決勝までをやる事になっている…。

負けたクラスなども、たくさん応援に参加し、裏ではどのチームが勝つかを賭けているという噂もある。

それに、それぞれの競技で三位以内のクラスには食券が配られるため、皆けっこう張り切っているのだ。

教師もボーナスが出るらしい……。

…それでいいのか、この学校は……。

そして、今日は3つの競技の内、ソフトの優勝クラスが決まるので、かなりの人気があるのだ…。

…皆、どんなチームが優勝するか興味があるらしい……まあ、俺は今年、出場する方なんだがな……。

「よし、それじゃあ皆ッ！優勝目指して頑張ろっッ！」

皆を纏めるこのお方こそ、本日で二度目になる如月きさらぎ雪ゆきさんだ。

「やっと、私にも二度目の出番が…。でも、第1試合に名前が出てこなかった気が……。」

それを言っではいけないよ、如月さん…。作者もやっと思いついたんだから……。

「…後2勝だな、凜矢……。」

思考の中に潜んでいたら、和磨が俺に話しかけてきた…。

「そうだな。まあ、このチームならたぶん大丈夫な気がするんだけどな……。」

如月さんは監督の様に俺達を纏めてくれるし、百合は未だに数本しか打たれていない…。

バカや和磨も申し分ないし、夏芽も頑張ってくれている…。このチームを超えるチームがあつたら逆に凄いと思うな…。

まあ、この学校の生徒会が全員集まったらもしかしたら負けるかもしれないが、クラスごとならたぶん最強だろう……。

でも、侮らない方がいいな…。相手を見くびっていると痛い目を見る…。どんなにわかっていいる結果であろうと、最後まで気を緩めるな…。じいちゃんがいつも言っていた事だ…。

「…どうした……？」

「いや、なんでもねえよ。気を引き締めていこうな」

「…ああ……。俺達が強くても、相手だつてベスト4に入るチームだ……。それなりの力量がある……。」

「そゆこと わかったか？バカ直樹。」

「はい わかりました」

やっぱバカだなコイツは…。…うん、もうあり得ないってぐらいバ

力だ…。

『それでは〜！準決勝を〜！始めてください〜！』

なんか凄い間延びした気の抜ける声とともに準決勝が始まった…。

2 A a チーム

V S

2 E a チーム

「いい？ 最初からガンガン攻めていくよ！？」

俺達は先攻、という事で俺は今バッターボックスに入っている訳だ…。

相手ピッチャーは女の子…。

スラッとしたボディーに肩までの髪、顔も可愛いというより綺麗に近かった…。

…やべ、滅多打ちにして泣いた顔が見たい……。

俺は自分の苛め衝動（ドS心）を感じながらも試合に集中する…。

如月さんが言うには、あの子は一番初球をど真ん中のストレートに投げるらしい…。

女の子はモーションに入る…。

という事は泣かすなら初球だ！

俺は女の子の投げたボールをフルスイングで打つ…。

【カキーンッ！】

俺の打った打球は外野を軽々と越え、茂みに消えた…。

審判はホームランだと伝え、大きな歓声とたくさんの驚愕の声があった…。

相手チームもかなり動揺している…。

俺はホームベースに戻った時、ちらつと女の子の方を見ると、驚きと悔しさで目が少し潤んでいた…。

「凄い、凄いよ！凜くん！」

戻ったと同時に夏芽が抱きつきながら叫んだ…。

「ちょ、夏芽、抱きつくな…。」

俺はなんとか夏芽を引き剥がしながら如月さんに感謝の意を伝える…。

「ありがとう。如月さんのお陰だよ」

「いえいえ、まさかホームランにするととは思わなかったけどね」

如月さんは照れながらも、冗談を言ってきた…。

「でも、よく知ってたね。一番初球がど真ん中だった…。」

「まあ、勝つための資料だよ…。偵察はしといて損は無いからね」

改めて、如月さんの凄さがわかった…。

2番の百合も2ストライク2ボールから2ベースヒットと2尽くしの行動をしていた…。

3番の和磨は初球は見送り、2球目に無難にヒットを打ち、1、3塁になった…。

4番の直樹は初球から2ベースヒットを打ち、和磨は直樹が打った時にはもう2塁に着いていて、其処から2点が追加された…。

その後もどんどんと走者をだし、一回が終わった時には5 0の状態になっていた…。

相手の子は暗い表情をしている…。

「よし、守りもしっかりね!」

「おゝ! x多数」

如月さんの言葉に全員が応える…。

守りも百合が三者三振にして一回が終わった…。

そして、試合は着々と進み、この打者を抑えればコールドで終わる…。

【バシイーンツ】

「ストライーク! バッターアウトツ! ゲームセットツ!」

試合が終わった…。

整列する直前…。あのピッチャーの女の子を探してみるとあの子は何処かに走って行くところだった…。

「ワリイ、俺並ばないからよろしく」

「え！？ どゆこと!?!」

如月さんは叫びながら俺に聞いてきたが、それに構わずにあの子を追いかけた…。

……なんで俺はあの子を追いかけてんだ?……今まで喋った事もない人間なのに……。

……知らない人物、初めて見た人物、なのに……なんで……。泣かしてみたいと思った罪悪感?

……それとも……。

俺は彼女に追いつく為にペースをあげた…。

## 登場人物紹介

### ヒロイン 1

穂村 麻美

（ほむら あさみ）

16歳、牡羊座、A型

誕生日

4月20日

趣味

剣道、読書、凧矢やバカの肅正

好きな物

可愛いもの、リムレットのケーキやパフェ、剣道、凧矢？

嫌いなもの

負ける事、曲がった事、煩い場所、ピーマン、虫

本作のヒロインの一人、勝ち気な性格で負けず嫌い。

ショートの黒髪に整った顔をしていて、美少女だが胸が小さく、コンプレックスにしている。

凧矢とは夏芽が引越してから知り合い、それ以来幼なじみになった。

麻美の勝ち気な性格は凧矢が関係しているらしい…。

凧矢にはけっこう好意を抱いているが、なかなか素直になれない。

凧矢の周りに女の子が多いのでけっこう悩んでいる。

剣道の腕は全国に行けるほどの実力。

「ヒロイン1って事はまだ2、3と続くという事です」

「なによそれ、私がメインがじゃないの？」

「まあ、まだ最後どうなるかって決まってるから……。」

「これからの頑張り次第で凜矢と……ブツブツ……。」

なんか、妄想の世界に入ってしまった麻美さんは放っておきます。  
ポイツですよポイツ

次回は柊 夏芽を紹介します ノシ



第18話：球技大会4日目…〔前編〕（後書き）

えーっと、新キャラ？かもしれません…。

次回は柊 夏芽を紹介します

第19話：球技大会4日目…〔中編〕（前書き）

今回は柊 夏芽を紹介します

作者の宿題が終わりません…。（x|x:x;）

そんな事よりも

第19話どうぞ

第19話：球技大会4日目…〔中編〕

相手ピッチャーの女の子、透き通る様な白い肌で綺麗な顔立ち。  
でも、女の子は泣いていた…。

泣きながら走る彼女…。

実際、彼女が泣いている意味が分からない…。  
滅多打ちされたからかもしれないが、其処まで泣く事でもないだろ  
うと思う…。

でも、実際彼女は泣き、俺は追いかけている…。

俺は手を伸ばし、彼女の手を優しく、でも強い力で引き寄せた…。

「きゃっ…」

【ギュッ】

俺はなんとか彼女を抱き寄せた…。

「……は…なして……ください……。」

「それは却下…。また走られても嫌だし…。」

「……走り…ませ……んから……。」

「でも駄目…。泣き止むまでは離さない…。」

俺は彼女を抱きしめながら、何で泣いているのかを聞いた…。

「今さらかもしれないけどさ、何でそんなに泣いてるの？」

彼女は少しだけ涙が止まったらしく、ポツポツと話始めた…。

「私…昔から、父親に厳しく育てられて…マナーとか…習い事とか…してて…やるからには一番になれって…言われて…だから、私言い付けを守れなくて…だから…だから…」

【ギュウツ】

俺はさつきよりも強く彼女を抱きしめた…。

壊れそうなほどに細いその体を抱きしめながら、俺は言った…。

「君がなんでそんなに言い付けを守ろうとするのかは分からない…でもさ、人間なんてそんなもんだ…。すべて一番になれる人間なんていない…。」

だからさ…一番にこだわる事無いと思う…。言い付けだからって…ずっと、守り通せるはず…ないんだからさ…。どんなに守りたくても…。」

「でも、私はそうしなくちゃ…。」

「それは自分の意思？ホントは一番にこだわっていたくないんじゃない？」

「そ、そんな事…。」

「ないって言える？」

「……………」

「言えないよね…。心の中では嫌がつてる…。例えば自分の意思で一番になりたいと思っても、一番以外が許されないのを君は嫌だと思ってる…。」

「……はい……………」

彼女は小さい声でそう言った…。

「うん、ならそんなに泣くな…。こだわる必要は無い…。君が頑張っていたのは、一生懸命だったのは、敵だった俺が見てて一番知ってるから…。」

「！……………うえっ……………ああ……………ぐすっ……………」

「ほら、泣くなつて　これからは俺がちゃんと、頑張ってる姿を見るから…。」

「……………うん……………うん……………」

彼女は晴れやかな笑顔で俺に笑いかけた…。

【ドキンッ】

彼女が笑った瞬間、俺の胸が跳ねた…。

彼女がとても愛しく感じ、またギュッと彼女を抱きしめた…。

「…ありがとう　夜島　凜矢くん……………」

「ああ、ってなんで俺の名前を!?!」

俺は彼女の口から出た自分の名に驚きながら聞き返した…。

「ふふ だって、貴方はとても有名だから」

彼女は女神の笑顔で微笑みながら俺に言ってきた…。

…俺が有名? 何でだ? …… ああ、周りに美少年と美少女がいるからか……。麻美に夏芽、美香や百合に叶と未来も美少女と言える…。

それに、和磨と…認めたくはないがバカは美少年だから……。はあ、きつと浮いてるんだろうな、俺……。釣り合わないって遠巻きの人は思ってるんだろうな、どうせ……。

「? どうかしました?」

「いや、何でもないよ…。」

「私、嬉しいです」

彼女は唐突に何かを話し始めた…。

「何がだ?」

「初めて、人から頑張っていると認められたからです      それに、  
認めてくれた人が貴方でよかった」

「ははは それは光栄な事だよ、お姫様」

「ふふ　でも、何故私が認められたいと思っていると思ったんですか？」

彼女の疑問に俺は穏やかに答えた…。

「昔、教わったんだ…。相手を知りたいなら目を見る…。口から出た言葉が嘘か真か、知りたいなら目を見れば分かる…。ってね」

「と言う事は私が嘘を付いたってわかったんですか…。」

「そついう事」

「あつ、り、凜くん！えっと、次の試合が始まるから、来て！」

「うあつ！　夏芽か…びっくりした…。　ああ、わかったすぐ行く！」

俺は夏芽にそう答えてから彼女に言った…。

「それじゃ、俺は決勝に行くから…。　俺の頑張ってる姿見に来てくれよ、えっと…」

「私の名前は巫<sup>かんなぎ</sup>　瑠衣<sup>るい</sup>だよ」

「そつか、それじゃ瑠衣。応援に来いよ　それと、他になんの競技に出るか教えてくれ」

「ふふ　私は後、バレーだよ　応援してね？凜矢くん」

「了解！俺はもう一つはサッカーだから。そんじゃ、また後でな、

瑠衣  
」

俺は瑠衣に別れを告げていつもと様子の違う夏芽と一緒にソフトの決勝へと向かった…。

N a t u m e   H i r a g i

私は凜くんを探すために凜くんが走って行った方を探した…。

私は校舎の角を曲がった時、それを見てしまった…。

「な…んで…凜くんが…。」

女の子と抱き合ってるの？

私は目を疑った…。

しかも、相手の子はさっき戦った相手ピッチャー…。  
付き合ってるの？凜くん…。

心の中で聞いても答えは返ってこない…。

胸が締め付けられる様に痛い…。

なんで？なんでなの？

疑問が頭の中を渦巻く…。

私は彼を呼んで確かめたいと思った…。

「あつ、り、凜くん！えっと、次の試合が始まるから、来て！」

でも、口からは思っている事と別の事が溢れだした…。  
凜くんと女の子は楽しそうに笑ってる…。



私は手首に着いている、銀色の腕輪をそつと撫でながら、泣きそつになる気持ちを必死に押さえ込んでいた…。

## 登場人物紹介

ヒロイン2

柊 夏芽

（ひいらぎ なつめ）

16歳、水瓶座、O型

誕生日

2月3日

趣味

料理、読書

好きなもの

甘いもの、凜くん、ラブストーリー、

嫌いなもの

苦いもの、虫、寂しい空間

本作のヒロインの一人。

凜矢の幼なじみ。

幼い頃、凜矢と未来を含めた3人でいつも遊んでいたが、夏芽が引越してからは手紙のやり取りしかしていなかった。

その頃から凜矢が好きで、お揃いの銀色の腕輪をプレゼントしたり、将来結婚する約束をしていた。

運動がけっこう苦手で、あまり体力がない。

今回引越して来たのには理由がある。

基本明るくておとなしいと、変わった性格をしていて、悪ノリが好き。よく、えへへと特徴的な笑い方をする。

未だに、銀色の腕輪を二人とも大事にしている。

「今回は柊 夏芽さんでした」

「えへへ よろしくね」

「でも、今話ではいろいろ大変な事に…」

「うえーん、思い出したくなかったのにー！」

「えー、すみません、夏芽さんが泣いてしまいましたのでこの辺で…」

次回は神楽 百合さんを紹介します ノシ

第19話：球技大会4日目…〔中編〕（後書き）

次回は神楽 百合さんを紹介します

## 第20話：球 技 大 会4日目…〔後編〕（前書き）

今回は神楽 百合さんを紹介します

作者は明日から学校です、これから毎日更新が難しいですが頑張りますのでよろしくお願いします

第20話：球技大会4日目…〔後編〕

【さあッ！　とうとうこの時がやって来ましたッ！　ソフト決勝戦ッ！　優勝するのはどのチームなのか！？　それでは、始めてくさいッ！」

決勝戦が始まった…。

2　A a チーム

V S

3　B a チーム

このチームとは因縁がある…。

それは、俺のクラスのbチームが第1試合で戦った相手だからだ…。  
…そりゃ、bチームも負けるよな…。決勝にくるほどのチームと当たったんだから…。

まあ、絶対勝って仇をとってやるさ…。

俺はそう意気込み、守りに向かった…。

【パアアーンッ】

「ストライクツーッ！」

どうやら、百合は全然疲れてないようだ…。  
球のキレも全然衰えていない…。

【パアアーンッ】

「ストライクッ！バッターアウトッ！」

あっけなく三振した一番打者…。

【パアアーンッ】

続いて二番打者も打ち取った…。

三者三振…。

今までの試合で百合の球を打てた人はほとんどいなかった…。

「神楽さんッ！このチームの四番バッターは危険だから…。秘密兵器を投入だよ！」

「はい、わかりました！如月さん！」

なんだ、秘密兵器って…。まだ、何かあるってのか？

百合と如月さんの会話を聞いた俺は、疑問符が頭に浮かんでいた…。

「一番バッター！早く来てください！」

「あっ！ はい、すぐ行きます！」

審判の声が聞こえ、俺は現実に呼び戻された…。

相手ピッチャーは野球部らしく、かなりガタイがよかった…。

【パアアーンッ】

「ストライクッ！」

けっこんな早さの球がミットに突き刺さった…。

「なっ…」

早さだけなら百合よりも早いぞ…。

相手ピッチャーがモーションに入った…。

【キーン】

「ファールッ！」

くそ、追い込まれたか…。…さすがは決勝戦だけはあるけど…。

相手ピッチャーがボールを放った…。

…でも、タイミングさえ掴めば…。…！…

【カキーン】

俺の打球は遠くへと流れるように飛び2ベースヒットになった…。

「ふう、びつくりした…。」

俺は観客席の方を見た…。

……あ、いた…。

麻美達より少し離れたところにその子はいた…。

……瑠衣……。

俺はやっぱり来てくれた事に嬉しくなると同時に、頑張っ  
て絶対勝たなくちゃと、改めて気合いが入るのだった…。

続く2番バッターの百合もヒットを打って1、3塁になった…。

次のバッターは和磨…。

【パシッ】

「ボール、フォアッ！」

どうやら相手は1点を諦め、満塁にしてゲッツー狙らしい…。

でも、次のバッターは直樹…。

アイツならどんなに早いボールでもゲッツーにならないように打つてくれる筈だ…。

俺はこういう時はかなり真面目になる直樹を信用する事にした…。

【カキーン】

「ファールッ！」

1球目はファール…。

2、3球目はボールとなった…。  
そして、4球目…。

【カキーンッ】



直樹の打球は遙か遠くに飛んで行き、観客席に落ちた…。

満塁…ホームラン…。

ゲッツーにならないように打つとは思ってたが、まさかホームランを打つとは思わなかった…。

直樹がホームベースを踏んでベンチに戻って来た…。

「イイッヤッフオオオオツ！　どうよツ！これが俺の真の力だ！」

…直樹…：さっきまでのお前だったら、きっとお前の望むラブラブ  
コメコメの主人公になれたろうに…。…自分でチャンスを潰すとは、哀れな奴だ…。

その後は、5番の如月さんが塁に出たものの、三人連続でフライに打ち取られ、初回は終わった…。

2回の表、俺達の守る番になった…。

俺は百合の秘密兵器というのがとても気になっていた…。

相手バッターは四番…。聞いた所によると、相手バッターの人は今までの全試合、打たなかった打席はないようだ…。

百合がモーションに入った…。

【パアアーン】

！…！…ス、スライダーかよ…！…！

相手バッターも驚いている…。

今まで、百合の変化球はカーブだけだと思ってたが…。…まさか、スライダーも使えるなんて…。…今回も失点0を狙っているようだ…。

相手四番は驚きと戸惑いにより為す術なく、あっけなく三振に討ち取られた…。

その後のバッターにはカーブで充分らしく、スライダーは使わなかったが全員三振にした…。

試合は2回3回と進み、試合はコールド勝ち…。

なんだか、弱点を見つけたらしい如月さんはそれを皆に言い滅多打ちにした…。

結果は25 0…。

これで百合は全試合無失点とあり得ないような結果を出した…。

サッカーの準決勝も難なく勝ち進んだが、bチームは負けてしまった…。

明日で長かった球技大会が終わる…。

という事は明日は叶と出かけるという事だ…。

俺は自分でもキモいと思いながらも、緩む頬を直す事ができなかった…。

ヒロイン 3

神楽 百合

（かぐら ゆり）

16歳、乙女座、A型

誕生日

8月25日

趣味

読書、茶道、華道

好きなもの

優しい人、読書、静かな場所

嫌いなもの

曲がった事、軽い人、五月蠅い場所

本作のヒロインの一人

凜矢とは高1の頃から一緒に、その時にクラス委員の仕事を手伝って貰った事で知り合った。

高1の委員長だったために、凜矢から委員長と呼ばれていたが、この頃は違うようだ。

家は道場で茶道に華道、弓道など、様々な事をやっていて、かなりの凄い人。

綺麗な黒髪が印象的で、大和撫子という感じが、多少、凜矢に好意を持っているようだ。

何故か、皆に対して敬語を話しているが、本当はあまり敬語を好ま

ない。せめて自分だけにはタメ語で話すよう凜矢に言われ、凜矢にはタメ語を使っている。

「さて、今回は神楽 百合さんです」

「ふふ よろしく願いします」

「しかし、よくよく見てみると、かなり大和撫子だな…才色兼備っていうか…」

「ふふふ ありがとうございます でも、誉めても何も出ませんよ？」

「……なんか、俺が惚れそうです ……」

今回は今井 美香さんを紹介します ノシ

第20話：球 技 大 会4日目…〔後編〕（後書き）

昨日、ご指摘を頂き、第19話の終 夏芽さんの紹介を少しだけ換えました。

あまり変わってはいませんので気にしない方はスルーしてください  
…。

次回は今井 美香さんを紹介します

第21話：球技大会5日目…〔前編〕（前書き）

球技大会が5日目に入りました  
今回は今井 美香さんを紹介します  
それでは第21話どうぞ

## 第21話：球技大会5日目…〔前編〕

球技大会5日目。今日で、長かった球技大会が終わる…。

今日はサッカーの決勝の後にバレーの準決勝、決勝をやる。

負けたクラスも最後の1日のため、かなり賑やかになるだろう…。

叶との約束もある…。今日は金曜日だから、明日はバイトもある…。

今週はホントにハードだった気がするな、まだ終わってないけど、体を動かし過ぎてけっこう疲れた…。

そろそろサッカーの決勝が始まる…。

『さあーッ！　とうとう来たぜ最終日ッ！　優勝候補の2　Aaチームを倒す事が出来るのかッ！？　それでは、始めてくださいッ！』

試合開始。

2　Aaチーム

VS

2　Caチーム

決勝の相手が2年とは驚きだな…。

相手はいかにも運動神経が良さそうな軍団だ…。

…ふふ　まあ、勝つのは俺達さ　……。

俺達は最初からハイペースに相手ゴールを攻めた…。

ボールが俺に渡って来た…。

ダッシュで近くににいる敵を抜き去り、俺は和磨にパスを出した…。

和磨は敵をフェイントで抜きながら敵ゴールを目指した…。  
和磨が麻美にパスを出し、麻美の殺人シュートが炸裂した…。  
相手のキーパーは一步も動けず…というより怖くて動けなかったよ  
うだ…。

相手がボールをキープし俺に突っ込んで来た…。  
足が離れた一瞬の隙について、ボールを奪い取る…。

「よしっ」

「凜矢！」

直樹が俺を呼ぶ声がしそちらを見たが、どうやらパスは出せそうに  
ない…。  
…このまま行くか…。

俺はダッシュで相手を抜き去る…。

…一人…二人…三人…。

ペナルティエリア外だが俺はシュート体勢に入る…。

【バシューウウッ】

俺のシュートはポストすれすれを通りゴールネットに突き刺ささつ  
た…。

「よっしゃあ！」

「よくやったな凜矢！」



直樹が俺を褒めるが、いつもがいつもなだけに、違和感がありまくる…。

前半が終了…。

その時点での得点は4 1。

…やはり、さすがは決勝戦だけあって無失点ではいらないか…。それに、少しでも油断するときと追い付かれてしまう…。それぐらの気迫が相手からは感じられた…。

「ふう、ちよつとキツくなってきたかな…。」

「…麻美と美香はバレーもある…。…後半は俺達が大半動くから、アシストを頼む…。」

「ええ、わかったわ…。」

「了解だよ、和磨…。」

そして後半が始まった…。

「よっしゃあッ！ 全種目優勝目指すぞッ！？」

「おーッ！ x多数」

直樹のかけ声に皆が気合いの入った言葉を返す…。

ひとつに纏まっている感じが俺を嬉しくする…。

…これならきつと勝てる…。

俺達は相手ゴールを目指して走り出した…。

試合終了。

結果は10 3と後半は凄い状態だった…。

皆が勝つために一つにまとまった結果だと俺は思う…。 まあ、凄

すぎる結果ではあるんだが…。

これで、bの仇は取ったな

へっ、ざまあwwww

これで2 Aの2種目優勝が決まった。

「残り1種目、頑張れよ麻美」

「うん まっかせなさいよ」

「あれ？ 私には応援無し!？」

「ん？ ああ、美香も頑張れよ。」

「何よそのついでみたいな言い方は…!」

「ははは、まあ気にするなって……。」

「うー、和磨は応援してくれるよね？」

「俺なら何時でも応援してや」「アンタの応援なんかいらない……。」

……はい……。」

「……まあ、無理しないように頑張れよ……。」

「うん　ありがと、和磨」

美香と麻美はバレーの準決勝に向かい、俺達もその応援に向かった。

【さあ！　学園始まって以来二度目の２種目優勝をした２　A！  
このまま、初の全優勝をする事が出来るのか！とても気になるところです！　それでは、準決勝を始めてください！】

準決勝が始まり、皆の盛り上がりもけっこうなものになってきた…。あまり五月蠅いの好きではないが、こういう時の五月蠅さは許容範囲だ。

あっという間に　7　0と優勢にたった…。

「この調子なら勝てそうだな。」

「それは分かんねえぞ？　まだ始まったばかりだしな。」

「…そうだな……。…相手も準決勝まで上がってくるだけの实力がある……。」

「そうだけだよ。でも、勝つと思わないか？」

「思う」

「…ああ、絶対勝つだろうな……。」

俺達は絶対勝つと思っているようだ。

「私も夏姉え達が勝つと思うよ」

「はい、私も先輩のクラスが勝つと思います」

未来も叶もそう思っているらしい。  
つか、全員だな…。

「俺ちよい便所行つてくつから。」

「ああ、花子さんに会つて来い。」

「死亡フラグかよ！？つか、花子さんって女子トイレだろうが！」

「なら太郎くんか？」

「知らねえよ！しかも花子に太郎って組み合わせが古いよ！」

「トイレ行かないのか？」

「俺のツツコミをスルーすんじゃないか！」

「で？ 便所は？」

「…行つて来ます…。」

「ああ、花子さんに会つて無限ループ！？…早く行けや…。」  
「…はい、すみませんでした…。」

直樹はトイレへトボトボと歩いて行った。  
さて、俺も試合に集中するか…。

お、どうやら2セット目に入ったようだな…。

1セット目は大差で勝てたらしい…。これなら後も大丈夫だな

「あの、ここ空いてますか？ 凜矢くん？」

「ふあ？」

俺は突然の声にすっとんきょうな声を出してしまった。

「あ、ああ、瑠衣か…。びっくりしちゃったよ…。」

「ふふ 突然ゴメンね？ ここ座っても大丈夫かな？」

「ああ、いいよ。」

「隣の方は？」

「…構わない……。…どうせ、居ても居なくても同じ奴だ……。…気楽に座ってくれ……。」

「ふふ ありがとうございます」

瑠衣は和磨にお礼を言ってから、直樹の居た場所である俺の隣に座った。

「おい、凜矢…。」

「おう、おつかえり」

「何が『おつかえり』だよ！　なんで俺の居た場所に人が座つてんの！？　なんでその人が可愛いの！？　つか、紹介してくれ！」

「どうせテメエは紹介が一番の目的だろうが！」

「凜兄い、私も紹介して欲しいかな？」

「私もです…。」

なんか、1年コンビからかなりのプレッシャーの圧力がかかってきてるんだが…。

「あ、ああ、紹介するよ…。　彼女は巫　瑠衣…。　いろいろあつて友達になつた…。」

「いろいろつて？」

くっ、未来が突っ込んで聞いてきた…。

「いや、まあ、えつと、叶と似たような事だ…。」

だいぶ嘘だがホントの事なんて言いたくないし…。

「へえ、瑠衣ちゃんって言つんだ？　俺は直樹って言つんだ。よろしくね」

「はい、貴方が居ても居なくても同じ奴ですね」

「……………誰がそんな事を？」

「はい、隣の方です」

「かあああずうううまあああああ!!」

「…五月蠅い、はっ倒すぞ、バカ……。」

「…すみませんでした…。」

どうやら、バカはかなり弱い事がわかった…。

「まあ、バカは別のとこ座れ。」

「何故!?!」

バカが叫んでいたが、もう知ったこっちゃない…。

俺達は試合を見ながらも瑠衣を含めた皆で楽しく話していた…。

## 登場人物紹介

サブキャラ

今井 美香

(いまい みか)

16歳、射手座、B型

誕生日

12月4日

趣味

剣道、噂集め、弱味握り

好きなもの

噂（他人限定）、弱味（他人限定）

嫌いなもの

情報通（他人限定）

本作の一応サブヒロイン。

噂や弱味が好きで情報をいつも集めている。

麻美と一緒に剣道部に入っていて実力もけっこうある。

和磨と幼なじみらしくかなり仲がいいようだ。

かなり勘が鋭く、弱味を握るなどの行動により、ついたあだ名が『

松浜の裏の支配者』。

麻美の良き理解者で親友。いつも麻美の相談を受けたりしている。

情報は集めるが本人以外にはあまり他言しないのが主義。

暗黒の手帳（黒い手帳で中に人の名前とその人の弱味が書かれている）を何冊も持つ。

「さあて、美香さんは一番怖い存在ですね」

「作者の『びー』ってのも私知ってるもんね」

「……………望みは何ですか…。」

「いや、この頃出番が少ないかなって思っただよね」



「でも、一応サブキャラだし…。」

「そっか、なら『ぴー』が人に知られてもいいって事ね？」

「いえ、すみませんでした！ これからは出来るかぎり出したいと思います！」

「そっかぁ、其処まで出て欲しいなら仕方ないかな？ 出てやっても…。」

「…はい、おねがいします…。」

次回は夜島 未来さんを紹介します ノシ

第21話：球技大会5日目…〔前編〕（後書き）

次回は夜島 未来さんを紹介します

次の話もできるだけ早めに更新しますのでよろしくお願いします

第22話：球技大会5日目…〔後編〕（前書き）

3日ぶりです

今回は矢島 未来さんを紹介します

それでは第22話どうぞ

## 第22話：球技大会5日目…〔後編〕

決勝も終わり放課後を迎えた。

2 Aは全種目優勝という輝かしい栄光を掴んだ。桃華先生も『やった！ ボーナース！』と大喜びをしていた。

「ねえ凜矢？ 皆で打ち上げにカラオケ行かない？」

麻美が俺を誘って来た。

「いや、辞めとく…。今日は先客があるからな…。」

「そう…。」

「あつ、先輩！ 迎えに来ました」

「何！？ 羨まし過ぎる！」

麻美と話しているとホントに叶が迎えに来てくれた。バカはシカトだ…。

「おう、ホントに来てくれたんだな んじゃ、行きますか」

「はい」

いや、やっぱり叶の笑顔は可愛くて癒されるよ…。

「そんじゃ、またな麻美に美香に百合に夏芽に和磨！」

「あ、ああ、うん…。 バイバイ。」

「バイバイ」

「うん、じゃあね」

「う、うん…。 バイバイ、凜くん。」

「…じゃあな、凜矢……。 」

「俺には無しですか!？」

バカが何か言ってるけど無視だ、無視！

俺は叶と一緒に教室から出た。叶は律義にもお辞儀をしてから教室を出た。

「ちよつと!？ 無視ですか!？」

中からバカの叫ぶ声が聞こえてきたが、それすらも無視してやった。

俺達は学校から出て、繁華街へと向かった。

この近くには繁華街や商店街など、学校が近いためか、けっこうたくさんのお店がある。

「叶、先ずは何処に行くんだ？」

「そうですね…。 ゲームセンターにでも行きましょう」

「ふふ ああ、わかった」

俺達はゲームセンターに向かった。

「わあ、久しぶりに来ましたよ、先輩 …… あっ、これ可愛い」

「ん？ よし、いっちょ取ってやるよ」

「ふえ？ いいんですか？」

「ああ、苦手ではないしな」

俺はUFOキャッチャーに挑んだ。

まあ、苦手ではないが得意という訳でもない…。なんか、まあ、叶に良いところを見せようと思ったんだ…。

結局、300円を消費して一つをとった。

叶が可愛いと言っていたのはリスのぬいぐるみだった。

うん、叶と似てるな、このぬいぐるみ

俺は取ったぬいぐるみを叶に渡した。

「わあ、いい ありがとうございます」

叶はまるで小さい子供のようにきゅんきゅんとはしゃいでいる。

きゅん

「はう！？先輩！？」

俺は叶が可愛すぎたせいで理性を保てなかったようだ…。

「いや、ワリイ…。あまりに可愛すぎたからさ、叶が」

俺はちょっと気恥ずかしくなり、からかい半分に叶に言った。

「はう！？そ、そそそんな事…！／／／／」

「ホントだぞ？だから思わず抱きしめちゃったんだよ」

「はうう、私にさえ抱きつく先輩はきつと抱きつき魔だと思います  
…／／／／」

叶の反応が毎回可愛くてどうしても苛めたくなる。

「そうか、そんなに叶は俺に抱きしめられるのが嫌だったんだな？  
うう、泣きそうだ…。」

「あわわ、せ、先輩、そんな、嫌な訳ないです！凄く嬉しかったですよ！？……／／／／」

「そうか？ならもう少し抱きしめさせてね？」

「ふえ！？」

ぎゅう

俺はさっきより少しだけ強い力で抱きしめた。

「先……輩……？」

俺は叶がこつちを見れないようにしながら、泣きそうになる自分の顔を隠した…。

そういや、叶って未来と背が同じぐらいなんだな…。昔はよく、未来を抱きしめてあげたっけ……。ふふ、あの時はできなかった癖に、今ではその友達を抱きしめてるなんてな…。なんて愚かな兄なんだろう…。

「先輩？」

「……ん？ どうした、叶？」

俺は泣きそうな顔をなんとか平常に戻し、叶の顔を見た。

叶は顔を真っ赤にしていた。

…やべ、可愛すぎる……。キスしても大丈夫かな？……。いや、そんな事したら嫌われちゃうしな……。ああ、くそ、理性が砕けそうだ……。…そんなに上目遣いにこつちを見ないでくれ…。

「はう、せ、先輩、周りからの視線が……。」

「ん？」

俺は周りを見回してみると、男からも女からも嫉妬と羨望の眼差しが痛い程に届いてきた…。

……うん、男の嫉妬と羨望はわかる…。叶はかなり可愛いからなだが、女の嫉妬は何ですか？羨望はシチュエーションって事だとは



思っ<sup>レス</sup>んだが……まさか、百合か！？  
でも、皆はないよな……。それより……

「まず、此処から離れよう……。」

「そうですね……。凄く、恥ずかしいです……。／＼／＼」

俺は叶の手を取って、走るようにゲームセンターから出た……。

「ふう、あゝ恥ずかしかった……。」

「はい、ホントです……。／＼／＼」

叶はホントに恥ずかしいらしく顔を真っ赤にしている。

「さて、これから何処に行く？」

「はい、それじゃあ、そろそろ約束通りにご飯をご馳走します」

「ああ、確かバイト先だったか？ 此処から近いの？」

「はい、だから行きましょう！」

叶は俺の手を引っ張るように叶の言うバイト先に向かった……。

## 登場人物紹介

ヒロイン 4

矢島 未来

（やじま みく）

14歳、双子座、O型

誕生日

6月14日

趣味

料理、掃除等の家事全般

好きなもの

料理、掃除、可愛いもの

嫌いなもの

汚い場所、インスタント、ホラー

本作のヒロインの一人。

凜矢の妹で高校1年生。

家は凜矢と二人で暮らしていて、両親は仕事で地方にいる。

体が少し弱く、あまり運動をしないが、本人は運動が大好き。

叶とは中学校時代から親友でかなり仲がいい。

夏芽とはかなり小さい頃に一緒だったためか、夏姉えと親しく呼ぶ。

凜矢とは仲がとてもよく、かなり微笑ましい兄妹だが、互いに想い合うばかりに少し過保護になっている。

凜矢の様子には敏感で、ポーカーフェイスは大半見抜く。

凜矢のためにバイトが終わるまでご飯も食べずに待っているなど、かなり凜矢の事を気にしている。

「今回は矢島 未来さんです」

「よろしくね」

「はっきり言ってブラコンですね…。」

「まあ、凜兄いがシスコンだし それに、凜兄いカッコいいから大好きだもん」

「はあ、俺も妹が居たら一度は言ってもらいたいよ…。」

「大丈夫 もしかたら出来るかもよ？」

「いや、絶対無理だし…。」

次回は橋本 和磨を紹介します ノシ

## 第22話：球 技 大 会5日目…〔後編〕（後書き）

ご指摘がありましたので、今までに出てきたサッカーの得点を直しました。（作者もやり過ぎた感がひしひしと）

ほとんど、これからの展開に関係はないので気になる方は読んでください。

次回は橋本 和磨くんを紹介します

第23話：デート 驚愕：（前書き）

総ユニーク数1万人突破！

ありがとうございます！

これからもよろしく願います v(^o^)

今回は橋本 和磨くんを紹介します

それでは第23話どうぞ

第23話：デパート 驚愕：

俺達は叶が働いている？というお店に向かっていた。

「さっ、先輩着きましたよ？」

え？もうですか？さっき出発して3分も経ってないんだが？

それに、この近くには俺がバイトしているリムレットがあるんだが…。

「この路地を曲がった所にバイト先があるんです…。目立たないけど凄く美味しいんですよ？ きっと先輩も大好きになると思います」

え？この路地を曲がるって……この先には…。

「はい、着きましたよ 私のバイト先で、お姉ちゃんも働いている喫茶リムレットです」

そう此処は俺が週3回働いていて、バイト日以外にも家から近いので来る、リムレットだった。

「？ どうしたんですか先輩？」

「いや、えつとなんて言うか……俺のバイト先も此処…。」

「……………えええ！？」

叶はかなりの驚きようで、目を大きく見開いていた。

「俺もびつくりしたよ…。まさか、叶が同じ場所でバイトしてたなんて…。何時からなんだ？」

「たしか…去年からでした。」

「ほ…。しかし、今まで逢わなかったとはな不思議なくらいだ…。」

うん、かなり不思議なまでに逢わなかったな。  
リムレットにはけっこう行くから一度は会っててもいいのに。

「はい、ホントに不思議です…。先輩が此処でバイトしてる所なんて見たことなかったです…。」

「ああ、そうだな。叶は何を担当してたんだ？」

「はい、ほとんどはキッチンの方に居て、たまに注文に回ってました…。」

「ほう、叶のウエイトレス姿か…。」

うん、絶対に可愛いよな。しかも、ちょっとドジしたりして…。  
うっわ、想像したらニヤけてきた…。

「先輩、なんか鼻の下が伸びてますよ…？それに、私のウエイトレス姿なんて見たって可愛くなんて…。」

うおつと、考えていた事が口から出てたようだ。

しかも、鼻の下が伸びてたなんて、これからは気をつけるようにしないとな…いろんな意味で…。

「さて、そろそろ入ってくつろぐか…。」

「はい、そうですね」

俺達はリムレットの中にへと向かった…。

【カランカラン】

「はーい、いらっしやーい　よくも私の大事なだーいじーな叶をたぶらかしてくれたじゃない、狼さん？」

なんか、奏さんのドスの効いた声が出てきた…ってかマジで怖いし……。

「もう、お姉ちゃん止めてよね、先輩が困ってるじゃない…。」

叶が奏さんを咎めた……って、

「ええええ！？　お姉ちゃん！？」

俺はお店の中だというのに大声で叫んでしまった。

「え？　叶が連れて来た男って凜矢くんだったの？」

「あれ？　お姉ちゃん先輩と知り合いだったの？」



奏さんの疑問に叶は疑問で返した。

「え、ええ、シフトで重なるし…。 叶が来ない日にシフトに入ってるから、今まで逢わなかったのねきつと。」

どうやら、力関係は奏さんく叶らしい。

「そうだったんだ。 先輩、紹介します 私のお姉ちゃんです」

「いや、知ってるって…。 そうか、そういや二人とも苗字が同じだもんな。」

「あれね？ 知り合った時に気付かなかったのかな？」

「い、いや、多少似てるとは思いましたが、如何せん性格が違い過ぎて…。」

「ふん？ 私の性格が悪いつて言いたい訳ね？」

奏さんが目を細めながら俺に問いかけてくる。

「い、いえ、けっしてそんな事はないでしゅよ？」

俺は、上ずった声を出しながら言葉を囁んでしまった。だって、マジで怖いもん。

「そう？ なら気にしないであげるわ」

「ありがとうございます！」

俺は怖さのせいか頭を下げてしまう。  
ふゝ、なんとか乗り切った…。

「でも、私の大事な叶に手を出したら例え凜矢くんでも……只じゃおかないから……」

音符付いてるのにかなり怖いよゝ！？極寒の如く冷たい目してるし！

「はい、わかりました…」「いい加減にしないと怒るよ、お姉ちゃん！？」…」

叶が俺の言葉を遮りながら奏さんに言った。  
どうやら、少し怒りかけてるようだ…。

「うゝ、怒らないでよゝ、叶…叶の為にしたんだよ？」

「先輩はとても優しくて良い人です！それにカッコいいし、話していて楽しいんです！だから、邪魔しないでね、お姉ちゃん。」

「うゝ、凜矢くん…いつの間に私の大事な妹をたぶらかせて…」「お姉ちゃん！」「…うゝ、わかったわ、今日は此処に最後までいるんなら、大目に見てあげる…。」

奏さんは渋々、今日のデートを許してくれたようだ…。

そういや、奏さんが言ってたな…叶がデートだって嬉しそうにしてたって（多少違う予感）…。  
そう思うと俺は凄く嬉しくなった。

「それでいいんでしょう？ 叶？」

「うん     ありがとう、お姉ちゃん」

「うんうん     大切な妹の頼みだもんね     その替わり、条件は守ってね？」

「うん」

奏さんの了承に嬉しくなったのか、叶は奏さんに抱きついた。  
奏さんも、ホント優しいよな……。こんな俺と未来もこをな兄妹にな  
ってみたいな。

「凜矢くんもいいね？」

「はい、ありがとうございます     奏さん」

「うん、それじゃあ私は戻るからごゆつくり」

「……………は、私も叶に甘いわね？     ホント……………でも、あの子の恋  
だし、少しぐらいは許してあげるとしますか」

奏のその呟きに二人はまったく気付かなかった…。

## 登場人物紹介

サブキャラ

橋本 和磨

（はしもと かずま）

16歳、天秤座、A型

誕生日

10月15日

趣味

読書

好きなもの

読書、静かな場所

嫌いなもの

五月蠅過ぎる場所

本作の一応サブキャラです。

ちよつと無口で、無表情だけど、かなり友達思いで優しい性格。無口ではあるがノリがいい。

美香とは幼なじみで少なからず好意を持っている。

直樹と凜矢とは1年生の時に出会い、親友を続けている。

運動神経抜群、成績優秀、容姿端麗と完璧超人だが、色恋が少し苦手。

凜矢のする事にけっこう興味があるらしく、たまに訊いてくる。

「はい、今回は橋本 和磨くんです」

「…よろしく……。」

「しかし、ここまで凄い人物とは……。生徒会にでも入れればいいのに……。」

「俺は上に立つより、上に立つ者の補佐の方が似合ってるからな……。後、補佐するなら凜矢じゃないと楽しくない……。」

「なんて凄い人だよ……貴方って人は……。」

「……まあ、作者も凄い人だな……。」

「何故だろう……その言葉が俺の心にグサツと突き刺さったんだが……。」

「……気にするな……。」

次回は姫宮 直樹を紹介します ノシ

第23話：デート 驚愕：（後書き）

次回は姫宮 直樹くんを紹介します  
これからも、一週間以内には更新しますので、  
みなさん気長に待っていてください（＾o＾）

## 第24話：出会い

美少年…（前書き）

一週間もあればもつと書けるはずだ！

という神のお告げがありまして、少しですが長くなっています。

作者も新たな学年に慣れてきたので、これからは更新速度を上げたいと思います。

待っている方、すみませんm（――）m

今回は姫宮 直樹くんを紹介します

それでは、第24話どうぞ

俺と叶は互いに向かいあつて席に座り、それぞれに注文をした。

「ご注文はお決まりですか、狼さん？」

「…また、それですか…。俺は狼なんかじゃないですってば…。」

俺はいい加減にしてくれというように肩を竦めながら言った。

「じゃあ、欲求不満の狼さんね？」

「もう、お姉ちゃんいい加減にしなさい！」

「は、はいいいッ！」

奏さんはそそくさと注文をとってカウンターに戻っていった。

…奏さん、ありがとう…。…身を持って叶の怖さを教えてくれたんですね…。

「先輩…？」

「は、はいいい！」

俺は咄嗟に怯んだ声を出してしまった。

「うゝ、先輩まで怖がらないでくださいよゝ。先輩には怒ったりしませんからゝ。」



叶は目尻に涙を……って！

「わかった！ 叶は優しいいい子だもん！ わかったから泣かないでくれ！」

後ろから人を殺せるんじゃない、得物……もとい獲物を目の前にした獣の視線が、さっきから背中にビシバシと当たっているんだ……。一粒でも落ちたら俺は殺される……。かといって、今叶に触れても奏さんに殺されると思う……。どうしたものか……。

「か、叶！ い、いつから未来と友達になったんだ？」

悩んだ結果、前に聞いたような事を訊いてしまった。

うわゝ、失敗したな……。

「はい？ えつとですね、未来ちゃんとは、中学校に進学した時からの親友です！」

うん、効果は的面だったようだ……。叶は抜けてるからな……。うん……。

「私が道に迷って困ってたら、未来ちゃんが一緒に行ってくれたんです！ そしたら、クラスも同じだったから……！」

「へえゝ、叶は昔からドジだった訳か……。」

俺は和んできた空気に乗って、叶をからかう事にした。

「はうゝ、先輩……いじわるです……。」

俺は叶の反応が面白くて、追い討ちをかけた。

「そんな可愛い顔で怒られても、全然怖くないよ？　むしろ、その表情も俺は好きだよ？」

「はう！？……あう……あつ……う……。」

叶はボンツと音が鳴りそうな勢いで顔を真っ赤にしながら、口をパクパクさせ、何かを言おうとしたが、結局言えなかったようだ…。

「ははは、冗談だよ、叶」

「あう、先輩は意地悪過ぎます…。」

叶が俺を咎めるように言った。

「はは、ゴメンな、叶」

「う、先輩だから許してあげます…。他の人だったら絶対にメッです！」

ふふ、叶は不思議な子だな　ドジで危なっかしい割に、人を安心させてくれる暖かさがある……それに、からかった時の反応も可愛いしな

「先輩は、橋本先輩に姫宮先輩とどうやって知り合ったんですか？」

叶は好奇心に道溢れた顔で俺に訊いてきた。

「ん？　アイツ等とは確か……。」

それは、俺が高校に入学した日の事だった…。

「凜兄いゝ、行つてらっしやゝい」

「ああ、行つて来る　戸締まり頼んだぞ？」

「はゝい」

俺は今年から高校１年生になる…。不安や期待のいりまじる気持ちの中、俺は未来に行つて来ますをして、玄関をでた。

「おはよう、凜矢」

「ああ、おはよ、麻美」

今まで通り、俺は麻美と一緒に学校に向かった。いつも通りじゃないのは未来が一緒じゃないって事ぐらいか。

「今日から新生、張り切つて行かないと」

麻美はウキウキと楽しそうに呟いた。

「麻美は剣道があるからいいけど、俺にとってはつまらないの一言だな…。」

「まったく、何言ってるのよ？ 凜矢だって部活に入ればいいでしょ？」

麻美が俺の言葉に正論をぶつけてきた。

麻美の言う事はもっともだが…

「部活なんてやったら、未来が毎日一人になっちゃうだろうが！それにバイトするつもりだしな」

「はあ、まったくいつまで経ってもシスコンなんだから…」

麻美は呆れたというようにため息を吐きながら言った。

「それに、結局バイトするなら意味ないんじゃない？」

「いや、それがあるんだよ…。一つは小遣い稼ぎ、もう一つは未来が誕生日の日や、あの親父達の誕生日等を豪勢にするためだ！」

俺は自分の目的を心からの叫びとともに語った。結果、麻美は感動して涙が…

「はあ〜…。」

…出なかった。それどころかため息を吐きやがった。

「なんだよ？ 誕生日のプレゼントも買ったりしたいんだ、それなりに稼がないと…」

「その…さ…。私の誕生日にもプレゼントくれるの…？」

麻美が不安気に上目使いに訊いてきた。

…く、反則的なまでに可愛いなコイツは……。

「あつたりまえだろ？　可愛い幼なじみの誕生日だしな」

「……………そっか、幼なじみだからか……。」

俺が誉めてあげたにも関わらず、顔を俯かせ、ブツブツと話し始めた。

……………なんなんだ、いつたい……。

俺は不思議に思いながらも遅刻しないように歩きだした。

俺達が校門までくると人がごった返していた。

「ダルいな、こりゃ……。」

俺はため息混じりにそう呟いた。

「…同感だ……。…むさつ苦しいだけで能率が悪い……。…もっと色々な場所に貼るべきだ……。」

俺は驚いて隣を見ると、そいつもこっちを見た。

「…そう思わないか……。…名を知らぬイケメン君……。」

俺に話しかけて来た野郎はかなりの美少年と言えるほどの顔だった。

クールに見えるその顔にはメガネをかけて、より知的に見せている。  
…はあ？俺がイケメンだ？…嫌味か？嫌味だよな？……俺が不細工だからってか…？

「はあ？ そりゃ、不細工な俺に対する嫌味かよ？ おい…。」

「…ぶ、さいく……？…それは君自身を言っているのか……？」

美少年はメガネの奥に動揺の光を見せながら、俺に訊いてきた。

「当たり前だろ、誰もお前のような美少年に一々、不細工なんて言うかよ…。それとも、俺は不細工ですら表せないほどキモいとも言うつもりか？」

俺は少しキレかけながら美少年に言った。

「…まず、不細工なんかじゃないな……。…完璧にイケメンの部類だ……。…そんなに綺麗な顔立ちで不細工と言うほうが、嫌味に聞こえるぞ……。？」

美少年は俺をイケメンの部類だと言い出した。

「嘘つけ…。俺がイケメンならとつくにモテてるはずだ…。」

俺は嘆かわしい今までの自分を振り返りながら言った。  
…思い出しただけで涙がでてくるぜ…。

麻美の方を見てみたら、なんかバツが悪そうにしていた…。  
…なんなんだ？ まったく…。

「…君は、周りからの視線を感じないのか……？」

「んあ？」

俺は美少年の言葉に周りを見ると、多くの女の子が美少年（本当は凜矢を含む）を見ていた。

「俺達が騒いだからか？ それか、お前が美少年だからだろ……。」

俺は美少年の疑問に嫌々答えてやった。

…だって、どうせ俺は美少年の隣にいる不細工って思われてるんだろっしな……。

「…君はどうやら、ホントに気付いてないようだな……。…くすっ……。…面白い男だな、君の名前は……？」

美少年は何が面白いのか、微笑しながら名前を訊いてきた。

「人に名前を訊くなら先ずは自分から、だろ？」

…ちくしょう、微笑みが様になっていやがる…。

「…そうだったな、すまない……。…俺は橋本 和磨だ……。…君の名前は……？」

「俺は夜島 凜矢だ…。夜島でも凜矢でも、好きな呼び方で呼んでくれ……。」

美少年は橋本 和磨というらしい。

「…そうか、なら俺は名前で呼ぶから、凜矢も名前で呼んでくれて構わない……。」

俺と和磨は名前で呼び合う事で決定した。

「二人と同じクラスみたいね」

「あ!？」

「…!……。」

突然麻美が喋り始めたので二人してびっくりしてしまった。

…さっきからまったく喋らなかったのはそのせいか…。あと、後ろの点はいらないだろ、和磨…。

「どういう事だ？」

俺は麻美に訊いてみる。

どうやら和磨も同感だったらしく、黙って頷いた。

「ん？ 二人と同じクラス、強いて言えば私も含めて三人共だけだね」

「…ふむ、どうやら俺の幼なじみも同じクラスのようだな……。  
…麻美と言ったか、仲良くしてやってくれ、今度紹介する……。」

和磨は麻美と話し始め、俺は暇になってしまった。  
ので、俺のクラスには他に誰がいるのかな?つと…

俺は自分のクラスの名前を見ていると、ある名前で止まった…。



……姫宮 直樹……？

なんだ、この如何にもイケメンでタラシです、みたいな名前は…。  
お姫様ばかりの宮殿だぞ？（只の偏見）

その割に名前は普通だかな…。（今、全国の直樹を敵に回した）

さつきから煩い奴がいるよ…。まあ、うざいのはシカトだな、やっぱ…。

「ひどい……。」

知るかよ、早く書けや……。

「はいはい。俺は先に行きますよ…だ…。」

可愛げのない野郎はとつとどっかに行ってしまった…。

姫宮か…どんな奴なんだろ…。

楽しみに待ってるかな…。

俺はいつの間にか話し終わった麻美と和磨と一緒に自分達のクラスに向かった。

## 登場人物紹介

サブキャラ

姫宮 直樹

（ひめみや なおき）

16歳、獅子座、AB型

誕生日

8月3日

好きなもの

ラブラブコメコメ、女の子、運動

嫌いなもの

勉強、いちやつくカップル

本作のサブキャラ的な存在。

背が高く美形だが、かなりのバカな性格のため、まったくモテない。将来の夢はラブコメ的な主人公と夢までバカ。

運動にだけは真面目で、真剣に取り組む。

昔はたまにしか真面目モードにならなかったが、この頃は頻繁になるようになってきた。

凜矢を羨ましいと思う一方で、凜矢の事を多少気にかけていてけっこう優しい性格、その割に皆からは殴られたりとバカな性格が完璧に足を引っ張っている。

作者にとって、もっとも扱い安いキャラ。

「こんなもんだな...。」

「絶対最後の一行いらないでしょ!？」

「気にするな、いつか番外編みたいな感じで書けたら書くから…。」

「……………貴方の出来たらってかなり信用出来ないんですけど…。」

「……………ハッハッハッ、ナンノコトカボクチャンワカンナイな」

「片言じゃねえかよ!？ しかも、最後の な だけ平仮名だし!？」

「ははは、あんまし気にすると……………痛い目みるぞ…?」

「……………すみませんでした…。」

次回は巫 瑠衣さんを紹介します

## 第24話：出会い

美少年…（後書き）

次回は巫 瑠衣さんを紹介します

あと二人で一旦、人物紹介は終了するつもりです。

それではまた次回

第25話：バカ 到来 直樹：（前書き）

すみませんm（——）m

作者の都合でほとんど完成していたのに、更新出来ずにいました。

今回は巫 瑠衣さんを紹介します

それでは第25話どうぞ

## 第25話：バカ 到来 直樹：

俺達が教室に着くとだいぶ人が座っていた。

「皆、早いんだな…。」

「そりゃそうでしょ。 初日で慣れないから、余計に早く来ちゃうもんなのよ」

麻美は未だにウキウキした面持ちで話していた。

「お前、朝会った時からずっと楽しそうな顔してるな…?」

俺はどうしても気になってしまったので、堪らず訊いてみた。

「そりゃあ、ね これからは、此処で新しい思い出を作るんだって思ったら、楽しみになるじゃない?」

麻美は満面の笑顔、と言った表情で俺に話してきた。

…昔っから、こういう笑顔は、かなり可愛くて好きなんだよな…俺…つか、モロにストライクかも…。

俺は顔が赤くなるのを感じ咄嗟に別の方向を向いた。

「…なんだ…? …赤い顔をしてるぞ、風邪か…?」

向いた瞬間に和磨の顔があった…。

…マジで萎えたわ…。 ……そういやコイツもいたんだよね…。…ったく、この美少年は、もうクラスの女の子の視線を受けまくりやがって…。ましてや、それをスルーとは、これだからイケメンは…。

「…どうした…。…？ ……俺の顔に何か付いてるか…。…？」

「…ねーよ…。」

俺は和磨の問いかけに適当に答えた後、窓際の一番後ろに腰を下ろした。

「私は隣に座るわね」

麻美は俺の隣に座り、和磨は麻美の前に座った。

俺の前は空席…。

…まあ、まだ人が来るだろうし、気にする必要は無いと思うけど…。

そろそろ、ホームルームが始まる時間だ…。

「なあ、前の席がずっと空いたままなんだが？」

俺はさっきからずっと気になっていた事を口にした。

「遅刻みたいね？ 初日からなんて、ホントのバカなのね、そいつ？」

俺は麻美の言葉を聞きながら、窓の外の正門を見た。  
もう、正門は閉まっていて、生徒も全員、席に着いていた。

【ガララッ】

「おーし、席に着いてるなー。ホームルームを始める前に自己紹介をする…。」

教室に入って来たのは、筋肉質な体付きに無精髭を生やせた、やる気の無さそうな先生だった。

「俺の名前は鈴木 太郎だ…。よろしくなー。」

なんつー簡単で何処にでもありそうな名前だよ！？ふりがなすら振られなかったぞ！？

いや、簡単過ぎて逆に珍し過ぎる名前だが…。

いや、それ以前にそんな名前を付ける親がいたとは…。

「ちなみに、俺は名前を変えていて、昔の名前は鈴木<sup>すずき</sup> 柊輔<sup>しゅうすけ</sup>だ…。」

「自分で変えたのかよッ！？ しかも、前の名前の方が断然かっこいいしッ！！」

俺はどうしても突っ込まずには要られず、突っ込んでしまった。

「うーん、と…。夜島 凜矢くん、か…。何故、この名前にしたのかという質問の答えは簡単かつ単純なものさ…。」

急に太郎先生は顔を真面目にして喋り出した。

…いったい、どんな理由があるっていうんだ…？

「それはだな……………名前を書くのが楽だからさ」



【ガタタツ】

クラスの全員が椅子から転げ落ちた。

…いや、和磨だけは椅子に留まり、笑っていた…。お前はきっと大物になると思うよ…。

クラスの皆はバラバラと席に戻り、元の教室に戻った。

「ん？　そういや、其処に人がいないな。」

太郎先生は俺の前の席を見ながら呟いた。

俺はそんなのを聞き流しながら、正門を見てみた。

【ダダダダダタツ！！】

俺はバツと音がする勢いで前を向いた。

…うん、俺は何にも見てない…。砂煙をたてながら走ってる人間なんて見てません…。

でも何故か、俺の首は横に動いてく…。

…くそ、動くんじゃない俺の首…ぐああ…。

俺はぎぎぎと首を動かして正門の方を見ると、そいつはもういなかった。

…なんだったんだ、いったい…。

俺は先生の方を向いて考えていた…。

【ダダダダダタツ！！】

な、なんだなんだ!?

クラスの皆も異様な音にどよめいている。

「さーで、そろそろ自己紹介もして置こうか…。」

一人、マイペースなのが居た。

「…まったく、非常識も甚だしいな……。」

お前も論点がズレてるぞ、和磨…。

【ダダダダダダッ】

【ガララッ】

「遅つつ刻したーッ!」

教室のドアが開き、飛び込んで来たのは、和磨に続くイケメンだった。

なんだ、このクラスにはイケメン比率が高いのか?

俺だけ浮いちまうじゃん…。

俺はぶすつとしながら、窓を向いた。

そのイケメンは俺の前の空席にドカッと座って、俺の方を見た。

「俺、姫宮 直樹って言うんだよ! よろしくな、このイケメン野郎」

それが、俺と和磨、直樹の出会いだった。

## 登場人物紹介

メインヒロイン 4

巫 瑠衣

(かななぎ るい)

16歳、山羊座、A型

誕生日

1月15日

趣味

ピアノ、バイオリン etc…

好きなもの

お母さん、凜矢

嫌いなもの

父親

本作のメインヒロイン。

家は、日本有数の巫グループで、正真正銘のご令嬢。

たくさんの習い事をしている。

父親に巫の者は、すべての事で一番にならなくてはならないと言われ、今まで頑張って一番になり続けた。

しかし、球技大会で凧矢のクラスに負け、泣きながら走るが凧矢の介抱によって泣き止んだ。

どうやら、頑張っても父親に褒められた事がなく、尚且つ瑠衣が活躍する場面を父親は見なかったらしい。

だが、凧矢の『見ていてあげる』という言葉により、凧矢に好意と頑張れば一番でなくてもいいと思えるようになった。

「今回は巫 瑠衣さんです」

「はい    こんにちは」

「凧矢には心を開いてるみたいですね？」

「ええ    あの方は私のとても大切なお方です」

「何か、金持ちと訊くと、『～ですわ。』とかの高飛車なイメージがあるんだが…。」

「ふふふ    あまり、妄想だけでおっしゃっていると、地獄を見ますわよ？」

「……………申し訳ございませんでした…。    お嬢様…。」

「いえいえ、分かればよろしいんです」

ホントに怖かったです…。

今だ、背中が汗ばんでいます…。

次回は一応ラストになるであろうこの企画。  
次回は美波 叶を紹介します ノシ

第25話・バカ 到来 直樹：（後書き）

次回は美波 叶を紹介します

第26話： 家 テストか…（前書き）

なかなか更新が早くならずすみませんm（――）m

今回は一応ラストである美波 叶さんを紹介します  
それでは第26話どうぞ

第26話： 家 テストか…

昔話をし終わると、叶は笑っていた。

「ふふふ それが、『松浜の四騎士』中の三人の出会いなんですね？」

は？

今、訳のわからない単語が出てきたんだが…。

「…四騎士…？」

「あれ？ 先輩は知らないんですか？」

はい、まったくもって知りませんが…。

「先輩に橋本先輩、姫宮先輩に生徒会長を含めた四人を、皆は四騎士と呼んでるんですよ？」

叶に説明してもらったが、どうしても納得がいかなかった…。

和磨と直樹、それにアイツはカッコいいから分かるが……なんで、俺も…？

それに……



「…なんで騎士？」

俺が一番納得いかない事を叶に訊いてみた。

だって、貴公子でも王子でも、美少年でもいいのに、何故に騎士？

「えつとですね、なんだか、そっちの方がカッコいいからって、皆は言っていました…。」

なんなんですか、その適当な理由…。

「先輩のクラスは凄く注目されてるんですよ？ 四騎士中の三人がいるんですから。でも、私は先輩一人で充分です」

うん、叶の笑顔が可愛すぎる

抱きしめてあげよ…

「ジー…。」…やっぱ無理みたい…。

つか、奏さん、ジーは口で言っちゃ駄目なんですよ、知ってましたか？

俺と叶はその後、ケーキを食べたりしながら、楽しい一時を過ごした…。

それから、数日が経った…。

テスト一週間前という事で、ほとんどの皆がテスト勉強に精をだし始めていた。

テスト勉強をしていないのは、諦めた奴か、もともと出来る奴、そして……

「なあ、なんで皆勉強してるんだ？」

コイツみたいに、テストがある事自体、知らない奴ぐらいだ…。

「中間だからに決まってるだろうが…。」

「……中…間…？つて、中間テストの事か？」

何をコイツはバカな事言ってるんだ？

「それ以外に何があるんだ？ 中間テストに決まってるだろ。」

「……んなあああああ！？」

バカは絶叫した。

【ガスッ】

「煩いから静かに死なさい…。」

バカはのたうち回った。

つか、麻美…『し』が『死』になってたぞ……。

「気にしないの。」

うつ、なんか久しぶりに思考を読まれた気がする！

（まあ、半分くらい作者のせいだがな…。あの、バカ作者…。）

「なんか副声音が聞こえたんですが!？」

作者よ…。世界には気にしては生けないものがあるんだ……。

「生けない!? 何それ!? 生けないって事は死ぬって事じゃね!?!? おーい!?!」

さて、そろそろうざくなってきたからシ・カ・ト

「なあ、和磨? 勉強教えてくれね?」

俺は最強の友人に去年から恒例になっている『勉強教えてよ!』

イエース オフコース大作戦!! 大会』の開催を伝える。

「…了解だ……。…いつもどおり俺の家に集合な……。」

「…あの、えっと、私も其処に行つて大丈夫かな?」

さつきまで麻美と話していた夏芽が話しに加わった。

「勿論だ 百合も来るだろ?」

「うん 一人でするより、楽しいから逆にはかどるし」

「よし 後は未来に、叶に、瑠衣か…。去年よりも賑やかになりそうだな」

「そうだな。 後、出来れば俺の妹を連れて行きたいんだがいいか？」

真面目モードに入った直樹が、急に喋り出した。

そっぴや、こいつにも妹がいたっけ…。

確か、未来と同一年か…。

「ああ、そっぴよう…。 まあ、奴は来ないだろうし… 大丈夫だろう…。」

「奴か…。 … 奴ならきつと副会長がどうにかしてくれるさ…。」

奴というのは生徒会長で、まあ、危険人物だ…。 いい奴だし、運動や勉強も出来るんだが、頭のネジが五本近く飛んでるんだ。直樹とは別の危ない奴って事だ…。

「…それじゃあ、放課後に皆で家まで行くか…。」

「だな ハーレム、ハーレム」

どうやら、直樹が元に戻ってしまったようだ…。

いや、おかしくなったのか？…ま、いつか直樹の事だし…。

でも、こいつを連れて行くのは止めたくなってきた。

「俺は未来、叶、瑠衣に連絡いれとくな」

「…俺も美香に連絡しとく……。」

と、其処で先生が教室に入ってきて、その話しは一旦終了した。

時は経って放課後。

「よし、それじゃ行こうぜ」

「だな。     テストはGW空けだし、けっこう勉強出来るんじゃないか？」

テストは来週で、その間にGWを挟んでいる。

「…さて、そろそろ行こう……。…一年生達も連れて行かないとな……。」

和磨の言葉と共に、俺達は和磨の家に向かった。

「……………デ…ケエ……。」

俺は何度となく呟いてきたその言葉をまた呟いてしまった…。

「…お前はその言葉を毎回呟くな……。」

和磨も思っただらしく半端呆れながら、俺に言ってきた。

つか、デカイんだよ敷地が…。

「じゃあ、私は先に用意をしてくるね。」

美香はもう一つの家に向かって行った。

「ねえ、凜矢くん？ これってどういう事なんでしょう？」

瑠衣が不思議そうな顔をしながら俺に訊いてきた。

「ああ、えつとな…。美香と和磨の両親が親友同士で、なんか互いに金出してかなりデカイ敷地を買ったんだと。んで、家は別々に作っただけ。で、こうなると…」

「ホントに大きいですう…。」

俺が話し終わると叶のしみじみとした感想が聞こえた。

「…何を驚いている……。…早く行こう、これだけの人数なんだ…。  
…。…時間が惜しい……。…」

和磨の言葉で、皆はお屋敷もとい和磨家の家に向かって、なかなか広い敷地を歩いて行った。

## 登場人物紹介

ヒロイン

美波 叶

（みなみ かなえ）

15歳、魚座、O型

誕生日

3月20日

趣味

料理、デザート作り、掃除

好きなもの

凜矢、奏、未来、家事全般

嫌いなもの

悪い人、お化け等

本作のヒロインの一人。

けっこうおどおどした性格だが、芯はしっかりとしている。

恋愛はおくてだが、たまに積極的な時がある。

奏とは姉妹で、家事全般は叶がほとんどしている。

凜矢と同じリムレットで、奏の手伝いとしてバイト中。

凜矢の妹である未来とは、中学からの親友で、かなり仲が良い。

ネタバレだがどうやら、直樹の妹を含めた三人でいつもいるらしい。

「うん、こんなもんだろ」

「は、はい。そ、そうですね…。」

「ん？　なんか不満が？」

「い、いえ…。　なんだか私だけネタバレ要素が…。」

「ああ、ま、いいんじゃないね？」

「そんな…。」

という訳で、こんなもんで登場人物は一応終わりにします。  
誰々のが知りたいなどの要望があったら教えてください。



第26話： 家 テストか…（後書き）

頑張ります

知りたいキャラがいましたら、教えてください。

後、生徒会長はもしかしたら出てこないかもしれません。  
一応出したいとは思ってます

第27話：勉強会 想い…（前書き）

作者がテスト期間でなかなか執筆できませんでした。ホントにすみませんm（――）m

これからも、いい加減な作者ですがどうぞよろしくお願いします

それでは第27話どうぞ

第27話：勉強会 想い…

IN 和磨の部屋

「わいわい、がやがや、わいわい、がやがや」

「兄さん、そういうのは口で言うものではありません。」

直樹のボケにツツコミを入れる和磨の妹である魅奈<sup>みな</sup>ちゃん。魅奈ちゃんはどうかやら未来や、叶と同じクラスで委員長らしい。

世間は狭いなく、いやホント…。

魅奈ちゃんは背が小さくまるで小学生のようだが、かなり大人な性格だ。

「兄さん、ちゃんと勉強しましょうね？」

「はい、わかりました…。」

直樹を従わせるなんて、なんて凄い娘なんだ…。

勉強を始めてから二十分ぐらい経った頃、

「ゴメンゴメン…。用意に時間かかっちゃって…。」

美香が入ってきた。なんか鞆を持って…。

「なんだ？ その鞆は？」

俺は不思議に思い訊いてみた。

「ああ、泊まるんだよね……？ ……おばさん達は……？」

はい？ スルー？

「うん、いつもの事だけど、よろしく……／＼／」

美香が困ったような笑みを見せながら、和磨と話している。

だから、スルー？

「なあ、さつきからなんの話をしてんだ？」

どうやら、直樹もそれを思っていたらしく訊いてくれた。

たまには使える奴だ……。

「……ああ、毎度の連休は美香の家族がこの家に来て、一緒に過ごしてるんだ……。……まあ、互いの両親の仲が良いからな……。……。」

淡々と呆れたように話したす和磨の言葉を聞き、直樹が吠えた。

「なああにいいいいッ！？ ……なんて羨ましいッ！……。」

今日は何故かこいつと気が合うようだ……。実際に俺も羨ましいと思っただ……。……。

「いいですね　とても楽しそう」

瑠衣が羨ましそうに訊いてくる。

「…いや、そうでもない……。…実際は互いの両親がドンチャン騒ぎをして、かなり大変だ……。」

和磨は心底呆れたというふうに肩をすぼめた。

和磨も親には苦労してるのか……。俺だけじゃないんだな……。よかった……。

俺は和磨の苦労がわかり思わず涙ぐんだ……。

「凜兄い、ここってどうやるの?」

未来がわからない部分を俺に訊いてきた。

こんなにお兄ちゃんを頼ってくれるなんて、なんて嬉しいんだ……。

俺は未来に優しく、優しく教えてあげる事にした。

M i k a i m a i

私は今、家の中で明日からのGWに向けて準備していた。

私の両親は変わってる……。だって、仲がいいからって、互いにお金を出しあって一つの大きな土地を買ったんだから……。

それに、毎回の連休はどちらかの家に泊まるんだから変わってる  
としか言いようがない。

でも、私にとっては少し嬉しいイベントでもある。何故かと言え  
ば、それは和磨と一つ屋根の下で過ごす事が出来るって訳で…。実  
際、いつも少しだけ緊張している…。

「今回も楽しくなるといいな」

そう、楽しくなるといい…。

私はその言葉を呟くと少し憂鬱な気分になった…。

何時になったら私は一步を踏み出せるんだろう…。いつも頑張ろ  
うとは思ってるんだけど…まだこのままがいいって心が言い出す。

何時からだったつけ、和磨の事が好きになったの…。

気付いた時にはもう好きだった。でも、和磨は凄くモテて、いっ  
つも女の子が近づいて来た。

私は幼馴染みっていう特権があるから、隣にいるけど、もし無か  
ったら…。

まただ、いつもこうやって悪い方に考える…。

和磨は私の事をどう思ってるんだろう…。

嫌いではないと思う。 うん、それだけは間違いないけど……不

安だ……。

いつも隣にいるから、もしかしたら只の幼馴染みって思ってるかもしれない…。

駄目だな、私…。

試合では何時も強気なのに、和磨の事になるとすぐ弱気になる。

「はあ、変わるかな……。ううん、変えないと駄目ッ！ このGWで、一步を踏み出さないとッ！」

私は一度頬をパンと叩いて、時計を見た。どうやら、20分ぐらい考えていたらしい。

「早く行こッ」

私は決意と共に、皆がいる、和磨の家へと向かった。

第27話：勉強会

想い…（後書き）

これからも頑張ります!!



**第28話：お兄ちゃん ト라우マ…（前書き）**

執筆完了！

これから少し、美香と和磨の恋愛を描いていくつもりです。  
それでは第28話どうぞ

第28話：お兄ちゃん トラウマ…

見馴れた街並みを二人で歩く…。

夕焼けに染まる紅い街…

周りから聴こえる喧騒…

全ては馴染みある者達…。

俺の隣を歩く女の子。

俺はこの子を此処以外で見た事がない…。

でも、馴染みある者の一部として、此処にちゃんと存在している  
…。

俺はこの子を知ってる…。

夢でしか会わない女の子…

昔から、一緒に成長し続ける子…。

初めて見た時は中学3年の時だった…

初めは俺も女の子も小さかった。でも、次第に俺も女の子も大きくなり、今の状態まできた…。

この頃、女の子の声が聴こえるようになってきた…。それに、まるで実際に接してるような感覚を感じる…。

でも、やっぱり女の子の顔を思い出せない…。

思い出せない…？

一度も見た事無いのに…？

何処かで見掛けたのか…？

駄目だ、わからない…。

女の子は嬉しそうに微笑みながら、俺の腕に乗っかるようにして歩いている。

表情は見えるのに顔は見れない、不思議な感覚…。

「お兄ちゃん…」

女の子が可愛い笑顔で喋る。

俺をお兄ちゃんて呼ぶ人なんて今まで知らない…。でも、なんだか心地いい、優しい感じがする…。

「ん？」

俺も自然と笑顔になる。

「お兄ちゃん……きて……。」

「え？」

なんだ？ 視界が歪んでいく。

世界が終わり始める…。

いや、夢が終わり始める…。

「お兄ちゃん…起きて……。」

「お兄ちゃん…大好きだよ　また今度ね」

最後に聞いた声は二つだった。

起きてって事は外界か…未来かな？　という事はまた今度があの子か…。　お兄ちゃんねえ……。

俺はなにか引つかかるものを感じながら、現実に戻ってきたのだ  
った…。

「お兄ちゃん…起きて…」

俺が夢から覚め、初めて見たもの、それは……

「お・に・い・ちゃ・ん」

俺の上に乗る、俺をお兄ちゃんと呼ぶ、直樹だった…。

「しねしねえーい!!」

「おはよー、凜兄い」

「おはようございます、凜矢さん」

俺の傷付いた精神を癒してくれる天使が二人…

「おはよ、未来、魅奈ちゃん」

俺は可愛い天使達に挨拶をした。

「あれ？ 兄さんどうしたの？ 顔が痣<sup>あざ</sup>だらけだけど…」

「…うう……ごめんなさい……。」

直樹は魅奈ちゃんの問いかけには答えずにさっきまで何度も言っ

てきた言葉を繰り返した。

「あゝ、兄さんがまたバカな事をやったんですね？」

どうやら、魅奈ちゃんもわかってくれたらしい…。

「そういう事 …二度とやるなよ……？」

「ひっ！…は、ふぁいっ！」

青ざめた顔をしながら、直樹は返事をした。

わかったならそれでいいんだが…

「なんで、直樹と魅奈ちゃんが居るんだ？」

俺は起きた時（半分トラウマ）からの疑問を訊いてみた。

「え？ 忘れちゃったの？ 直樹さんとみなちゃんが家で勉強した  
いって言ったからでしょ？」

未来が驚いたように言ってきた。

「あゝ、そーいやそーうだったな。 確か、魅奈ちゃんが勉強を教え  
て欲しいって言って、直樹が『魅奈が心配だッ！』って叫び出し  
たんだっとな。 そんで、仕方なく直樹をと…。」

「兄さんがご迷惑をかけて、ホントにすみません。」

俺が言い終わると魅奈ちゃんがバツと頭を下げながら謝ってきた。

「気にしなくていいよ　シスコンの気持ちはよくわかってるつもりだから。」

「シ、シスコンですか…／＼／／」

なんだか、魅奈ちゃんが恥ずかしがってしまった。

「ま、なんで朝からなのかは聞かない事にして、ゆっくりとやりますか…。」

俺はそう言ってから、頂きますと未来が作った朝食を四人で食べた…。

M i k a   I m a i

朝、私は起きてから、和磨のお母さんと自分のお母さん、そして私で、朝ご飯を作った。

「じゃあ美香ちゃん、和磨を起こしてきてくれる？」

朝食を一通り作り終わると、おばさんが私に頼んできた。

「あ、うん、了解です」

私は内心凄く喜びつつ和磨の部屋に向かった。

和磨の部屋へ行くと深呼吸を一つした。

よしッ！

部屋の中に入ると、和磨の匂いが凄くした。

私はこの匂いが凄く好きだ。香水なのか、甘いようでいて、スツとした透き通る匂い…。

「ふふ　可愛い顔で寝てる」

和磨はスースーと寝息をたてながら、眠っていた。

寝返りとかって打たないのかな？　寝癖の一つも無いよ…。

私は少し、自分に絶望しつつ、和磨を起こす事にした…。

「かゝずま　あつさだよ」

私は和磨の耳元に口を近づけて、そつと囁いた。

「ん、んんんん？」

和磨は起き上がったけど、まだ寝惚けいるらしく、可愛い声を出している。



「ふふふ　朝だよ、和磨」

もう一度、優しく和磨に言う。

「美…香？　おはよう。　ふみゆ…。」

和磨は朝に弱い、寝起きはいいんだけど、起きてから、思考が働くまでに時間が掛かる。

そのせいだろうか、言葉に感情があまり籠らない声ではなく、まるで小さい子みたいな声をだす。

他の女の子が知らない事、私しか知らない事…。

私は嬉しくなり、自分でもわかるほどに微笑みながら喋るのだ…。  
た…。

昨日の意気込みと共に……

第28話：お兄ちゃん ト라우マ…（後書き）

感想や疑問等があったら教えてください。

感想は作者の自信になり、疑問はもっと作品を楽しく読んで戴けます。

第29話：喋り方 美香：（前書き）

作者、けっこう和磨のキャラ気に入ってます。

第29話：喋り方 美香：

和磨が完全に起きたのは、それから2分ぐらい後の事だった。

「…分からない所とかは有るのか……？」

そして、今はテスト勉強中だ。

「分からない所か………此处とかかな……？」

私は苦手な数学の分からない部分を指しながら言った。

「…ん……？…其処はけっこう難しいからな………」

そう言いながら、和磨は私の隣まで膝立ちで近づいて来た。

ドキッ

和磨が隣に来て教えてくれる。

「…此处はだな……。…sinを使って………」

和磨が丁寧に教えてくれるけど、私は聞いている余裕が無い。

直ぐ隣…

肩が触れ合う程に近い距離…。

私はドキドキと騒いでいる胸をギュツと抑えた…。

聞こえて…ないよ…ね…。

「…どうした…？…やっぱり分かりにくいか…？」

和磨が心配そうに私を覗き込みながら訊いてきた。

「…顔が紅いぞ…？…大丈夫か…？」

「…う、うん…。大丈夫…だよ…。」

なんとか、声を絞り出した。

どうしたんだろ、和磨…。今までなら向かい側から教えてくるのに…。そのせいで上手く話せないじゃん…。

「…少し休憩するか…。…お茶もってくるな…。」

そう言って和磨は部屋を出て行った。

「はぁ〜〜。緊張した〜。…でもけっこう嬉しかったな  
うん。」

部屋には私のそんな声が響いた。

K a z u m a   H a s h i m o t o

ドクンドクン…

まだ言ってる…。

自分から近づいたのは言いけど、まさかこんなに緊張するなんて…。

「耐えられる筈が無い。――!？」

俺は自分の声に驚いた。

今まで出した事ないような感情の籠った声。

俺にも出せるのか…こんな声が…。

「ふふ……。…どうやら凜矢の言ってた通りみたいだな……。…でも、美香の事じゃないと無理みたいだ……。…」

俺は昨日、凜矢にテスト勉強を教えていたら、凜矢が訊いてきた。

「なあ、お前ってなんでそんなにクールな声してんの？ 昔から多少気になってたんだよ、なんて言うかその…無感情？ な声っていうか…。」

「…俺にもわからないな…。…どうしたら直せると思う…。…？…実際に、無感情で話しているのは本当なんだが…。…」

俺がそう言つと凜矢は少し悩んでから、おもむろに顔を近づけて訊いてきた。

「なあ和磨、お前って好きな人いるか？」

なんでなのか、その時俺は咄嗟に美香の方を見ていた。

「へえ、やっぱ幼馴染みは恋愛対象になるんだな。俺自身はまだわかんないけど…。明日から二人で勉強するんだろ？」

凜矢は何かを思い付いたらしく、手をポンと叩いてから訊いてきた。

「…ああ、そうだが…。…」

「お前はホントに美香が好きか？」

俺が答えると凜矢は改めて訊いてきた。

「…たぶん…。…いつも気にしてはいるからあまり実感が湧かないけどな…。…」

これはホントだ…。いつも美香の事は気にしてた…。

中学の時、女子生徒に告白された時も俺はただ、美香と一緒に居たいから断った。

友情よりも互いを想っているのに、恋人じゃない。

友達以上恋人未満…。

今の関係がそれだと思う。

「おい、和磨聞いてるかー？」

「……！？ ……あ、ああ……。」

どうやら、いろいろと考えこんでいたらしい。

「だからな、勉強を教えたりする時とかゴールデンウィークで、出来る限り近づくんだよ…。」

「…は……？」

俺は凜矢の言っている事がよくわからず聞き返してしまった。

「だからな、お前が美香の事好きかどうか曖昧なら試してみな？俺はした事がないんだが沢口が言ってたから。」

沢口とは同じクラスの金髪のたらし男だ。

「…そうか、それでどうだったら好きって事なんだ……？」

俺がそう訊くと凜矢の十八番とも言える見てるだけで安堵するよ



うな優しい微笑みをしながら言ってきた。

「直ぐにわかるさ、きつと…。その時、ちゃんと感情の籠った声が出るはずさ…。それに、俺は今の和磨の喋り方も嫌いじゃないしな」

凜矢はそう言うとテスト勉強に戻った。

俺はあまり感情を表さないけど、この時俺は、美香以外に初めて心から微笑んだ。でも、気付かれたくないから、俺は顔を逸らして微笑んでいた。

凜矢が俺を盗み見ながら優しい笑みを浮かべてる事を知らずに…。

第29話：喋り方 美香：（後書き）

今回は和磨中心に書いてみました。  
次も頑張ります

第30話：電話 頑張ろう…（前書き）

さて、主人公がなかなか出せなかったんで、次回は少し出してみます。

主人公視点で…。

第30話：電話 頑張ろう…

俺がお茶を持って部屋に戻ったが、ドアの前で止まってしまった。

「大丈夫……。ちゃんと直ってる……。」

俺はそう呟くとドアを開けて中に入った。

さすがに感情の籠った声を出してたら、美香が不思議に思っしな……。この関係をまだ壊したくないし……。

部屋に入ると美香が頭を捻ってうん、うんと考え込んでいた。

- M i k a I m a i -

和磨が部屋を出てからすぐ、私はテーブルに突っ伏した。

「はあ、ゴールデンウィークって言っても明後日で終わりだし……。このままじゃ駄目だな……。」

私はテーブルに突っ伏しながらそんな事を呟いた。

「でも、なんで急に隣で教えてきたりなんてしたんだろ……。そのせいでまだドキドキ言ってる……。」

私はそう言いながら左胸に手を当てると、ドキドキと胸が鳴

り続けているのを感じた。

私は未だにドキドキと言っている心臓を落ち着かせるため、ある人に電話を試してみた。

『もしもし?』

「麻美? 私だけど…」

『ああ、美香? どうしたの?』

私の親友であるある人、もとい麻美に私は電話をした。

「それがさ、今勉強してるんだけど…」

私が其処まで言うと言麻美は勘づいたらしく、訊いてきた。

『和磨となんかあったの?』

さすがは親友だけはあるね、麻美さん…。

私は小さく咳払いをしてからさっきまでの事を話した。

『ふーん、それで何でなのか? って事ね…。』

私が全部話すと麻美は私が訊きたい事がわかったらしく少し悩んでいるようだった。

「そういう事…。麻美はどう思う？」

私は少し不安になる気持ちを抑えながら麻美に相談した。

『私もあんまりそういうのはわかんないんだけど…。たぶん、和磨も少なからず意識してるって事じゃないかな？』

「そう、なのかな？」

私は麻美の言葉に顔が緩みそうになるのを必死に誤魔化しながら、出来るだけ平静を装って呟いた。

『うん　頑張ってね、美香』

「ありがと、麻美　ちょっと不安だったけど、なんか落ち着いちゃった」

私がそう言うと、階段を上がってくる音が聞こえた。

「ゴメン、和磨が来たみたい…。ありがとね、麻美　勉強頑張っ  
て」

『うん、美香もね　それじゃ』

麻美の言葉を聞いた私は、そのまま電話を切った。

ガチャ

私が電話を仕舞って、急いで勉強を始めたと同時に和磨が部屋に入ってきた。

「うーん、うーん…」

私はワザらしいと自分で思いながらも、考える真似をしていた。

「…勉強頑張ってるみたいだな……。…休憩しててよかったのに…。」

しまった！　そういえば休憩にしてたんだ…。なら、わざわざうんうん言って考えた振りする必要ないじゃん！

「あははは……。…休憩しよつか…。」

私はそのまま和磨が持ってきてくれたお茶を一口のんだ。

- Asami Homura -

美香との電話が終わった私は、ふうと息を吐いた。

「なんとか、誤魔化せたかな。」

私は、なんで和磨が美香の隣にくっつくようにして勉強を教えたのか知ってる…。

まったく、凜矢の奴…。

勉強会の日の夜に凜矢から電話がかかってきた。

「もしもし？ 凜矢？ どうしたの？」

私は凜矢からかかってきたとわかると、直ぐに電話に出た。

『うん、それがさ…。 美香って誰か好きな人いるのかな？』

「……………え…？」

私は、凜矢の言葉に一瞬固まってしまった。

え？ どういう事？

「ねえ、どういう、事？」

私は自分を落ち着かせるために、出来るかぎりゆっくりと凜矢に訊いた。

『いや、えっと……………その…。』

凜矢が口ゴモってしまったせいで、余計に不安になってしまった私は、怒鳴るように凜矢に訊いてしまった。

「どういう事なのかって訊いてるのッ！」



『う、ごめん！ 内緒にして欲しいんだけど…特に和磨と美香には…。』

私の声にビックリしたのか、凜矢は咄嗟に謝ってから話し始めた。

「こつちこそ、急に怒鳴ってごめん…。わかったけど、一体どう  
しいう事？」

私が、もう一度訊くと、凜矢は恐る恐ると言った感じで話し始めた。

『それがさ、今日和磨の好きな人は誰かって聞いたんだよ…。  
したら、和磨無言で美香の方を見たんだよね…。それで美香？  
って訊いてみたら、わかんないけどたぶん、みたいな事を言っ  
た…。』

凜矢の情報は私としても知りたかった情報なので先を促してみる。

「それで？」

『うん、それで、なんか好きなのかはつきりしないみたいだったか  
ら「これより先は長いため、作者がカットしました。」。』

凜矢の話を聞いた私は、凜矢に美香の好きな人を教えてあげる事  
にした。

「美香の好きな人は和磨だよ…。でも、和磨には内緒でお願い…。  
後、もしかしたらゴールデンウィークの期間中になんとかなるか  
もしれないから、あまり手を出しちゃ駄目だよ？」

私がそう言うと、凜矢は少し拗ねたような声で言った。

『それぐらい俺だってわかってるよ。 両想いなら、たぶんなんにもしなくても良い方に傾くと思うし…。』

凜矢は、ホントに優しいと思う…。

自分に出来る事があつたらそれを探して、でも必要がなさそうなら、実行はしない…。

私はその後も凜矢と長話をしていた。

私も、美香を見習ってもっと頑張ろう

第30話： 電話 頑張ろっ…（後書き）

瑠衣とか百合、夏芽がちよい役になりつつあるんでどうにかしたいですね…。

第31話： 驚愕 親父…（前書き）

親父さん登場です…。

あっち系な話にはならないので、あしからず。  
それでは第31話どうぞ

第31話：驚愕 親父：

- R i n y a   Y a z i m a -

夜：

俺は今、未来の作った夕飯を食べている最中だ。

ガツガツガツガツ

まあ、なんだ……。さっきも言った通りゴールデンウィークの一日  
目の後半なんだが：

ガツガツガツガツ

ふうー、すうーっ！

ガツガツガツガツ

「もっと静かに食いやがれッ！！」

俺は隣にいる直樹を殴った。

「ぶふうばばええば！」

ピュピュピュッ

「飛ばすなッ！ 口の物なくなっしてから喋れッ！」

このバカ直樹め…

「モグモグモグ……ゴクツ……ゴキユゴキユゴキユ……ぷはぁ」  
……食った食った、世は満足じゃ……。」

どうやら食い終わってくれたらしい……。つか、世は満足じゃって何処の人間だお前は……。

「なあ、なんで未だに此処にいのの？」

これを言ったのは直樹だ……。

「なんだ、お前……そんなに殴りたいみたいだな……。(ニコツ」

「すみませんでした……。調子に乗ってしまいました……。」

俺が少しニツコリしただけなのに、どうやら効果は抜群だったみたいだ。

「さて、飯も喰わせて貰ったし……。そろそろ帰るぞ、魅奈？」

「あ、うん　そうだね、兄さん」

直樹が魅奈ちゃんを呼ぶと、さっきまで未来と話していた魅奈ちゃんも返事をした。

なんか、機嫌がいいみたいだな……。

「そんじゃ、俺達に行くから……不純異性交遊は駄目だよ、って  
うわっ、ゴメっ、謝るからっ、殴らないでっ!!」

数分後

「ほんとにすみませんでした。」

俺は直樹の肅正に成功した。

「じゃ、勉強頑張れよ……。わかんないところがあったら教えてやる  
から……。」

「ああ、サンキュー……。んじゃ、バイビン」

俺が言うと、直樹がまともな事を言った。  
バイビンまではけど……。

「それでは、さようなら凜矢さん、未来ちゃん」

「うん、じゃあね、みなちゃん」

「あれ？ 未来ちゃん俺にバイバイは!？」

なんか、自分が挨拶されなかったのが不服なのか、直樹が未来に  
詰め寄った。

「バイバイ………魅奈ちゃん」

「うわあああああん!!」

直樹は泣きながら走って行ってしまった。

ざまあｗｗｗｗ未来に近づいた罰だ

次の日…

「ふあああゝあ…。起きるか……。」

俺は目が覚めたので下に行く事にした。

「……………」

「おはよー、凜兄い　朝ご飯出来てるよー」

「おはよう、凜矢　後、ただいま」

「よう、凜矢。　久しぶりだな、元気だったか？」

俺は呆けて固まってしまった。

「おい、米粒付いてるぞ…。」

「キャッ…／／／　もう、あなたったら…／／／／」



「な、なんで親父達が帰ってきてんだ？ 帰ってくるのは来月じゃなかったかよ？」

そう、俺の目の前でイチャイチャしていやがるこの二人は俺の親父と母さんだ。

「凜矢の父で夜島 月矢と申します…。どうぞよろしく…」

「お父さん、誰と話してるの？」

「ん？ 読s「うるせえ！！」…すまん…」

ゴホッゴホッ。では気を取り直して…。

さっきクソ親父が勝手に言っちゃったが、親父は夜島 月矢、母さんは夜島 亜弥と言っただ…。まあ、見たらわかるが、完璧なバカップルです。

「思ったより仕事の進みが早くてな」 だから、帰ってきた」

どうやら、仕事はしっかりとやってるみたいだな…。

「なあ、仕事って何やってるんだ？ 未だに知らないんだが…」

俺がそう言つと親父は…

「超常現象についての調査etcだ…」

調査etcって、かなりアバウトじゃね？

「そうね、調査と対処が主な仕事ね…。」

え？ 何？

二つしかないのにetc？ 何、親父照れ笑いしてんの？ 何母さんコイツゝみたいな事してんの？ なんかもう、付いて行けないよ？ 僕…。

「いつ帰ってきたんだよ…。」

マジで音とかなかったから気付かなかったよ…。

仕事の話？ なんかもうどうでもいいや

「それより、風呂入るぞ、凜矢…。」

俺の質問はスルーなんですね…。

「まだ朝だぞ…。 しかも、なんで俺まで…。」

俺は嫌そうな顔をしながらそう言った。

「汗かいたんだよ…。 昨日の夜は久しぶりに激しかったからな」

「／／／も、もうゝ、あなただったら思い出しちゃうじゃない…  
／／／」

親父の言葉に母さんが顔を赤らめながらそう言った。

「未来の前でなんの話してやがる!!」

俺は親父の頭を殴った、そりゃもう強く。

「何って、昨日の夜な…タクシー捕まらなかったから走って帰ってきたんだよ…。そりゃもう激しい運動だった…。」

このクソ親父はこんな事をのたまいやがった…。

「ま、紛らわしい言い方すんじゃないやねえよ!!」

「紛らわしい? 凜矢君は何を思い浮かべたのかにや?」

くっ、このクソ親父は!!

「テメエ、マジで殺す!!」

「それより、早く風呂に行くぞ…。」

ま、またスルーなのですね、もう泣きたいです…。

俺はそのまま親父に引きずられながら風呂場に向かった。

風呂に入っていると親父が話した。

「俺達が居ない間、未来を守ってくれてありがとな…。」

「気にしなくていいよ…。今回は何時まで入れるんだ？」

俺は親父の言葉に返事をしてから親父に訊いた。

「わかんねえ…。出来る限り居たいとは思ってるんだが、場合によると人の命に関わる仕事だからな…。」

俺はその言葉を聞きながら、身体を洗っている親父の背中を見ていた。

親父はかなりかつこいい。俺が見てもわかる程にだ…。そして、親父の背中では昔から好きだった。

「また背中の中の傷見てんのか？」

「！…なんで、わかつたんだ？」

俺は驚いた。親父は俺に背中を見せて座っているのに……後ろに目でもあるのか？

「一緒に風呂に入ると何時も見てるからな…。何年親やってると思ってた…。」

さすがは親って事か…。

「この傷は大切な思い出なんだ…。」

親父は急に語り始めた。でも、茶々を入れるのは気が引けた俺は黙っている事にした。

「昔、大切な人を身体を張って守ったんだ…。誇れる傷…。俺の人に誇れる事はこれぐらいだ…。俺は大切な人を守りきったんだってな…。」

はつきり言うと、親父の身体には傷がたくさんある。小さい物から大きい物まで……。でも、その中で一際目立つのが、背中の中にある傷だ…。

「この世界は未だに人が信じられないような事が常に起こっている…。妖怪…。魔物…。幽霊…。幻獣…。神…。人に知られていないたくさんの者達がいる…。俺はそいつらと戦ってる…。昔からな…。」

俺は親父が何を言っているのか信じられなかった…。

第31話：驚愕 親父…（後書き）

これはあくまでも恋愛小説です…。

第32話：告白 想い…（前書き）

和磨の恋、後少しでラストです。

### 第32話：告白 想い…

「…どういう…事だよ……親父…」

俺は驚きを隠せずに親父に聞いたです。

「この話はここで終了だ 未来と母さんには内緒だぞ。 のぼせない内に上がれよ？」

そう言っ て親父は風呂場から出て行った。

「お、おい！ 親父！」

俺が呼んでも親父はのぼせるなよ？と言っただけだった。

俺は湯に口まで浸かりながら、さっきの話を考えていた。

…嘘か……誠か…

いや、俺にはわかってる。『俺はそいつらと戦ってる。』と言っ た親父の背中、それを見たら嘘じゃないって事ぐらい、わかる。

でも、何故なのか、いつか訊いてみたいと思える程に、俺は興味がわいた。

いつか、話してくれよ、ちゃんと……

…親父……。



- Kazuma Hashimoto -

ゴールデンウィーク1日目の夜、美香は俺の部屋に来てマンガを読んでいた。

「…そろそろ、寝たいんだが……。」

俺は朝とか昼間の事により、多少疲れたのか、今日は何時もより早く眠くなった。

「え？ ああ、ゴメン。……………」

美香はマンガを片付けると、黙りこんでしまった。

それでも、早く寝たいと思った俺は布団に入り、目を瞑りながら訊いた。

「…どうした……？」

俺がそう言うと、美香がこっちを振り向いてわざとらしく咳払いをしてから話し始めた。

「ゴホン……え〜っと……そういえば、昔さ、よく一緒に布団で寝てたりしてたよね〜。懐かしいね〜。」

なんとも、ぎこちなく、そしてわざとらしく語りだした美香はそ

んな事を言いだした。

わざとらしいにも程があるな……。こら、目が泳いでるぞ、美香。

「…そうだな……。」

俺は淡白にそう答えて再び目を閉じた。

何分経ったのか、俺の意識は夢の中に旅立ち始めた頃、俺は布団が浮く感覚で再び現実に戻ってきた。

もそもぞ

誰かが入ってくる感じがして、薄目を開けると、目の前には美香の姿があった。

「!?!?…な、なにしてるんだ……!」

俺がそう言うと、美香は目を開けて微笑んだ。

ドキンッ

俺はその微笑みを見た瞬間に再確認した。

俺は、美香が好きだ…。

「…ねえ、一緒に寝ていいかな…?」

美香は伺うように俺を見上げながら訊いてきた。

上目遣いは反則的だぞ、美香…。しかも、密着度もかなりだから理性がヤバいと思った俺は、目を逸らしながら言った。

「…ああ、いいよ……。…それに……。いや、なんでもない……。」

俺は美香の目をジッと見つめてみたが、やはり告白する程の勇氣はまだ出なかった。

さっき、サラツと言えればよかったのに……。いや、そんな言い方じゃ相手に伝わらない……。伝えるなら、ちゃんと目を見て言わなくちゃな…。

俺がそんな事を考えていると、美香が口を開いた。

「ありがと。でも、やっぱり恥ずかしいね、これは／＼／＼」

その時、俺は美香がとても可愛くて、理性も限界で、美香を抱きしめた。

「えっ、ちょ、どうしたの、和磨？／＼／＼」

美香は驚きと恥ずかしさから顔を真っ赤にしていた。それが俺には余計に可愛く感じて、言葉を止める事ができなかった。

少し前まであった、関係が壊れるかもしれない怖さなんて、すっかりなくなっていた。

いや、壊れる筈ないと思ったから口からこの言葉が出た。

感情の籠った声と共に…。

「美香、愛してる。」

- M i k a I m a i -

「美香、愛してる。」

和磨の口から紡がれた言葉。

その一言は私を驚愕させるには充分すぎる言葉だった。

初めて聞いた、感情の籠った和磨の声。それは、とても優しく、暖かい言葉だった。

「少し、考えさせて…。」

でも、私にはまだ今の関係を変える程の勇気が無かった。

このゴールデンウィーク中に告白するとは決めていた。

でも、和磨が同じ気持ちだったなんて…。

「な…んで…?」

心の中では、和磨に告白して欲しいなんでも思った。今も凄く嬉しい幸せ。でも…

「私、今の関係を壊す勇気が、今無いの…。ゴメンね、明日まで待ってね…。ちゃんと自分の中で答え出すから…」

私は、和磨が告白してきてくれるなんて思ってもみなかった。望んではいたけど、只の妄想でしかなかったから。

「…わかった……。…明日、返事を聞かせてくれ……。」

和磨はそう言って静かに目を閉じた。

「…ゴメンね、和磨。私も、和磨の事愛してるから…。昔から、ずっと…。」

そう小さく呟いた私は、和磨に寄り添うようにして、そのまま目を閉じた。

- Kazuma Hashimoto -

俺が目覚めると、隣では俺にくっつくようにして寝ている美香がいた。

昨日の事が嘘じゃないと俺に告げる。

「ふぁ、おはよう、和磨。」

どうやら、美香が起きたようだ。寝起きも淒く可愛い。抱きしめたい衝動に駆られたが、ぐっと堪えた。

ガチャ

「もう朝よって、あれれ……お邪魔しちゃったみたいね……ごゆっくり……」

母さんが入ってきた。なんて間が悪いんだ…。

「ふえ？ お、おばさん！？ こ、これはその、えっと、っておばさん！？」

テンパっている美香を置いて、母さんは部屋を出て行った。

今日、俺達の関係が変わる……

善くも…

悪くも…。

第32話：告白 想い…（後書き）

あまり、困難とかは書かないつもりです。  
あくまでもラブコメなんで。

第33話： 変化 日常…（前書き）

すみませんm（――）m  
諸事情で更新が遅れてしまいました。

総ユニーク数2万ヒットありがとうございます…！

和磨「…ありがとう……。」「

これからも頑張ります



第33話： 変化 日常…

- M i k a I m a i -

今日はちゃんと伝えるんだ…。

自分の気持ちを和磨に…。

「どうしたんだ？ 二人共、黙って黙々と食べて…。」

私達の様子に気付いたお父さんが私達に話掛けてきた。

「い、いや、な、なんにもな、ないよ？ お父さん…。」

ちょっとしどろもどろになっちゃったけど…

「そうかそうか、ならいいや ハッハッハ！」

うん、大丈夫でした

和磨を見ると、黙々と朝ごはんを食べていた。

うーん、気まずいだけ…だよね…。

その後は皆で談笑しつつ朝食を食べた。

「ねえ、和磨。これから勉強教えてくれない？」

「…ゴメン……。…今日は自分でやってくれ……。」

そう言つと和磨は、二階にスタスタと上がって行ってしまった。

「どうかしたの？ 朝はあんなに仲睦まじかったのに…。」

私が立ち止まっていると、おばさんが声を掛けてきてくれた。

「いえ、なんでもありません…。」

「…そう……。でも、今日の和磨は様子が変だから、何かあったら相談しなさい あれでけっこう思い込みが激しいから…。」

そう言つとおばさんはニッコリと微笑んで言ってくれた。

「頑張つて」

「え……。……はい！ 頑張ります」

正直、おばさんは知ってるのかもと思つたけど、おばさんのその目は子供を心配するお母さんのもので、私は心の不安が休まるのを感じた。

俺は今、テスト勉強をしながら悔やんでいた。

あの時、勢いに任せて言ってしまった言葉…。

『少し考えさせて…。』

俺は一番大切な美香の気持ちを考えてなかった。

だから、拒絶されたのかもしれない。

「…俺はどうすればいい……。…どうしたい……。…答えは結局、今日…か……。」

俺は途方にくれた考えを頭を振って振り払った。

後悔してもしようがない…か。

「…はあ…。」

俺は溜め息をはくと、目の前の問題集に集中した。

- R i n y a   Y a z i m a -

俺は今勉強中なんだ…。

因みにバイトはテスト終了まで無し

でも勉強つてのは辛いな…。

嫌いと言つよりめんどくさいって事が…。

「凜兄い、此処つてどうやるのかな？」

そんな事を考えていると未来が話し掛けてきた。

「ああ、見てやるよ」「俺が見てやるぞ、未来！」「…」

俺が返事をしてやろうとしたら親父が向かい側からバツと教科書を奪い取りながら叫んだ。

「おい、大丈夫なのか？ 高校で習った問題なんて憶えてないだろ？」

俺がそう言つと親父は教科書を見ながら言つた。

「ああ？ 俺はお前と同じ歳の時に学年で１７位だったんだ…。  
出来るつての…。」

……はあ？

今さらつとすげえ事言つてなかったか？

学年で１７位？

俺でも最高で３６位だったのか？

なんか、すっげー負けた気分になるな。

今回からマジで頑張るか…。

「…ほう、そういう事が…。未来、此处はだな……………」

親父、ホントに教えてるし…。

それから数時間が過ぎて昼になった。

「凜矢、お前好きな人いるか？」

「ぶふっううッ！」

「汚いぞ、凜矢。」

俺は親父の突拍子の無い言葉に思わず吹き出してしまった。

「な、何言ってたんだ、急に!？」

「なんだ、いるのか？」

「え!？ そうなの、凜兄い!？」

「え？ そうなの、凜矢？」

親父の言葉に未来と母さんが食いついてしまった。

「いや、違うからな、未来！？ 親父も変な事口走るな！ それに母さんもノリで口を挟まない！」

俺がそう怒ると親父が…

「えゝ、嘘つけゝいるくせにゝ。」

「私は全然気にしてない…よ？」

「うゑゝん、凜矢が虐めるよゝ、月矢ゝ。」

「おゝ、よしよし。 テメ、凜矢！ 人の奥さんを泣かせてんじやねえ！」

バコッ

音がした。

勿論俺が親父を全力で殴った音だ…。

まったく、親父は頭いいくせにバカだからな…。（さっきまで、頭もバカと思ってた）

俺はふと隣を見た。

右隣には未来、そして左隣には誰もいない、筈なんだ…。

でも、左隣には椅子がある。プーさんの描かれたクッションの付いた椅子。

昔からあつた気がする。

父さんの席は斜め前…俺と誰もいない席の間に位置する。

なんなんだこの感覚、もどかしい、気持ち悪くなる…。

何かを忘れてる気がする。

さっきまで楽しく話していたのに、今では嘘のように気分が悪くて、寒気がする。

「…凜矢、大丈夫か？」

「凜矢、どうかしたの？」

「凜兄い？」

親父と母さんが俺を心配して声を掛けてくれた。

未来はいつの間にか強く握られた右手に手を添えてくれていた。

なんだろ、凄くやすらぐ…。

気持ち悪さも寒気もなくなってくれた。

その時は気のせいだと思った。

また、ほんの少し、日常が変わった事を…。



第33話： 変化 日常…（後書き）

来週ももしかしたら、更新が遅れるかもしれませんが、“もしかしたら”ですが…。  
なるべく頑張りますので、応援よろしくお願いします。

第34話：返事 優しき夜…（前書き）

今回は少し少なくなっ てしまいました、すみません。

第34話：返事 優しき夜…

- Kazuma Hashimoto -

「ねえ、後で部屋に来て…」

「…ああ………」

そう言って美香は俺の部屋を出て行った。

今は夜、両親はさっきまでかなり飲んでたために、今は寝てしまっている。

とうとう来た…。

今日は朝に喋った以外、美香と喋ったのはさっきが初めてた。

昼飯も夕飯もましてや勉強に関しても美香とは喋れなかった。

いや、美香自身も喋ろうとしなかった。

拒絶の言葉を言っただろうな…。

『ごめんなさい…』

『な……んで…』

『私、好きな人があるんだ…』

『え、それって、まさか…』

『うん、私の彼氏の直樹』

『よう、和磨、よろしくー』

「……………あり得ん……………」

俺は頭をぶんぶんと振って『最悪』な考えを振り払った。

「…そろそろ、行くか……………」

そう呟いて、俺は美香の使っている部屋に向かった。

コンコン

「開いてるよ」

俺は美香の声を聞くと、一度深呼吸してから部屋に入った。

「…話して、昨日の…だろ……………?」

何を言われるんだろう…。

断られるだろうな、はあ…。

「うん、返事……するね…。」

美香はそう言つと深呼吸を一回して言った。

「…すう…はあ…。…いいよ…」

「…ふあ………?」

俺は美香が何に対して言ったのか柄にもなく、間拔けな声を出してしまった。

「………いいよってどういう事だ………?」

なんとか落ち着かせて美香に聞くと、美香が少し顔を赤らめながら言つた。

「何って、昨日の返事だよ…／＼／＼／」

昨日の返事? いいよ?

「…それってつまり、恋人になつてくれるって…事が………?」

俺がそう言つと美香は少しむくれながら…

「だから、さつきから言ってるじゃんか／＼／／」

と、顔が紅いままと言つた。

正直言つてかなり可愛い。でも、俺には聞かないといけない事があるからな…。

「…な…んで……。…拒絶してたんじゃ……」

俺は出来る限り平静を装ったが、どもってしまった。

「拒絶！？ 私が？ しないよ、そんな事。」

「…だが、今日話しかけて来なかったろ……。？…それに、昨日もゴメンって……。」

俺はどうしても信じられず、また聞き返してしまった。

「昨日のゴメンは今は返事出せないのゴメン。話しかけなかったのは和磨が話しかけてほしくないような雰囲気してたから。わかった？」

美香は説明してくれたが、まだ信じられない俺。

「…だ、だが…「チュッ」…!!…」

「ふう、これでも信じられない？」

俺がまだ何か言おうとしたところを、美香は口を封じるように口付けをしてきた。

「いや……。…信じる……。」

俺はそう答えていた。

美香の瞳を見たら…

美香のキスから…

美香の笑顔から…

美香の言葉から…

想いがありありと伝わってきたから…。

「私も愛してるから、昔から…たぶん小学生の時から好きだった。これからは、もっと近くでもっとたくさん一緒にいれる…よね？」

美香はそう言って上目遣いで顔を覗き込んできた。

「ああ、愛してる、美香。今までも、そしてこれからも。」

そう言って互に見つめあった俺達はどちらからともなく、口付けをした。

「和…磨…ふあ…。大…ふ…き…あう…。」

俺は美香のその艶っぽく赤らめた顔を見て、歯止めが利かなくなってしまった。

「…ふあ…ん…和…磨あ…。」

俺は美香と抱き合いながら、同じベッドで共に過ごした。

また、変わっていく日常…

変化は何時も訪れる…

叶った恋、届いた想い…

夜は優しく包み込んだ…。



第34話：返事 優しき夜…（後書き）

そろそろ和磨の恋編は終わります。

もし、感想や要望、疑問があったら送ってください。  
では次回

第35話： 次の日　　ハハハ…（前書き）

すみません更新したつもりでしたが、出来てませんでした… or 2  
ご迷惑お掛けしました。

第35話： 次 の 日      八八八…

- R i n y a   Y a z i m a -

一夜が明け、長かったゴールデンウィークも最終日になった。

「さて、明日になったらまた仕事だ……寂しいな」

家族全員（計四人）で食卓を囲んで朝食を食べていると、親父が本当に寂しそうな顔を未来に見せながら呟いた。

「なんだよ、今回も早いんだな？    もう少し居てもいいじゃん…」

正直本当にそう思った。

親父達が帰って来ても、大体一週間ぐらいしか居られない。

俺がそういう気持ちで言ったのにも関わらず…

「なんでちゆか？    凜矢きゅんはさみちいでちゆか？    そんな哀れな凜矢きゅんの為に仕方なくもう1にちよあああッ!？」

俺は手近にあったフォークを投げた…全力で…。

「あつぶねえだろが凜矢!!    刺さったらどうす」 「あなたッ!」  
…はい…」

親父の叫びを母さんが一言で黙らせた。

やっぱり母さんの方が強いらしい…。

「もういい、何処にでも早く行け…」

俺は不機嫌な顔付きでそう言う tomorrow に迫ったテスト勉強を自分の部屋に向かった。

- G e t u y a   Y a z i m a -

「もう…！ からかい過ぎですよ、あなた？」

凜矢がリビングから出て行った後、未来も勉強すると言って出ていき、結果夫婦二人きりになった。

「まあ、いいんじゃないか？ アイツも冗談が通じる奴だし、今回帰って来たのはちゃんと理由あるしな」

俺の言葉に亜弥は少しうつ向きつつ言った。

「今の所は大丈夫みたいね。 去年の事もまだしっかりとは思いついてないからいいけど……」

俺は亜弥を抱きしめ、そっと呟いた。

「凜矢は強いよ。　　なんたって父親が俺なんだからな」

それを聞くと亜弥は少し頬を赤らめながら満面の笑みで微笑んでくれた。

「うん」

俺は亜弥の頭を撫でながら天井を眺めた。

大丈夫、なんたって父親が俺なんだから……か…。

神がいるなら、助けて欲しいものだ……。

俺は天井を見ながらそんな事を考えていた。

ゴメンな…凜矢…。

- M i k a   I m a i -

やっと…届いたんだ…。

和磨から言ってくれた事が凄く嬉しかった…。

和磨も私を想ってくれてたんだって…

そう思うと悶えてしまいそうになるほど嬉しい…。

私は和磨の寝顔を見ながらそんな事を考えていたが、不意に衝動に駆られて頬にキスをした。

チュッ

「…んにう……」

和磨のその反応が楽しくて、かれこれ十回ぐらいは頬にキスしている。

和磨は寝てる時だけは、かなり無防備で小さな子供みたいになる。

「おーい、和磨？ 朝だよー？」

そう言いながら私が和磨の体を揺すっていると寝惚け目の和磨がムクツと上半身を起こした。

「おはよう………ぐう……」

でも、結局寝るんだよね…。

「おーい、早く起きないとキスしちゃうよー？」

私がそう言った瞬間に和磨は…

「!!…………おはよう、美香」

バチツと音しそうなぐらいに目を見開き、ババツとベッドから立ち上がった。

そんなにキスされなくなかったのかな？　なんかショック……。

「歯……磨いてないからだ……。……そんなに落ち込むな……。」

和磨は私に背を向けながらTシャツを着ている最中だった。

……て、此处で着替えないでよ！　恥ずかしいじゃん！

でも、私は言葉には出さない。

和磨が今、冷静を装おうと必死に為りすぎて、私の前で着替えるなんて気付いてないだろうから……。

照れてる和磨も可愛い〜な〜

「……それはあんまり、男に対する褒め言葉じゃないな……。」

「……ははは……ゴメンね……。」

なんで昨日までわからなかったくせに、分かるようになったちゃっ

たんだろ…。

でも、凄く嬉しいな。

和磨と心が通じてる証拠だね、きっと。

でも、和磨が居る所では、悪い考えはよそうと思った私なのでした。

「…賢明だな……」



第35話： 次の日      ハハハ…（後書き）

今回も少し少なかったです。  
和磨の恋編終了しました。  
ありがとうございます！

第36話：生徒 総会 会長…（前書き）

新キャラ？が登場です。

未だにゴールデンウィーク終わった直後っていたい…。

第36話：生徒 総会 会長…

- R i n y a Y a z i m a -

ゴールデンウィークから数日が経ち、今日はテスト最終日だ。

ゴールデンウィークの猛烈な勉強？ のお陰か、なかなかの手応えを感じた今回の中間テスト。

皆もどうやら、結構な手応えがあるらしい。和磨に百合、そして瑠衣はトップ3を何時も争っている程の実力らしく、互いに火花を散らせていた。

麻美や美香は50番以内にはいるし、俺も一応は全教科平均点は超す。

叶や未来、魅奈ちゃんの一年トリオもかなりの手応えがあるようで何よりだ。

うん、父さんは嬉しいよ……。

「何言ってるのよ、アンタは…」

俺の隣に居る麻美が、久しぶりに俺のプライバシーを覗き見てツッコミを入れる。

…まあ、突っ込んでくれると思ったからわざと考えただけど…  
…。

そして今は生徒総会の為に、体育館に来て、座っている所だ。

因みに言っておくと、直樹は悲鳴を上げていた……テストに関して…。

俺はテストが終わった瞬間、皆が『終わったー！』や『か・い・ほ・おおおおお！』や、『我、此処に帰還せり……』等の言葉をそれぞれに出している中で、一人だけ『寒い……寒気がする……絶対に頭が痛くなるような、悪い事が起こる前兆だ……』と、青ざめた顔で呟いていたんだ。

それにも関わらず、サボと言う名の逃避行に旅立とうとした瞬間、『アンタもちゃんと行く……！』と麻美に強引に連れて来られてしまったのだった。

「…それでは、今学期初になる…生徒総会を始めます…」

とりとめのない馬鹿な考えをしていると、何時もながらに暗い声で話し出す生徒会副会長さんが司会を始めた。

「…それでは…先ず校長からの話をどうぞ…」

そう副会長が言うと、校長が壇上に上がり、無駄に長い話しをし

始めた。

俺は、自らの意識を手放し、夢の世界に旅立った。

何分経っただろうか、俺は未だに夢の世界を満喫していた。

……………！？

しかし、突如としてまた寒気が襲った。

まさか、この寒気の原因って……

その時、無情にも呼ばれた名に、まだ何も起こっていないのに頭が痛くなった。

「…それでは次に、生徒会長からのお話です…」

その副会長さんの言葉と共に、壇上に上がったのは、結構なイケメンであり、四騎士の一人にして、唯一の三年の奴だった。

「やあやあやあ、諸君！ 私こそがムスカ大s「ゴホン！」だ！  
ハハハ、人がゴm「ゴホン！」のようだ！」

たった一言を見ただけでも、アイツがかなりの変人で、副会長が暗くなる理由がありありと分かる。

しかも、何故かアイツは一年の時から会長を務め、これで3連覇を果たしている。

「さて、諸君！ 今日君たちに朗報があるぞ！ それは………期末テストがなくなった事だ！！」

「……………」

今、体育館を支配しているのは呆気に取られた皆の沈黙であった。

「以前、私は校長室へ向かい校長を恐れ「会長！」…もとい、脅「会長！」…もとい、説得をした！」

アイツが会長としてかなり危ない発言をした瞬間に、声で被せる……いわる『バキューン！』だ。副会長が可哀想で仕方ない。

「それは以前にさかのぼる……」

その副会長の気苦労を知らないであろう奴は、話をどんどんと進めて行く。

「この学園の10人にアンケートを取ったところ、一学期末のテストは必要ないと言っ意見が多かった！」

いや、10人ってかなり少ないだろ……。しかも、意見があったからって流石に期末テストを無くすなんて……。

「実際、私も期末なんてめんどくさ「ゴホン！」…もとい、疑問に思っていた。それを校長に訊いてところ、『い、いや、だが、しかしたね…』となかなか答えてくれない。だから僕は、一枚の写

真を見せて、校長を配k「ゴホン！」… もとい、説得することに成功した！」

コイツは絶対に生徒会長にはいけなかったんじゃない？ と、かなり疑問を覚え、俺は眉間を抑えながら、副会長さんを見た。

そこには、俺と同じように眉間を押さえている副会長さんがいた。きっと、俺よりも関わりを持っている副会長さんは俺の数倍は辛いんだろうと改めて思った。

「そして、この一学期に期末はなくなった！」

ざわざわ…

やっと話しが終わったのか、まだざわめきが終わらないのに、会長は礼をした後、壇上から降りようとした。が、何を思ったかまた戻ってきた。

うおっ、また寒気が…！

「そうそう、忘れてたよ！ 2 - A、夜島 凜矢、橋本 和磨、姫宮 直樹、以下の者は放課後、オカルト研究部まで来てくれ！ それじゃ！」

そう言う奴は壇上を後にした。

はぁ、嫌な予感的中&マジで頭イテエ…。

俺達名前を呼ばれた3人は、全員眉間を押さえて呆れていた。



第36話：生徒 総会 会長…（後書き）

彼は生徒会長、名前はまだ無い。  
今のところ、重要な人物になるかわ不明です。

第37話：平穩 親友：（前書き）

すみませんm（――）m

更新が滞りました。

反省はしています…。

まあ、生暖かい目で見守ってください。

第37話：平穩 親友：

今日と言つ日をこれまで忌々しいと思つた事はない。

それもこれも、全てはあの生徒会長、神零<sup>じんれい</sup> 健吾<sup>けんご</sup>のせいに他ならない。

「しかし、急に呼び出したもんな、しかも才力研」

直樹が、なんとも呑気に手を頭の後ろで組みながらなんとも面白そうに言った。

今は、才力研の部室までの廊下を和磨と直樹と俺の三人で歩いている最中だ。

因みに、分かると思うが、才力研とはオカルト研究部の略だ。

「でも、なんで俺達なんだろうな？」

俺は、隣で一緒に歩いている和磨に訊いてみた。

「…さあな、俺にも分からん……が、俺達の共通点は同じクラス、四騎士とか言つ称号？、後、部活に入っていない……ぐらいだろ……」

どうやら、和磨もわからなかったらしく、アゴに手を当てながら、

思案顔で答えた。

「あれ？ 彼女いないも共通点じゃね？」

直樹が下らない事を宣ったせいで、和磨が気まずそうにそっぽを向いた。

中間テストの初日の放課後、和磨と美香が瑠衣や百合、夏芽に一年トリオ等、仲が良い連中を集めて報告してくれた。

「…一昨日から、俺達付き合う事になった」

俺と麻美は、前日に和磨達に訊いていたから、驚きはなかった。

しかも、女性陣も驚きは無く、安堵や喜びの声を美香にかけていた。

「はあ！？ 和磨が俺達の毒神同盟（独身同盟）を裏切っただど！？」

「はあ…」

またこいつは訳の分からん事を。

「んな、同盟に入ってた記憶は俺には無いんだが……和磨は？」

俺は和磨に向かって訊いてみた。

「…入っている訳がないだろう…」

「だよな…」

和磨も入っていないようで安心した。

「くそーッ！ 俺にもラブラブコメコメの夢があるのにーッ！」

「だまりなさい！」

ボコッ

直樹がわーわーと叫び始めると、麻美が本当に煩そうに殴ってから、また女性陣の元に戻って行った。

よく見ると皆、直樹の事をかなり冷たい目で見ていた。

俺は、何も言わずに直樹の肩に手を置いてやった。

「ぐす……お前の同情なんて要らないやい……うえゝん……」

「と、言う事があってまだ根にもつてると」

「凜矢は仲間だよな！？ な！」

直樹は俺に詰め寄るように顔を近づけながら叫ぶように言ってきた。

「まあ、今はな……」

「…お、おい、凜矢……お前まで…」

俺が直樹の言葉に同意してやるなんて思ってなかったのか、和磨が何時ものクールさを無くして、明らかに動揺した顔になった。

「だってよー……俺だって悔しいんだよ」

「…い、いや、その気持ちも分かるが…」

俺が拗ねるように言うと、和磨はまだ動揺した顔でしどろもどろに喋った。

さて、そろそろ虐めるのは止めてあげるかな。

俺達三人は笑い合いながら、楽しく廊下を歩いていた。

こういうのって、けっこう良いな、青春って感じがして…。

俺は嬉しさで緩む顔を少し隠しながら、他愛ない話をしていた。

「さーて、着いたつと」

今、俺達の目の前には『オカルト研究部』と書かれたドアがある。

「なんてゆーか、開けるのに戸惑うな…」

流石に、バカの直樹でも気が引けるらしい。

何故なら、そのドアには『待っていたよ!! 三人共!!』と大きく書かれた紙が張ってあったからだ。

「『はあ』…」

俺達三人は、溜め息を八もらせた後、ゆっくりとドアを開いた。

パンッ！パンッ！

「やあやあ、待っていたよ！ 諸君！」

俺達がドアを開くと、其処にはクラッカーを持った奴と副会長さんが居た。

第37話：平穩 親友…（後書き）

今回も少し少なかったですね…。  
まあ、気にしません！



第38話：昔話 才力研…（前書き）

この頃暑すぎます（^ー^；）  
作者もこの暑さのせいか、悪友と2日に一回位しか部活に行かなくなっていました…。  
去年の二の舞です（+o+）

第38話：昔話　才力研：

「あれ、他の部員は？　普通なら活動時間だろ？」

俺は部室に入ってすぐ、クラッカーを持っている二人には敢えてツツコミを入れずに大きめな部室の割に、二人しかいない事が気になり、訊いてみた。

「部員は我々で全員だよ！」

俺が訊いた事に、会長はまるで宣言するように、高らかと人差し指を突き出して言いはなつた。

うん、指を突き出す意味がわからん。

「…まあ、こんな部屋では…な…」

和磨が周りを眺めながら、溜め息混じりにそう言った。

才力研の部室は、それはもう怪しげな黒いカーテンに、如何にもな本が所狭しと積み重なり、そして、部屋の明かりは蠟燭ろうそくと、怪しすぎるにも程がある。

こんな怪しすぎる部屋、入った瞬間に逃げ出すわッ。

「いや〜、雰囲気を追求め過ぎてしまつてね〜！」

「…一応、止めたんですが…」

会長はいや〜と頭を書きながら照れ笑いをし、副会長さんは苦笑していた。

しかし、どんな追求の仕方したら、此処まで怪しげになるんだ？ もつ、そこら辺にある占い屋なんて目じゃない処か、黒魔術の集会場と間違える位だ……いや、見た事ないけど…。

「それで？ 俺達に何の用なんだ？」

俺は、この部屋に入ってから、何回吐いたか分からない溜め息を吐きながら、俺は当初の目的を訊ねた。

「それはだね……まあ、先ずはこれを見てくれ！」

会長がそう言つと、副会長が黒い一冊の本を持ってきた。

「いや〜！ 僕も調べていてとても驚いたんだよ〜！」

そう言つた会長から渡された本、その背表紙には『オカルト研究部〜同じ穴のむじな達〜』と書かれていた。

はつきり言つていいか……何このネーミングッ！ 中を見たら、どうやらメンバーの紹介が載つてゐる本らしいけど……ネーミングが

絶対におかしい！

だが俺は、それをツツコむのを止めた。

「ネーミングがおかしいだろ！？　どんなホラー映画のタイトルだこれは！？」

と、俺がツツコミたかった言葉の通りに直樹がツツコミを入れたが…。

「何を言ってるんだい？　中を見ただろ？　それはメンバー紹介の本さ。決してホラーなんかでは無いよ？」

そう、コイツにまともにツツコミを入れると正論で返される。

俺も初めて会った時に嫌と言うほど学んだが、バカのせいかそれとも意地か、直樹だけはめげずにツツコミ続けている。

「……」

だが、いつも完敗で、直樹が何も言えなくなってしまう。

「？　まあいいや！　それでだね、君たちに見てもらいたいのは創立メンバーのページを開いてみてくれ」

会長は、直樹のだんまりを疑問に思ったようだが、そのまま話を進めた。

えーっと…創立メンバー、創立メンバーっと…。

「……………おお、あつたあつた…って……………え…？」

「そう！ それを君たちに見せたかったんだよ！」

其処には、初代メンバーの簡単な紹介と集合写真が載っていた。

副部長 夜島 月矢

（やじま げつや）

紹介 貧乏人で不運でモテモテな羨ましいのか嘆かわしいのか分からない奴

そして、親父の名前を見つけた。

ま…さか……親父が同じ学校に居たなんて……しかも、こんなヘンテコな部活の創立メンバーって…。

「どうだい！？ 驚いたろ！？ これを初めて見た時はまさかと思っただけだね！」

俺達が言葉を失っていると、まるで勝ち誇ったかのように、得意気に会長が話した。

「…しかし、驚いたな……凜矢の親父さんのこともそうだが……この写真も驚いた…銃や刀を持ってるんだから…」

俺もその写真を見た瞬間、かなり驚いた。

今では…と言うより、昔から刀と違って持つてると犯罪じゃないの？ あれ、昔は良かったんだっけ？ なんだか分からなくなってきた…。

「こういうのって銃刀法違反じゃないのか？」

かなり久しぶりな気がする直樹の真面目モード。 言ってる事もなかなか真面目だ。

俺は改めて写真を見る。 其処に写っているのはこの学校の制服を着た男女が並んでいる姿だ。 こう見れば普通なんだが、何故か銃を持つてゐる女の子や、刀を持つてゐる女の子がいる。 親父も今はしていない眼帯をしている。 かなりの違和感がある、この写真自体に…。

「そうだよ！ 僕も其処が気になって少し調べてみたんだ！ すると驚くべき事実を発見してしまったんだよ！」

俺達は息を呑んだ。

「…あゝ、お茶とお菓子を持って来たのですが…」

副会長…空気を読んでください…。

俺達はさっきまで張り詰めていた空気を一瞬にして脱力させてしまい、そのまま副会長の淹れてくれたお茶を貰った。

「…すみません、あまりに長い話しに為りそうだったので、お茶と  
かあった方が良くなりました…」

副会長、貴方は多少天然の気質があると思いますよ…。

「それでは改めて教えよう！ この頃のこの学校は、テロリスト研究部と言う名の部活があったんだ！ その部活はテロリストを研究すると言う活動で、武器の密輸や、学校内での爆破行為…はたまた、学校外では色々な組織と手を組んだりとかなり危険な部活だったんだ…！」

改めてそれを聞いた俺達には緊張がはしった。

「…だが…そんな部は今が無いが…どうなったんだ…？」

隣を見ると、和磨は緊張した顔をしながら、何時もの感情の籠らない冷めたような声で訊いた。

「テロ研は潰れた、いや、潰されたのだよ！ 何よりもこの才力研によって…！」

テロ研…つまりは、テロリスト研究部の略か…しかし、潰した？ この部活が？

「そう！ そして、それを成し遂げたのが、この部の初代メンバーなんだ…！」

俺の親父や親父の仲間が、その犯罪的部活を潰した？

「で、でも、それと武器持ってるのとの関係は？」

俺は驚愕から、少しどもりながら、会長に訊いた。

「つまり、戦ったのだよ！！ オ力研の初代メンバーはこの日本のほとんどに広まっていたと言う、テロ研メンバー達とッ！！」

しかし、まだ信じられん…。 そりゃ、俺は親父から、妖怪とか、人があり得ないだろって思うようなもんがこの世には存在するって聞いてたとしても…。

クシュッ

「…ご、ごめんなさい……真面目な雰囲気でしたから、自分も黙ってようと思って…」

副会長、貴方は天然だったんですね…。 出来れば、顔を真っ赤にしながら、うつ向かないでください。 可愛くて怒るに怒れません。



第38話：昔話　才力研…（後書き）

もう日を跨いだから、作者は明日、登校日です。  
宿題の答えを貰うためだけに行きます。

直「夏はこれからだッ!!」

第39話： 入 部 名貸し…（前書き）

未だに話し中は五月ってね……。

作者、久しぶりにポケモンに夢中になってます  
なんで、ポケモンは何時も楽しいんだろう…。

第39話： 入部 名貸し…

「さて、そろそろ本題に移ろう！」

今までのシリアス感をぶち壊すような明るい顔で、会長は俺達を見回した。

今までのが本題じゃないのかよ……と、心の中でツッコミをいれながら、俺は会長を見た。

「今のが本題じゃないのかよ！」

直樹がこれ見よがしにツッコミを入れるが…

「ハハハハッ！ 誰もそんな事言っていないじゃないか！ 人の話しはちゃんと聞いた方がいいよ？」

ははは…また落ち込んだじゃったよ、直樹。

「…本題と言うのは…なんなんだ？」

和磨が嫌そうな顔して会長に訊いた。

俺もどうせ、下らない事だと確信はしているが、耳を傾けた。

「うむ！ そういう事だから、この紙に名前を書いてくれ！」

そう言って会長が渡してきた紙には『入部届け』と書いてあった。

「まて、何がそういう事なんだ？ しかも、何故入部しなきゃならん！」

「つ、付いていけない……」

流石の直樹<sup>バカ</sup>も会長のペースにはお手上げらしい。げっそりとした顔でそんな事を呟いていた。

「まあ、君たちも理由が聞きたいと思うのでね！ 聞きたいかい？」

そう言った会長の顔は、嫌なニヤケ面だった。

絶対に訊いてはいけない……訊く事は敗けを意味する……。

俺の危機回避能力がそう言うてくる。

「教えてくれ！」

そう言い出した直樹は完璧な、畏に掛かった獣だ。

「なら、しっかりと頼んで欲しいね！ お願いします、会長様とも言っただいものだ……！」

会長が勝ち誇った顔で叫んでいる中、俺と和磨は直樹にアイコンタクトで合図を交わし、部室のドアに向かった。

アイツに関わったのが間違いだったよ……。

「さあ、私に頼んで……え、ちょ、待つて？ 君たち、何処に行こうとしてるの力ナ？」

俺達がドアを開けた時、ちょうど気付いたのか会長がかなり動揺しながら、俺達を呼び止める。

「……けっ」

「……ちっ」

「……おいしい」

「聞こえてるよ！？ 悪態つかないでくれるかな！？ おしいって何よ、おしいって！」

「……早く理由を言え……そして、何故入部届けを出したかを……」

さっき、おいしい発言をした和磨がたまに見るイライラした不機嫌な顔（まあ、普通の時の顔とそれほど変化ないんだけど）で会長に振り返りながら訊いた。

「いや、ね？ 凜矢きゅんのお父さんがこの部の出身だし、チミ達は部活に入ってないみたいだからね？ この部は見ての通り、二人しかないから、入部してくれるよね！？」

かくなり、殴りたい衝動に駆られながらも、会長の説明を聞いた俺達は……

「……やだ！」「」

と、三人でハモリながら嫌そうな顔全開で断った。

嫌に決まってる…。　只でさえバイトもあるし、未来が心配なのに、そんな事に時間を潰したくなんてないっつーに。

「そ、そんな！　これほどまでに頼んでいるのに！　鬼！悪魔！鬼蓄！ドS！」

な、なんだそりゃ……。小学生かコイツは…。

「会長、まだしっかりと頼んではいませんよ…」

今まで静かにお茶を飲んでいた副会長が会長をそう宥めた。

しかし、この人……。なんで落ち着いてお茶を飲んでるんだ？　今までの俺達のやり取りを見てたのに……。この人も何かがズレてるな…。

「三人共！　頼む！　名前だけでいいから書いてくれ！　一人に五枚づつ食券をあげるから！」

会長は顔の前で手を合わせながら、生徒会長とは思えぬ発言を شدした。

「のつた！」

そして、のせられたバカが一人…。

「副会長…会長を止めた方がいいんじゃない？」

この状況を打破出来るのは、副会長しかないんです…。

「今はオフですから、副会長としての仕事は無しです……めんどくさい……」

副会長は最後小さい声で呟いたが、バツチリと俺には聞こえた。

副会長……僕は貴方が何のキャラかわかりません…。

「でも、まあ止めてあげます。凜矢さんの頼みですから…。

………会長、嫌い……」

ゾクッ

さっきまで微笑んでいた副会長から、ヤバいほどの負のオーラが現れた。しかも、微笑んだままだから余計に怖い…。

「は、はひっ！」

会長はピンツと背筋を伸ばして上擦った返事をした。

よく見ると、俺達皆が、背筋を伸ばして固まっている………会長をも簡単に静かにさせるなんて……怒らせないようにしよう…。

「……で、やっぱり駄目かい？」

さっきの事があったせいか、さっきよりも小さい声で伺うように訊いてきた。

「……はあ………わかった……名前を貸してやる……」

「本当かい！？…………キラキラ…」

和磨が根負けした後、会長は無言で俺の方を見た。

くっ、そんな捨て猫のような目で見えるな…。

「ああ、もう！ わかったよ！ だがな、貸すだけだぞ！ 活動には参加しないぞ、忙しいから」

はあ、そんな目で見られたら、断った時に悪者になるだろう…。

「本当かい！？ 流石は我が親友の三人だ！ 何時でも、この部屋に来てくれて構わない！ 自由に使ってくれ、お菓子もあるからね！」

もう…関わりたくない……。

俺達はあれから、入部届けを書き、改めているいろいろな説明をしてもらってから部室を出た。

「もう、夕方だな…」

直樹が外を見ながらそう呟くと、俺も窓の外を見た。

綺麗な夕日がその窓から広がっていた。



「…あの部屋は暗かったからな…気付かなかった…」

俺達は靴を履き替えて外に出た。

「…？ あれって麻美と美香じゃないか？」

一足先に昇降口を出た直樹が、校門を指さしながら言った。

「まあ、行ってみるか…」

俺はそう呟きながら、もしかしたら麻美が俺を待っていたのかも思った。

そして何故か、足が早まり軽い駆け足で、二人の女の子が立つ校門へと向かった。

第39話： 入 部 名貸し…（後書き）

そろそろ、夏休みも後半になりますが、宿題が終わらない作者…。  
怠けすぎですね…（<―>）

第40話： 帰路 雰囲気…（前書き）

家族と静岡まで出掛けて来ました。  
いやゝ楽しかった  
それでは第40話どうぞ

第40話： 帰路 雰囲気…

「よっ、麻美。 今帰るところ？」

俺は校門の所で美香と話している麻美を見つけ、駆け寄った。

「えっ？ 凜矢？ けっこう遅かったわね」

遅かった…か。 俺自身、ここまで遅くなるとは思わなかったよ。

「で、どんな話だったの！？ 会長の話しは」

「…美香…訊いても疲れるだけだぞ…」

和磨は美香にそう告げた後、あの訳の分からない出来事のあった校舎に振り返って溜め息をついた。

「まあ、あの会長だからロクな話しじゃなかったと思うけど…」

「そっぴや、二人とも待っててくれたのか！？ 俺をっ！」

今まで静かだと思ったら、このバカは…。

「え、私は和磨の下駄箱に靴があったから…一緒に帰ろうと…」

「私はあくまで美香の付き添い。 ついでに凜矢と帰えるつもりだっただけ」

「…なんで…なんで俺だけ誰も待っていてくれないんだっ!」

うわ〜んと泣きながら走って行ってしまった直樹に軽く罪悪感を  
感じた。 いや、ほんつつつのちよつとただけだね。

「……まあ、俺達も帰るか…」

「う、うん、そうだね」

和磨に続いて、美香も歩き出し、俺達二人はいつの間にか取り残  
されていた。

「えーっと…俺達も行きますか」

「え、あ、う、うん、そうだね」

「……………」

「……………」

この頃、二人きりになんてなった事が無いせいか、俺達の間には  
沈黙と言う名の気まずい雰囲気の流れている。

近くじゃない距離…。

だからと言って、決して遠くにいる訳じゃない…。

肩が触れるには遠すぎて…

手が触れるには近すぎる…。

俺達の距離を表しているみたいだった。

和磨が幼馴染みである美香と付き合うようになって、どんなに小さい時から一緒でも、異性には変わりないと俺は改めて知る事ができた。

でも、俺にとってはその情報は、あまり嬉しくない情報だった。

今ほどに互いが互いを気にしすぎて気まづくならなかったのに。

「…ねえ、話し聞いてた？」

「へ？ 何の事？」

考え事をしていたせいで聞き逃してしまったらしい。　と言うより、麻美が先に沈黙を破ってくれたようだ。

「いや、ごめん。　考え事してて…」

「まったく…。　今からリムレット行かないかって訊いたの」

あれ？　何時もなら、俺のプライバシーなんて気にする事なく考えている事を知るくせに、今回は何も言ってこないのか……。

麻美も、たぶんこの空気が嫌なんだろうな…。

そう思うと、少しだけさつきよりも気が晴れた気がした。

「そうだな。明日は今まで休んでたバイトを復活するし、マスターにも一応言いに行った方がいいしな。でも、未来が心配だな…」  
「まったく…シスコンなんだから…。それじゃ、行こうか、奢りで」

「ああ、って待て。奢るなんて一言も言っていない…」

俺の言葉をスルーするように、麻美はどんどん歩いて行ってしまった。

「ふう、まあ、奢ってやるか」

そう言つと、その緩和した雰囲気がとても嬉しく、幸せな感じがした。

第40話： 帰路 雰囲気…（後書き）

友達と8月に入ってからほとんど会っていない作者です。  
オリンピック、頑張れ日本！！



第41話：羨望？足踏み…（前書き）

来週で夏休みが終わります…。  
さらばひと夏のアバンチュール…

第41話：羨望？ 足踏み…

リムレットに着いた俺と麻美は、窓際の一番奥の席に向かった。

「やあ凜矢くん、麻美ちゃん。久しぶりだね」

マスターが微笑みながら話しかけてくれた。

「こんにちわ、マスター」

「そういえば、明日から復活みたいだね、凜矢くん。よろしく頼むよ？」

マスターは俺の肩に手を置きながら、ハハハッと笑っていた。

「ええ、休んでた分頑張らせて貰います！」

マスターはたぶん人を安心させる力があるんだろう。優しいお父さんって感じがする。

俺達は席に座り、しばらくすると…

「あの、お客様、ご注文は？」

ウェイターとして俺達に注文を尋ねに来たのは、叶だった。

「え、あれ、先輩？ それに麻美さん？」

叶は俺達の顔を交互に見つつ、驚いているようだった。

「あれ？ 叶ちゃん今日シフトだったんだ？」

そういや、叶は俺とシフトがズレてたっけ…。しかも、ウェイターはそんなにやった事ないって言ってたし……。うん、俺は運がいいんだな（ポジティブシンキング）。

「珍しいね、ウェイターはそんなにやらないって言ってたのに」

とか、考えつつ聞いてしまう俺。

「え？ それは……………／／／」

なんで其処で顔を紅くしたのか、詳しく説明して欲しいんだが…。

「凜矢、あんた叶ちゃんに何かしたの？」

そして、何故か麻美咎められている。

俺、何も悪い事してないのに…。

「先輩や未来ちゃんのお陰なんです！！」

急に叶が叫んで驚いた俺は椅子から崩れ落ちそうになった。

「ど、どういう…意味なんだ？」

驚きのためにバクバクと鳴り続ける心臓は一応無視しつつ、叶の詰め寄るような雰囲気を感じながら訊いてみた。

今の叶の眼には、決心に似たようなものが宿っていた。

「私、暗いから……今までほとんど、親しい人がいなくて……だから、未来ちゃんに話しかけて貰って凄く嬉しかったです。そして、先輩に会って……先輩の周りには明るくて優しい人達ばかりだったから……」

明るい……叶が俺の周りの奴みたになったら……困るな……そして殺される……奏さんに……。

まあ、そんな茶々は入れずに、黙って先を促す。

テーブルの下では、俺の考えている事を見た麻美によって、足を踏まれているが、黙って促す。

「だから……私も明るくなろうと思って……人と接したりするウェイタもやるうかになって……」

叶が言い終わり、ちょっと照れたように笑うと、正直かなり可愛いと思った。

「そつえば凜矢くん。二人はデートかい？」

「え？」

その瞬間、何故かその場の空気が凍りついた気がした。

「え…そうなんですか…先輩…？」

叶は目を潤せながら、うつ向いて訊いてきた。

「い、いや、違うよ！　ちょうど麻美と帰ってたからだって！」

「そんなに必死に否定しないでよ…もう…」

あれ？　なんで俺、必死こいて誤解を解こうとしてんだ？

「そう…なんですか…？」

いつの間にか立っていたのか、叶の上目遣いにドギマギしてしまった。

「あ、ああ、ホントだよ…。　マスター、変な事を言わないでくださいよ…」

はあ、なんだか何も頼んでないのに疲れてしまった。

「ははは　　すまないね、凜矢くん。　お詫びに二人にはパフェをご馳走するよ」

気さくな笑顔を見せながら、マスターは叶を呼んだ。

「さっ、頼んだよ叶ちゃん　喫茶リムレットの看板商品の一つになってるからね、　叶ちゃん特製のパフェは」

リムレットでは、パフェが食べれる時と食べれない時がある。それは、叶が作るパフェは何故か美味しく、他の人が作っても同じ

味に出来ないのだ。結果、叶のシフトの時間&少しの作り置きしか食べられないのだ。

まあでも、この店自体がなかなかマイナーな店のため、それを食べに来る人も少ないのだが……。

ああ、勿体無い……。

「先輩、麻美さん　とびつきり美味しく作りますね」

笑顔でキッチンに向かった叶の背中を微笑ましく見つめていると……。

「……これは、ヤバいわね……」

と、言う麻美の呟きが聞こえた。

「ん？　何がヤバいんだ？」

「え？　う、ううん？　なんでもない、なんでもない……」

麻美は顔の前で手を振りながら、否定していた。

いや、なんでもないって言い方じゃなかったけどな……。

それから、テストやら友達の話しやらで、楽しんでいると、叶が

パフェを三つ持って来た。

あれ？ 三つ？

「私も今日は、もう終わりでいいよってマスターが言ってくれたので……駄目ですか…？」

またもや上目遣い気味に訊かれて、断る事なんてできません。

「うん、一緒に食べよっか、叶ちゃん」

「はい、ありがとうございます」

そう言って椅子に座った叶。

「えーっと、なんで俺の隣なんだろう？」

そう、何故か俺の隣に座った叶。

可愛い娘が隣に座ったら、まあ、かなり嬉しいんだが…。

テーブルの下で何故か足を踏まれてる俺は、どうしたらいいんだろう？

「…麻美さんと、話し易いからでしょうか？」

いや、疑問形で言われても困ります…。

それに、また上目遣いでそんな事を言われたら、もう何も言えないです。

「…もう、なんでも良いです…」

なんだかもう、先が思いやられる。

俺は足を踏まれながら、現実逃避してみようかなと、真面目に考えていた。



第41話：羨望？ 足踏み…（後書き）

叶が、かなり積極的です。  
次回はどうなるやら…。  
作者もわかりません。

第42話： 咄 嗟 前兆：（前書き）

前回は夏休み最後と、二学期始めと言う事で、休みにさせていただけでした。

勝手に休んでしまった事、大変すみませんでした。

総ユニーク数を3万人突破、皆さんのお陰です！

ありがとうございます

これからもよろしく願います

第42話：咄 前兆：

結局、その異様な雰囲気の中で、あまり味わえずにパフェを食べ終えてしまった。

「あの、せ、先輩？」

皆食べ終わり、そろそろ帰ろうとした時、叶が何うように訊いてきた。

なんか、上目遣いがベーシック（基本）になってない？ まあ、身長のせい인데さ…

「どうかした？」

俺がそう言つと、頬を紅くしながら叶は言った。

「えっと……この後、途中まで……一緒に帰りませんか？」

ドキッ

その時、俺の心臓が大きく跳ねた。

「え……あ、ああ……いい……よ……／＼／＼／」

俺はなんでこんなにドキドキしてるんだ？ うわ、絶対に顔が紅くなってる…。

俺はどうにか叶から顔を逸らして、言った。

「…いいよ、途中まででいいなら…一緒に帰ろう?」

どうにか言葉を絞りだして言ったのはいいが、叶を見れない。顔の紅みを落ち着かせようと心みながら、ふと前を見た。

「……………」

麻美がこっちを見ながら、顔を少し歪めていた。

「どうかしたのか、麻美!？」

俺は驚き、テーブルから乗り出して顔を近づける勢いで訊くと…

「う、うう煩い! 真っ赤な顔をこっちに向けるな!」

と言われ、むんずと両手で顔を掴まれたかと思ったら、ぐりんと強制的に叶の方を向かされた。

「ふはへ、ははひゝ（はなせ、麻美ゝ）」

「ぷっ…ふふふふ…先輩、その顔…」

叶が俺の顔を見ながら、笑っている。正直、恥ずかしい事この上ない。

俺は麻美の手を掴んで、顔から放した。

「ふゝ、急に曲げやがって。折れるかと思ったじゃねえか!」

俺は顔が解放された瞬間、そう言いながら麻美を睨んだ。

「煩いな…、私は先に帰るから…」

そう言っただけで立ち上がり、麻美は歩いてリムレットから出て行ってしまった。

「…あれ？　もしかして、拙者の結局俺？」

くそ、してやられた…。

窓から外を見ると、麻美が手を合わせて、何かを喋っていた。

「ん？　ごちになりました…って、やっぱり！」

俺はもう数えるのすら止めてしまった溜め息を吐くと、目頭を押さえた。

「あの、先輩？」

叶が心配そうに顔を覗き込んできたので、俺は慌てて叶の方を見た。

「ああ、大丈夫、大丈夫！　んで、何？」

あぶねえ、あぶねえ…。　また顔が紅くなる所だった。

そんな事を考えながら、俺は叶に訊いた。

「先輩、外で待っていてください。着替えてきますから」

そう言つて奥の方に引つ込んでしまった叶。

なんか、俺独り取り残された感じだな。麻美は……やっぱりもういないか…。

俺は会計を済ませて、外に出た。

外は紅かった。

「夢の中の夕日に近い感じだな。……!？」

くらっ

「なっ…!？」

急に頭がくらつときたかと思つたら体が傾いた。

「…つと、危なかった…」

咄嗟に壁に手を着いたから良かったが、いったい何だつたんだ？意識が遠のきかけたせいかな、少しばおとする頭を気遣いながら、軽く頭を左右に振った。

「先輩？ どうかしました？」

着替え終わった叶が心配そうに寄ってきた。

なんだか、今日は叶を心配させるような事ばかりしている気がする…。

「大丈夫だよ さっ、行こうか」

そう言って俺が歩き出すと、叶も横に並んで歩き出した。

叶はやっぱり性格もあってか、歩くのがゆっくりとしている。

だから俺はその速さに合わせ、叶が前に出たり、遅れたりしないように気遣って歩いた。

「先輩、ありがとうございました」

俺の家から少し歩いた場所、そこに叶や奏さんが住むアパートがあった。

「いや、どういたしまして そういえば、奏さんは？」

今日、奏さんがバイトにいなかったのが気になった俺は、奏さんが溺愛する叶に訊いてみた。

「お姉ちゃんは大学の宿題に追われちゃって……」

「あ…そうなんだ…」

奏さんなら有り得るな……いや、絶対夏休みの終わる一日前に宿題やる人だな…。

「あの、先輩…」

叶がモジモジとしはじめたため、奏さんの事に関する思考を止めた。

「あの、えと……また、一緒に帰ってくれますか…？」

ドキッ

その言葉を聞いた瞬間、俺は叶を抱きしめていた。

ぎゅっ

「せ、先輩！？ ど、どどどっしたんでふか！？」

ヤバイ…可愛すぎる…。 かんだ所も可愛い…。

「叶が可愛かったから…ついな…」

叶の体を解放したが、自分自身が顔を真っ赤になってしまったせいで、叶を直視出来ない。

「せ、先輩！ あの、ありがとうございました！！ それでひゃー！」

そう言うと、叶はアパートの中に入って行ってしまった。



「最後までかんでたな…  
でも、嫌われたかもな…はあ、  
ショック…」

俺はそう真つ赤な空に向かって言葉を発しながら、傷心した心を  
引きずりながら帰った。

第42話： 咄 嗟 前兆：（後書き）

来週からはまた、毎週更新していくつもりです。

第43話：溜め息 摩訶不思議…（前書き）

今回は前書きに書く事はありません（＾o＾）

第43話：溜め息 摩訶不思議：

「お兄ちゃん、待ってたよ」

俺はまたこの世界に来ていた。

「ああ、こんにちわ。それより、なんで俺がお兄ちゃん？ 後、君の名前って？」

俺は、この頃夢の中に馴染み始めたらしく、だいぶ感覚が楽になってきた。余裕のできた俺は今まで訊けなかった事を女の子に訊いてみた。

「？ お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ？ 後、私の名前は……だよ」

女の子が名前を言おうとした時、強い風が俺達に吹いた。

「え？ 聞こえなかったよ。 名前は？」

俺はもう一度彼女に訊いてみるが、女の子は一瞬寂しそうな顔をする、満面の笑みを作った。

「まあいいじゃん、そんなの いつか分かる時がくるからさ」

「え、ちょ、ちょっと!？」

彼女はそう言うと、俺の腕を掴み、引きずるようにして歩き始めた。

「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんはその子が好きなの？」  
彼女はこちらを振り向きもせずにそう告げた。

あの子？ あの子って誰だ？

「あの子って？」

俺がそう言っていると、彼女は立ち止まって振り返った。

「分からないならいい…。でも、お兄ちゃんも悪いんだから…」

俺が悪い？ いったい何の事なんだ？ 分からない事が多すぎるぞ…。

彼女は掴んでいた腕を放し、スタスタと歩き始めた。

「え、ちょっと！？ おーい！？」

「もう時間！ じゃあね！」

俺が必死で呼んだのに、彼女は振り向きもせずにそう言った。

……どうやら、怒らせちゃったみたいだな…。

また、夢が終わりを告げた。

何時もと違うのは、強制に夢が終わったのと、体がとても重く、

まるで久しぶりに動かすような感覚が残った事だ…。

「今は……5時……？ アイツめ、やっぱり強制的に夢の中から追出しやがったな……」

ふああ、と大きな欠伸をしつつ、一階に降りた。

「え！？ 今日はまた珍しく早いね、凜兄い！ 今日は洗濯物は中にほした方がいいかな」

朝から皮肉を言ってくれる愛しのマイシスター。

だがな、未来よ……。俺は眠いんだ、だからな……

「……………バタツ」

「ふえ！？ 凜兄い！？ どうしたの？ ねえ！？」

気付いた時、俺はソファーに寝かされていた。

「あれ？ 俺は？」

「ああ、凜兄い、起きた？ もう、昨日も夜更かししてたんじゃないの？ はい、朝ご飯」

未来はそう言つと俺の前に朝ご飯を置いた。

今は6時半か…。何時もの時間だな。

「急に倒れるから、すつごく心配したよ…」

未来が咎めるように言う様が、可愛くてつい頬が緩んでしまった。

「ごめんごめん…。それじゃ、とつとと食っちゃうか」

今日もまた、二人の団欒で幕を開けた日常。

家の外に出ると、麻美が玄関の前で待っていた。

「おはよ、早いお出迎え、ご苦労様です……ふぁ……」

まだ眠気が抜けてないせいで、また欠伸が出てきてしまった。

学校に行ったら、もう一眠りするかな…。

「……おはよ…」

麻美はそう言つと、先に歩き出してしまった。

「凜兄い、麻美さんに何かしたの？」

未来が少し怒った口調で言ってきたが、俺は何時もと違う麻美の態度に気を取られてしまって、返事すらできなかった。

「喧嘩したなら、早く仲直りしなよね…」

未来はそう言つと、麻美の所に走って行ってしまい、俺が一人だけになった。

はあ、いったいなんだつて言うんだ、一昨日から…。叶には避けられるわ、夢の中の女の子には怒鳴られて、強制的に夢から追い出されるわ、麻美はなんだか何時もと違うし…。

「学校に着いたら、和磨にでも相談してみるかなあ」

どうしようかと考えながら、一人の登校を行う羽目になった。

- A s a m i H o m u r a -

朝、思ったより早く起きてしまった私は、そのまま用意を済ませ、何時もよりも早い時間に家を出ることにした。

「あれ？ 珍しいわね、何時もなら時間ぴったりに出るのに」

お母さんが私に話しかけてきたけど、私は生返事を返して家を出た。

「いつてきます…」



「気をつけてね」

私は家から出ると、お向かいにある凧矢の玄関に立った。

あの時、なんで一緒に帰らなかったんだろ…。

一昨日のあの日から、2日間ずっと考えている思考にまた捕らわれてしまう。

ダメだな、私って……自分でも思っけど、可愛げは無いし意地っぱりだからな…。

目の前にあるドアがとても大きく、重そうな雰囲気漂わしている。

凧矢と何喋ればいいんだろ…。　と言うより、顔合わせづらいよ。

インターホンに指を向かわせるけど、押す勇気がわからない。

「はあ…」

これで何度目の溜め息だろ……もう幸せも飛びっぱなしだよ…。

「全部凧矢のせいなんだから…」

そんな事を呟いても何も変わらないな、と、再確認させられてしまった。

「凜兄いゝ、そろそろ出よ」

中から未来ちゃんの声が聞こえたと思うと、足音が玄関に近づいてきた。

私は急いでドアの前から離れた。

「おはよ、早いお出迎え、ご苦労様です……ふぁ……」

まだ眠気が抜けてないらしい凜矢が、欠伸を出しながら、家から出てくる。

まったく呑気そうに……誰のせいで私がこんなに悩んでると思ってるのよ、もう。

「……おはよ……」

私はたった一言そう言っで、先に歩き始める事にした。

やっぱり、なんて声を出していいかわかんないよ……。今も声がかす掠れそうになったし…。

まったく私は可愛げがないよ…。

ホント、意地っ張りだ…。

「はぁ……」



第44話： 入部 酷い…（前書き）

今回は、少なくてすみません…。  
だいぶ、読んでくださる人が増えていて、作者も感激しました。  
それでは第44話どうぞ

第44話： 入部 酷い…

「学校に着いた俺は早速俺や直樹よりも一足進んでいる和磨に話を伺う事にした」

「…お前は誰に話してる…?」

まあ、学校に着いてもなかなか言い出せず、こつやってギャグを入れてるわけだが…。

「で？ なんで麻美さんが何時もと違うのかと言う訳だね!？」

何故か、会長が朝もはよから教室の俺の席に座って寝ていやがった。

「なんでお前が此処にいるのかを、さっきから訊いてるんだが?」  
俺は一度も今朝の麻美についての質問はしていないのに、この会長は知ってやがる。

「あの、占いなら私出来ますよ?」

副会長…アナタやつばズレてるよ…。

「いや、先週のあの話しの返事を貰おうと思ってね?」

「はつきり言つて、俺はパスだぞ?」

「…俺もだ…」

俺達が断ると、会長は不適な笑みをつくった。

「直樹氏は僕に賛同してくれたがね！」

「……は？」

会長の一言で俺と和磨の動きが止まった。

アイツなら、モテナさそうって理由だけで、あんな薄気味悪い部活なんてやらないと思うのに……。

「いや、占いで相手の心の中を覗きましょうと言ったら興味を持つて、催眠術も学べるって言ったら即入部ってね！」

あの馬鹿変態やろう！ 完っ全に下心丸見えじゃねえか！

「……直樹が入部した所で……俺達は入部しないぞ……」

「まあ、君達ならそう言うと思ったからね！ もう手は打ってあるよ……」

そう言っで会長が出したのは、入部届だった。しかも、俺達の名前と印鑑も押されている。

……印鑑？

「なんで印鑑まで押されてんだよ、これ！？」

俺が会長から奪い取った入部届にはしっかりと印鑑が押されてい

た。

「ハッハッハ！ 上手いだろ！？ これは僕が作ったのだよ！」

とうとう犯罪にまで手を染めたのかコイツは…。

上手いどころか、本物と変わらない出来栄えだし…。

「だが、どれだけ上手い入部届でも、破っちまえば…！」

「無駄だよ！ 入部届はもう出してしまったからね！ それは下書きさ…！」

会長がそう言った時、俺達は完敗したとはつきりわかった。

「もう、入部する以外にはないって事か…」

「まあね！ たまにでいいから部室に来てくれればいいよ！ 今朝はそれを伝えに来ただけだね！」

「なら、今までのやり取りはなんだったんだ…」

「いや、面白かったよ！ それでは諸君、さらばだ！」

「あの…麻美さんの事で占いかして欲しかったら部室まで来てください」

会長はそう言つと副会長を連れて、颯爽と教室から出ていった。

「まるで台風みたいね、会長」

会長達が出ていった後、さっきまで麻美と喋っていた美香がこっちに来た。

「あ、凜矢、ちょっと来て」

美香は何かを思い出すと、俺を連れて階段の踊り場まで来た。

「どうしたんだ？」

「ねえ凜矢…。麻美の元気が無い気がするんだけど…なんで…？」

流石に美香もわかつたらしく、俺に訊くが、俺が逆に知りたい。  
さすが

「凜矢がなんかしちやったんじゃないの？」

美香も未来と同じ事を言うなんて…。と言うか、俺が関係してるのは確定事項なんですね…。

「まあ、凜矢の場合気付かないって事の方が多いからね…鈍の感だから…」

あれ、これって怒っていいのか？　なんか知らんが絶対にけなされてるのはわかる。　やっぱ怒ってやろう。

「おい、さつきから…」

「何かは知らないけど、早めに解決しなさいよね！　んじゃ、教室戻ってるから！」



「鈍感鈍感煩い…ってもういないし…」

なんか、今日に限って女性からの扱い酷くない？

かなりのモヤモヤ感が残ったが、俺は我慢して教室まで歩いてく  
だった。

「誰かさんの馬鹿野郎…」

第44話： 入部 酷い…（後書き）

なかなか早いもので、書き始めてから半年…応援ありがとうございます  
ます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8906d/>

---

MY LIFE OF SIMPLE

2010年11月9日15時23分発行